

第3節 繩文時代前期の遺構・遺物

1 堅穴建物

C地点南西部において当該期の堅穴建物3軒を確認した。3軒の堅穴建物(SI 7～9)はBK 1～BI 4グリッド周辺に近接し、その北側では縄文時代前期後葉の土坑墓の可能性があるSK392を確認した。SI 7(図15～図21)

検出状況 C地点BK 1～BL 2グリッド、SK437の底面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で6.20m×4.49mである。堅穴建物と重複するSK437は、SI 7上面に広がる縄文時代前期の大型土坑で、深さは約10cm程である。その底面で、本遺構の掘方をやや明瞭に確認した。本遺構の南部が発掘区外に広がるが、全体の形状は円形と想定できる。SP142は、地床炉の焼土範囲を掘り込んでおり、鉄塊系遺物と思われるもの(詳細は第4章に示す)も出土していることから、新しい時期のものである。

埋土 3層に分層した。暗褐色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積する。2層と3層の埋土はよく似るが、2層には径10cm程の円礫が混じり、遺物を多く含む。埋土中にブロックや礫を含むことから人為的に埋め戻されたと考える。

壁 壁面は緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.24mである。

床面 ほぼ平坦である。SI 8、SI 9と比べて床面に円礫が多く認められる。貼床や硬化面は確認できなかつた。床面で検出した遺構は、地床炉1基、柱穴4基である。環状に配置されたP 1～P 4が柱穴と考えられ、P 1とP 3とでは柱痕跡を確認した。

炉 床面中央で不整円形の土坑を検出し、その底面で被熱範囲を2ヵ所確認したため、これを地床炉と判断した。

遺物出土状況 1層からの出土が大部分を占め、特に中央部からまとめて出土した。

出土遺物 1～68は前期後葉の縄文土器である。1と2は深鉢A 1類で、口縁部外面に斜行する刻みを施した突帯を1条ないし3条巡らす。3は深鉢A 1類で、口縁部外面に斜行する刻みを粗く施す突帯を2条巡らす。4は深鉢A 1類で、口縁端部に幅広の刻みを施し、口縁部外面に2条の突帯を巡らした後、LR縄文を施す。5は深鉢A 3類の波状口縁土器で、3単位となる波頂部に2条の短い縦位突帯を貼り付け、その間に2条の突帯を口縁部に沿うように張り付ける。突帯上には粗い刻みを施す。6～8は同一個体の深鉢B 1類と思われ、口縁端部に突帯による波状文を施し、口縁部外面には粗い刻みを施した突帯を2条巡らす。9は深鉢B 1類と思われ、口縁端部に粗い刻みを施し、口縁部外面には粗い刻みを施した突帯を1条巡らす。10は深鉢B 1類と思われ、口縁部外面に2条の突帯を巡らす。11は深鉢C 1類と思われ、口縁端部に縦位の短い突帯を貼り付け、口縁部外面に2条の突帯を巡らす。突帯貼付け後にLR縄文を施す。12は深鉢C 1類で、平行する2条の突帯の間に斜行する突帯を貼り付け、LR縄文を施す。13は深鉢C 1類と思われ、C字状の刺突を伴う突帯により文様を構成する。14は深鉢D類若しくはE類の胴部で、く字状の押引きを伴う突帯により文様を構成する。15は半截竹管による沈線文を施すことから深鉢F類としたが、口縁端部から外面にかけて梯子状となるように刻みを施す突帯を貼り付けることから、深鉢B類に含めるべきかもしれない。16と17も半截竹管による沈線文を施すことから深鉢F類としたが、口縁部外面に2条の突帯を巡らすことから、深鉢B類に含めるべきかもしれない。18は深鉢F類で、口縁端部に2個一対の橢円形小突起を4箇所に配置する。口

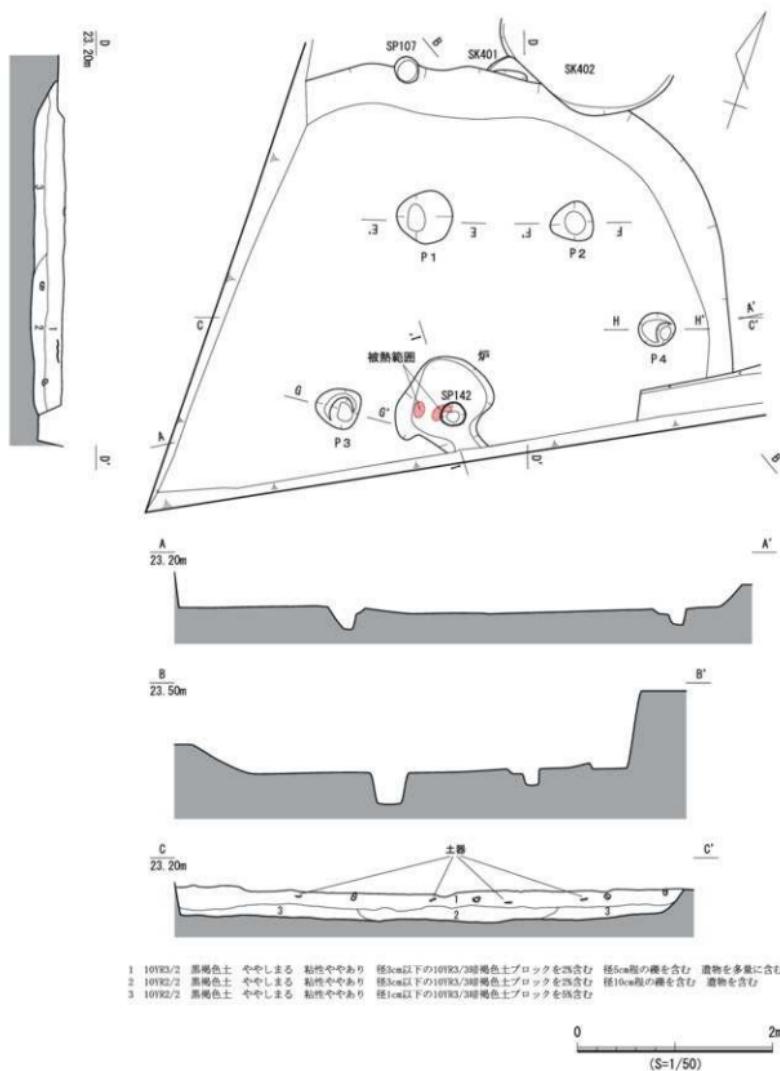


図15 SI7 (1)

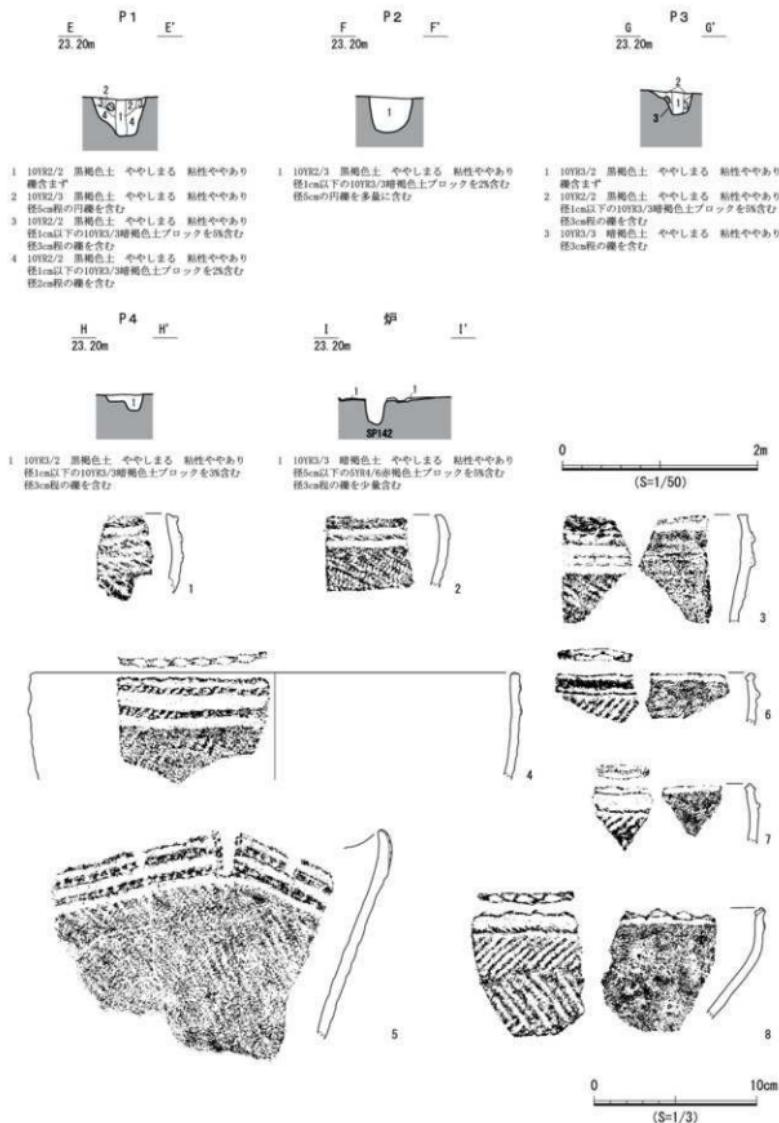


図16 SI 7 (2)

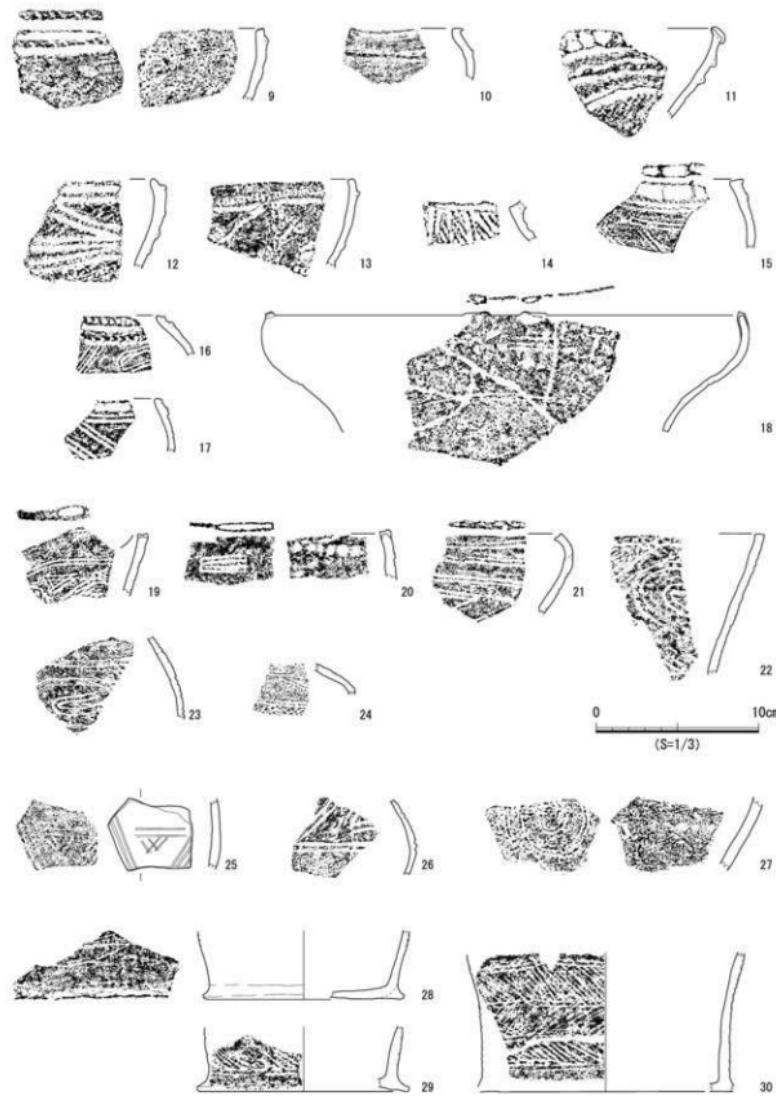


図17 SI 7 出土遺物（1）

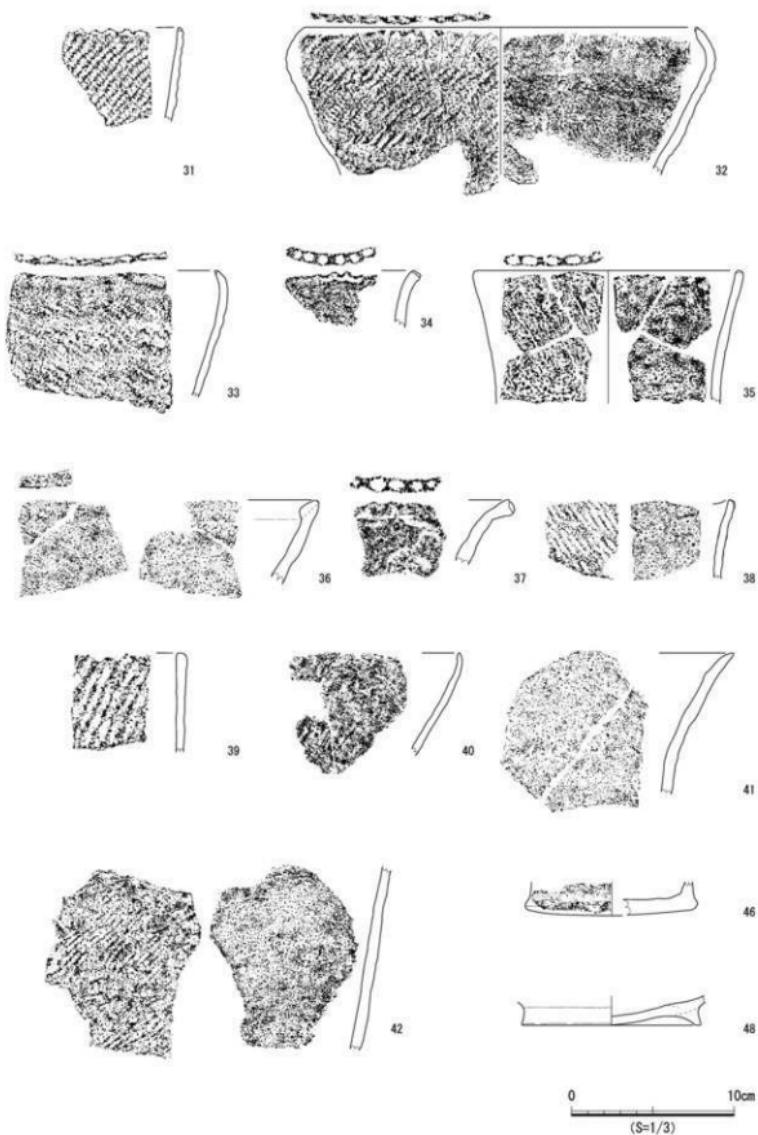


図18 SI 7 出土遺物 (2)

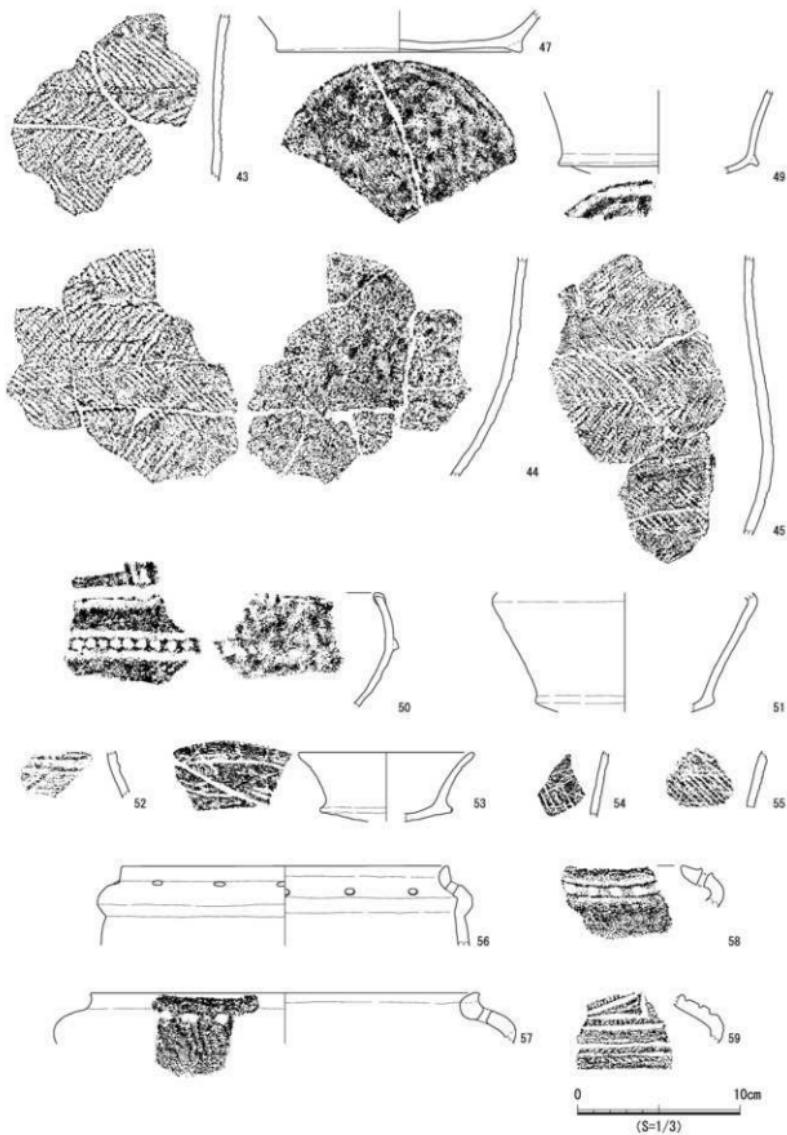


図19 SI 7出土遺物（3）

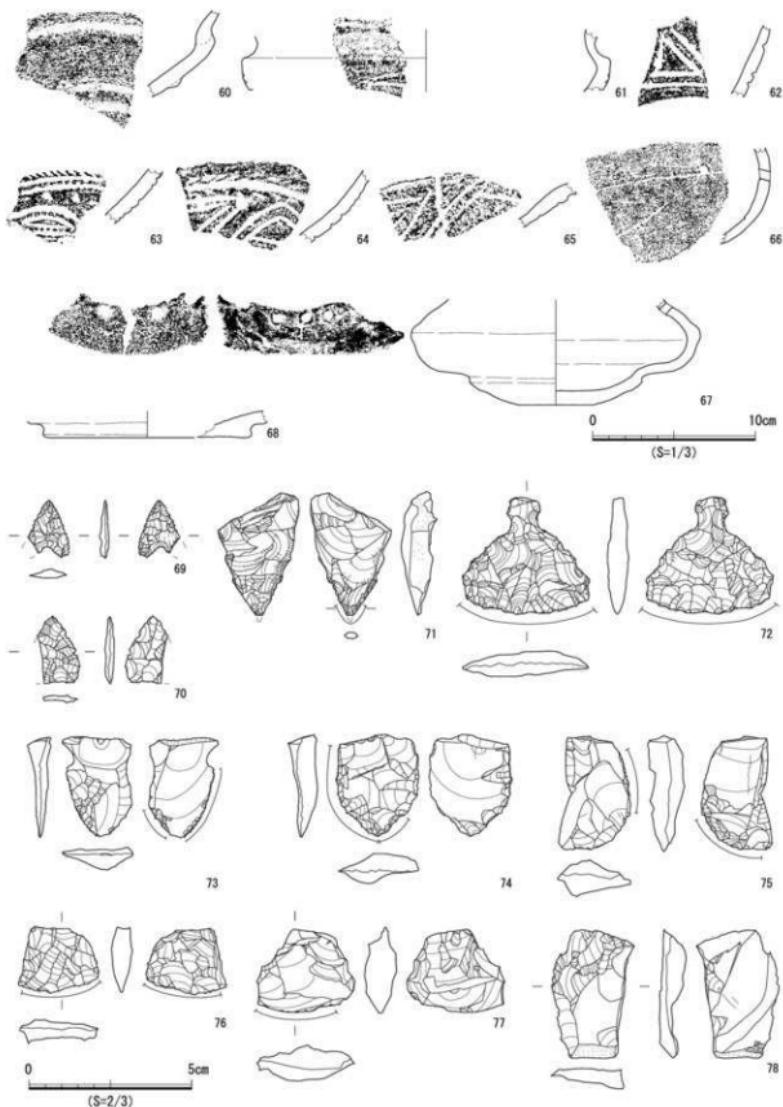


図20 SI 7 出土遺物 (4)

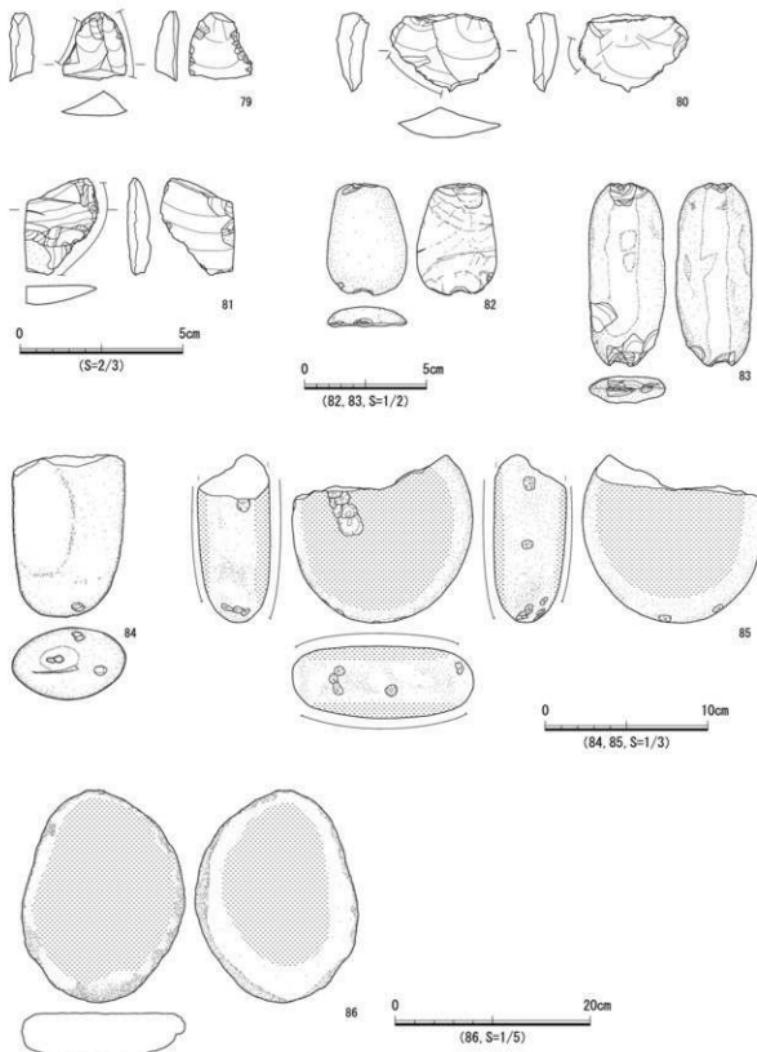


図21 SI 7 出土遺物 (5)

縁部から頸部にかけては半截竹管による沈線文を施す。19と20は深鉢F類で、口縁端部に梢円形の小突起を付け、口縁部外面に半截竹管による沈線文を施す。21は深鉢F類で口縁端部に面をもち、口縁部外面に半截竹管による沈線文を施す。22は深鉢F類であるが、口縁部が直線的に開く器形である。口縁部外面に半截竹管による沈線文を施す。23～27は深鉢F類の胴部片である。28～30は深鉢F類の底部で、外面が張り出す。胴部下半まで半截竹管による沈線文を施す。31～41は深鉢G類である。31～35は口縁端部に幅広の刻みを施す。36は口縁端部内面を肥厚させ、口縁端部に刻みを施す。直線的に開く器形となるため、鉢若しくは浅鉢の様な器形となる可能性もある。37は口縁端部に円形の刺突を施す。38～40は外面に繩文を施すだけ、41は外面の摩滅が激しく調整不明である。42は外面にLR繩文を施す胴部片で、43～45は同一個体で外面に羽状繩文を施す。また、繩文原体の開く末端を縛った縄と思われる痕跡が確認できる。46～49は底部片で、46と47の底部外面はやや張り出し、48と49は底部外面が張り出す。50は口縁部が内湾する鉢と思われる。口縁端部に縱位の突帶を要所に貼り付け、口縁部外面に刻みを施す突帶を1条巡らす。51は底部外面がやや張り出す鉢で、胴部は無文である。52は刻みを施した突帶を貼り付けるが、赤彩があるため鉢に含めた。53は小型の鉢で、張り出した底部外面には刻みを、胴部には半截竹管による沈線文を施す。54と55は半截竹管による沈線文を施す胴部片で、赤彩があるため鉢に含めた。56～58は口縁部が外反して立ちあがり、一定間隔で円孔をあける浅鉢である。59～65は沈線による文様を施す浅鉢で、66は無文で2個一対の焼成前穿孔がある。67は口縁部を欠くが、口縁部下に円孔をあけた無文の浅鉢である。68は浅鉢の底部である。69と70は打製石鏃である。69は石鏃1b類で、脚部は丸い形態となる。片側の脚部を欠損する。70は石鏃2類で、片側の側刃から基部にかけて欠損する。71は石錐2類で、両側刃に加工を加えて錐部を作り出し、錐部断面は菱形となる。先端がやや欠損する。72は石匙で、両面調整により刃部を形成している。73と74はスクレイバーである。73は3a類で、両側刃に外湾する刃部をもつ。74は3b類で、両側刃に外湾する刃部をもち、末端で先端を形成する。75～77はRFである。78～81はMFで、側刃や末端刃に微細な剥離痕が認められる。82と83は打欠石錐で、ともに自然石を利用したものである。83は両面に帯状痕が認められる。84と85は、磨石・凹石類である。84は磨石・凹石類4類で、側面に敲打による平坦面が認められる。85は磨石・凹石類2b類で、平坦面に磨痕と敲打痕が認められる。86は石皿で、扁平な自然石を用いている。

時期 床面付近から散在して出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の清水ノ上III式、近畿地方の北白川下層IIc式、尾元遺跡前期後葉1期に併行する時期のものと思われ、SI8とほぼ同時期の堅穴建物と考えられる。

SI8（図22～図26）

検出状況 C地点 BJ2～BK3グリッド、III層上面で検出した5.33m×4.92mの堅穴建物である。遺構の平面形は不明瞭であったが、本遺構と重複する遺構を手がかりに、円礫や遺物を多く含む部分を本遺構の範囲と捉えた。形状は円形に近い。

埋土 3層に分層した。円礫が混じる黒褐色土がほぼ水平に堆積する。1層と2層の埋土はよく似るが、1層には径10cm程のやや大きな円礫が混じり、遺物を多く含む。埋土中にブロックや礫を含むことから人為的に埋め戻された可能性が高い。

壁 壁面は緩やかに開くが、北東側と北西側の壁面は中程からやや急になる。壁の残存高は最大で

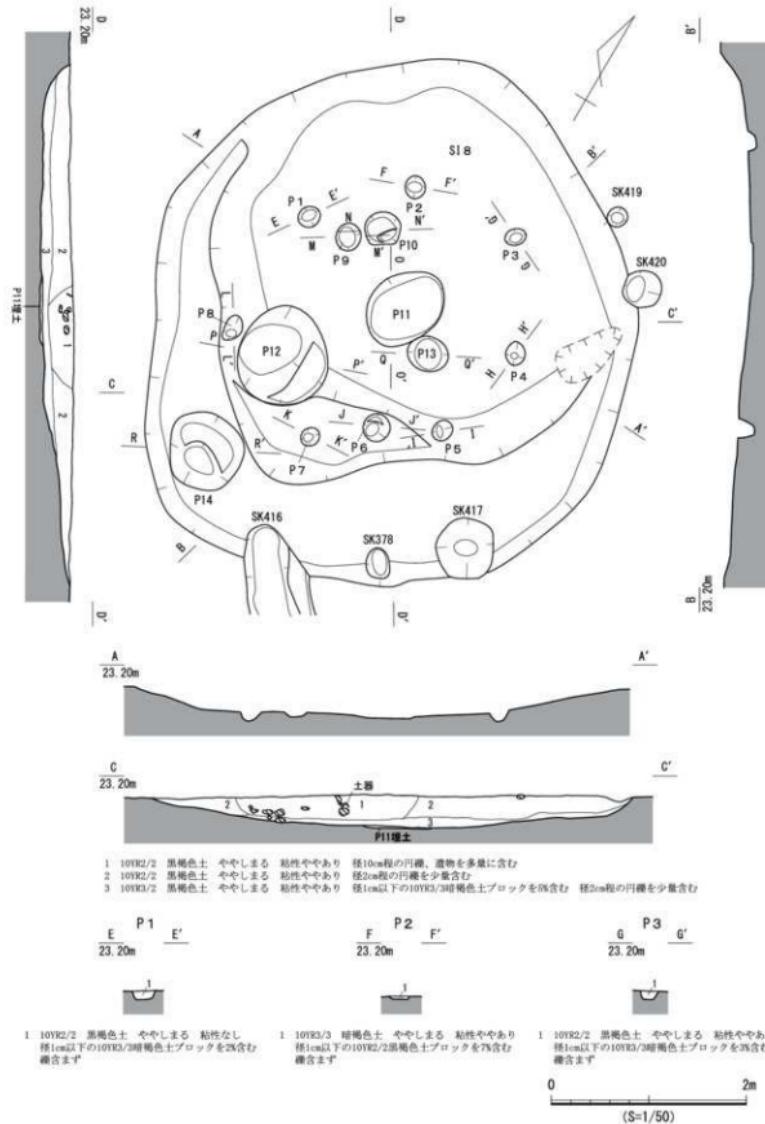


図22 SI 8 (1)

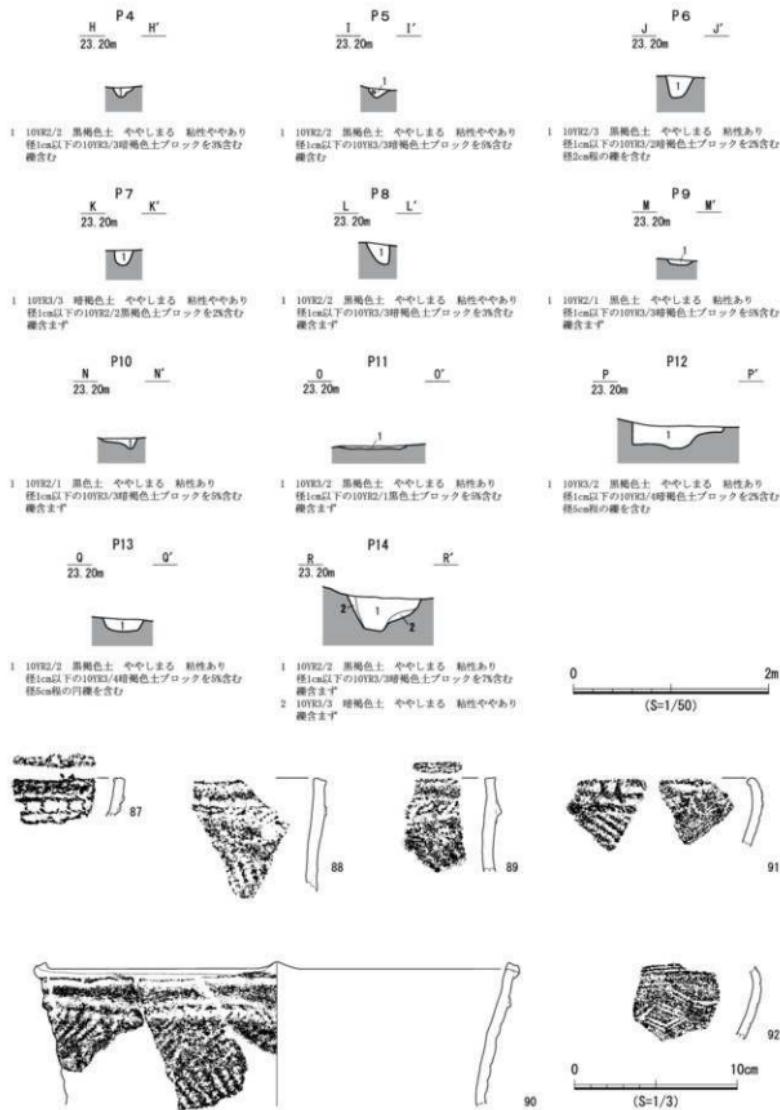


図23 SI 8 (2)

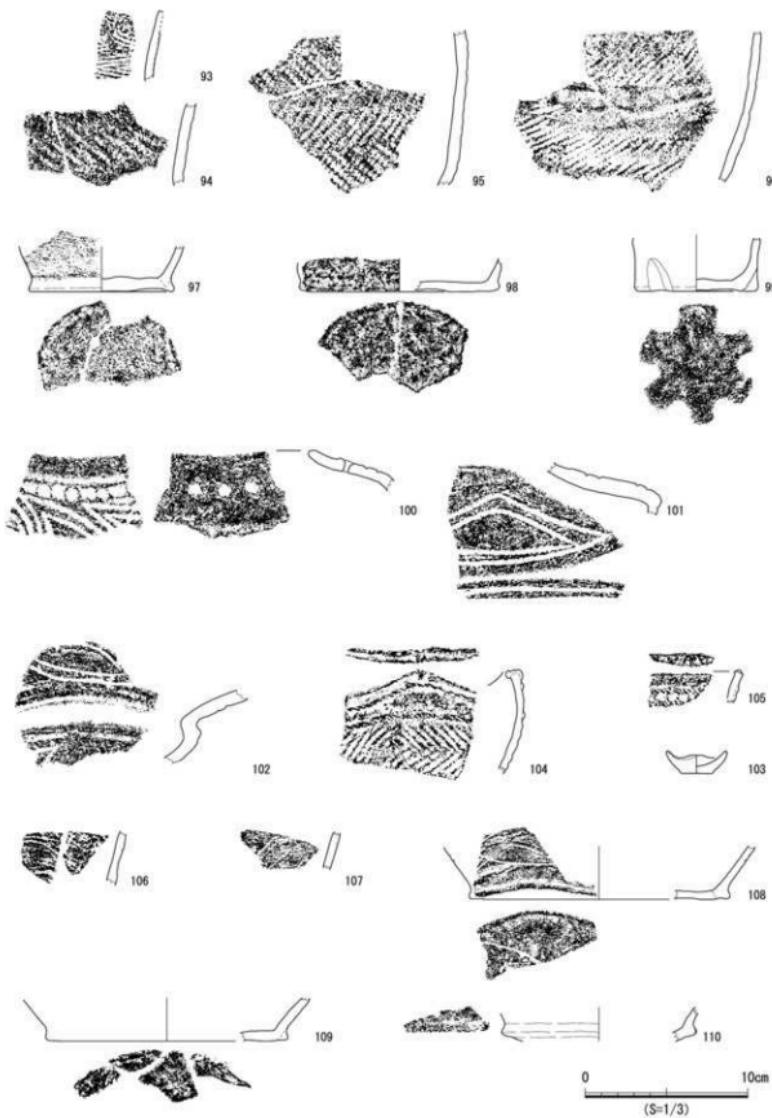


図24 SI 8 出土遺物（1）



図25 SI 8 出土遺物（2）

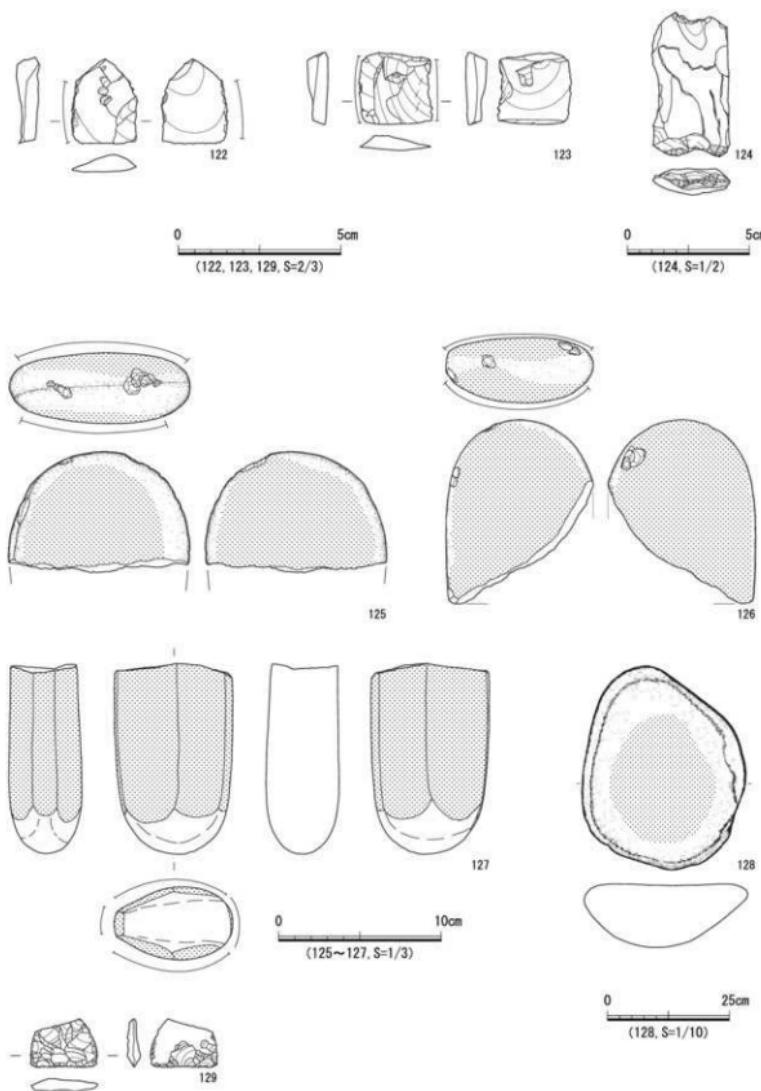


図26 SI 8 出土遺物 (3)

0.26mである。

床面 北部を除き、浅いテラス状の平坦面があり、北部に一段低くなつて床面が形成される。テラス北側中央には床面との間に半円形の平坦面を有する。床面はやや丸みを帯びるがほぼ平坦で、貼床や硬化面は確認できなかつた。床面で検出した遺構は、柱穴8基、性格不明土坑6基である。P1からP8が環状に配置され、柱穴と考えられる。壁付近では柱穴と思われる遺構は確認できなかつた。中央で浅い掘り込みがある土坑P11を検出したが、被熱の痕跡や埋土中に焼土ブロックは確認できなかつた。

遺物出土状況 埋土中から土器・石器が散在して出土した。繩文土器は、特に中央部からの出土が多い。土器1点が出土したが、上層からの出土で、混入の可能性が高い。床面直上で石皿(128)が置かれた状態で出土した。

出土遺物 87~110は前期後葉の繩文土器である。87は深鉢A類と思われ、口縁端部に突帶を波状に貼り付け、口縁部外面は突帶による短い縦位文様を要所に貼り付け、その下に梯子状の文様を突帶で構成する。突帶上には斜行する刻みを施す。88~90は同一個体と思われる深鉢A1類で、口縁部外面に2条の突帶を巡らせ、突帶上に縄文を施す。88には焼成後の穿孔が1箇所あけられている。90は口縁部の1条目の突帶が要所で口縁端部に及び、突起状となる。91は深鉢C1類で、口縁部内面に低い突帶を巡らせる。口縁部外面には要所に縦位の短い突帶を貼り付け、その下に刻みを持つ2条の突帶を巡らせる。92と93は深鉢F類の胴部片で、半截竹管沈線文を施す。94~96は外面に縄文を施す胴部片で、95は羽状縄文を施し、96はLR縄文と無文部を交互に配する。97~99は底部片で、97は底部外面がやや張り出し、99は6箇所抉るように回む。100は口縁部に沿つて一定間隔に円孔をあける浅鉢で、沈線による文様を施す。101と102は沈線による文様を施す浅鉢である。103はミニチュア土器で、口縁部が4単位の波状となる。104はP12から出土した深鉢B1類で、波状口縁となる。波頂部には縦位に短い突帶を貼り付け、口縁部外面に3条の刻みを持つ突帶を巡らせる。また、口縁端部の内側を刻む。105~110はP14から出土した。105は深鉢A1類と思われ、口縁端部に突帶を波状に貼り付け、口縁部外面には刻みを持つ突帶を梯子状に貼り付ける。106と107は深鉢F類の胴部、108は底部で、半截竹管による文様を施す。109は底部片で、底部外面がやや張り出す。110は赤彩があることから鉢の底部と思われ、底部外面には刻みを施す。111は石鐵2類である。平基となり、側辺のみ両面調整する。112と113は石匙である。112は剥片の末端辺を片面調整し、刃部を形成している。113は両面調整により刃部を形成しており、左面に微細な剥離痕が多く観察できる。114と115はスクレイバーである。114はスクレイバー2a類で、側辺と末端辺にそれぞれ直線的な刃部をもつ。115はスクレイバー1a類で、側辺に直線的な刃部をもつ。116~121はRFである。116と119は刃部が認められないが、各辺に両面からの粗い剥離調整が確認できる。122と123はMFで、ともに側辺に微細な剥離痕が認められる。124は打欠石錐で、縁部を敲打により整形している。125~127は、磨石・凹石類である。125と126は磨石・凹石類1c類で、平坦面に広く磨痕が認められ、敲打痕は側面にある。127は磨石・凹石類1a類で、平坦面と側面に広く磨痕が認められる。128は石皿で、扁平な自然石を用いている。129はP14埋土から出土した石鍬1b類で、平基で先端部を欠損する。

時期 床面付近から散在して出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の清水ノ上皿式、近畿地方の北白川下層IIc式、尾元遺跡前期後葉1期に併

行する時期のものと思われ、SI 7とほぼ同時期の竪穴建物と考えられる。

SI 9（図27～図35）

検出状況 C地点 BI 3～BJ 4グリッド、Ⅲ層上面で検出した7.34m×6.07mの竪穴建物である。この範囲は当時窪地になっており、本遺構の上層にはII b層が堆積していた。本遺構は東側に向かって緩やかに下がる窪地の傾斜部分につくられている。平面形は不明瞭であったが、本遺構と重複する遺構を手がかりに円環や遺物を多く含む部分を当遺構の範囲と捉えた。形状はやや不整な円形である。

埋土 3層に分層した。遺物や礫を多く含む1層が全面に認められ、その下は礫を含む2層が中央部のみに堆積する。下層においては、この層からの遺物の出土が多い。埋土中にブロックや礫を含むことから人為的に埋め戻された可能性が高いと考える。

壁 壁面は緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.12mである。

床面 東部を除き、周囲は浅いテラス状の平坦面があり、東部に一段低くなっている床面が形成される。テラス東側中央には床面との間に半円形の平坦面を有する。床面はやや丸みを帯びるがほぼ平坦で、貼床や硬化面は確認できなかった。床面で検出した遺構は、柱穴4基、性格不明土坑3基である。P2、P3、P5、P6が柱穴になると見える。当遺構が東側に向かって緩やかに下がっている傾斜地につくられていることや東部には浅いテラスが認められないことから、東側に入口が設置されていた可能性がある。中央で浅い掘り込みがある土坑P7を検出したが、被熱の痕跡や埋土中に焼土ブロックは確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器・石器が出土したが、特に2層から礫とともに多く出土した。SI 8と同様に床面直上で石皿（224）が置かれた状態で出土した。

出土遺物 130～193は前期後葉の縄文土器である。130は深鉢A類と思われるが、口縁部外面に刻みを持つ突帯を梯子状に貼り付ける。131～133は同一個体の可能性がある深鉢A 1類であるが、口縁端部に幅広い刻みを施し、口縁部に沿って刻みを持つ突帯を1条巡らせる。134は深鉢A 1類で、口縁端部に粗い刻みを施し、口縁部外面には粗い刻みを持つ突帯を1条巡らせる。135は口縁端部を欠くが深鉢A 1類と思われる、口縁部外面に粗い刻みを持つ突帯を2条巡らせる。136と137は同一個体の深鉢A 1類で、波状口縁となる。口縁端部には粗い刻みを施し、口縁部外面には粗い刻みを持つ突帯を2条巡らせる。138は深鉢A 1類で136と同様の文様を施すが、平口縁である。139は深鉢A 1類で口縁端部にL R縄文を施し、口縁部外面に2条の突帯を巡らせたのちL R縄文を施す。140は深鉢A 2類と思われ、刻みを持つ突帯を2条巡らせる。141は深鉢A 3類で、口縁部外面に2条の突帯を貼り付け、その間に半円状の突帯を連ねる。142と143は同一個体と思われる波状口縁の深鉢A 3類で、口縁端部に刻みを施す。口縁部外面には、波頂部に口縁端部から垂下する突帯を1条貼り付けて、波頂部間に2条の突帯を貼り付ける。144は深鉢A 3類で、口縁端部に粗い刻みを施し、口縁部外面に粗い刻みを持つ突帯を1条巡らせる。145～150は同一個体と思われる、深鉢A 3類である。口縁端部にC字状の刺突を施し、口縁部外面にC字状の刺突を伴う突帯を1条巡らせる。口縁部から胴部にはL R縄文を施すが、胴部の一部ではZ字状の結節が認められる。151は深鉢A 3類で、口縁端部に幅広の刻みを施し、口縁部外面にC字状の刺突を持つ突帯を2条巡らせる。152は深鉢A 3類で、口縁端部にC字状の刺突を施し、口縁部外面にC字状の刺突を持つ突帯を2条巡らせる。153は深鉢B 1類と思われる、口縁部外面に刻みを持つ突帯を1条巡らせる。154は深鉢B 1類で、口縁端部にL R縄

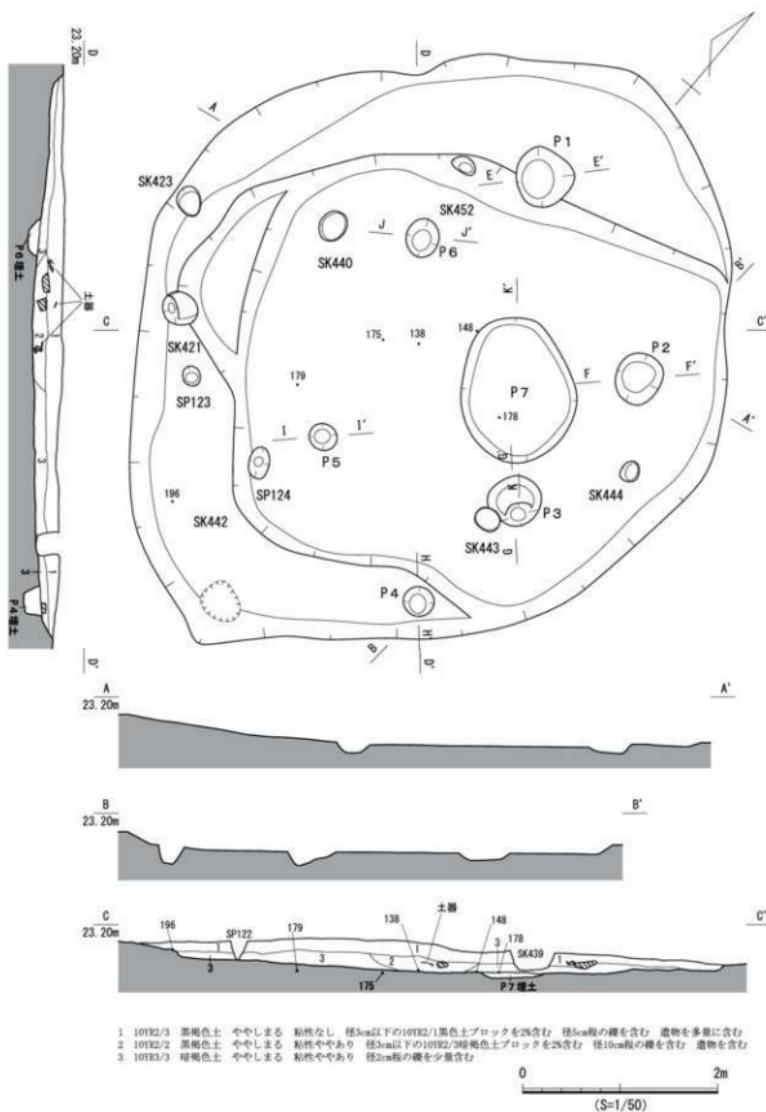


図27 SI9 (1)

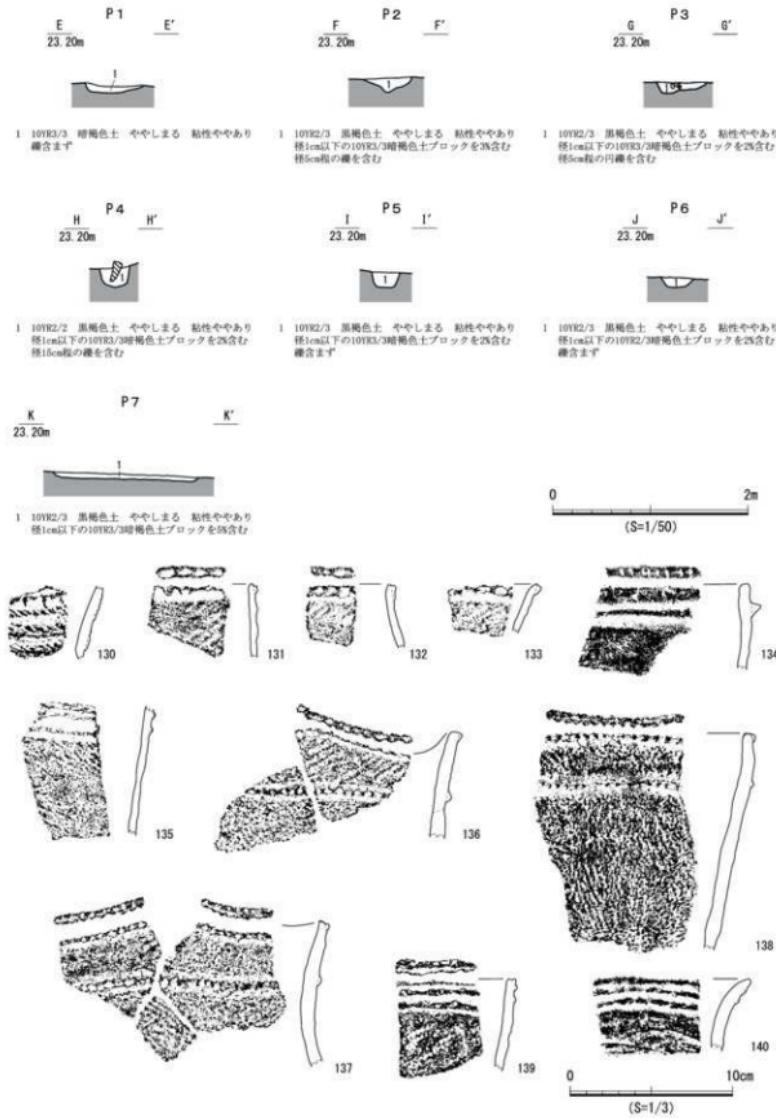


図28 SI 9 (2)

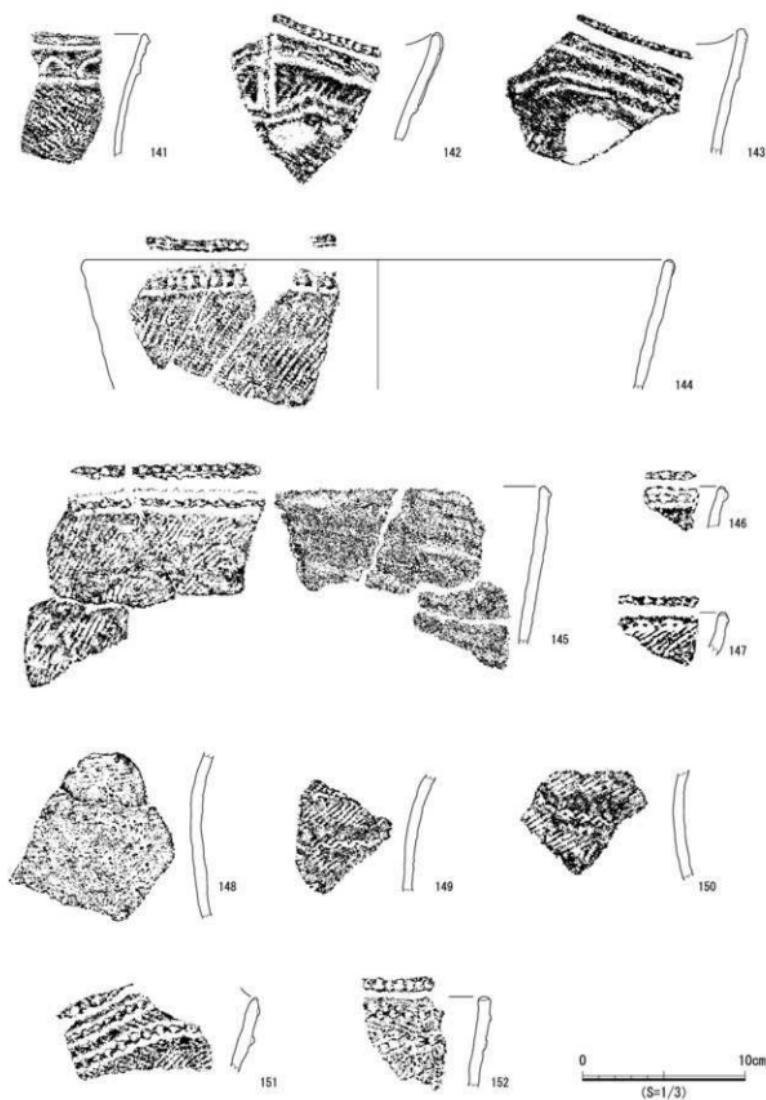


図29 SI 9 出土遺物（1）

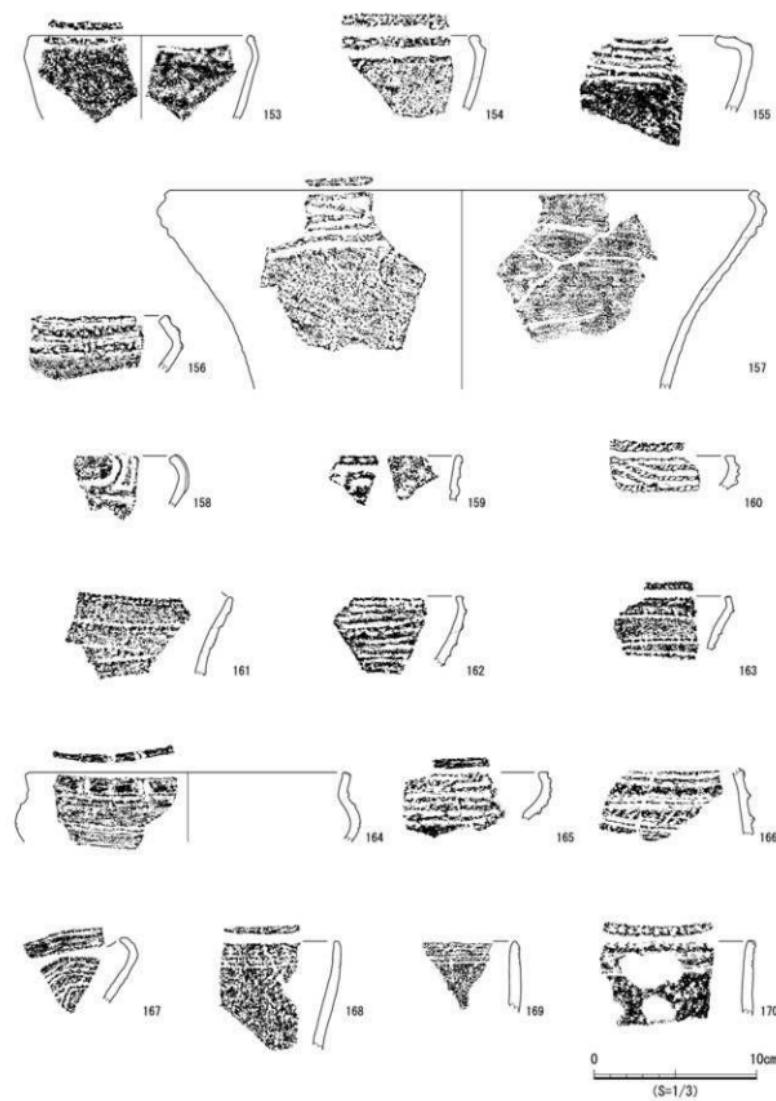


図30 SI 9 出土遺物 (2)

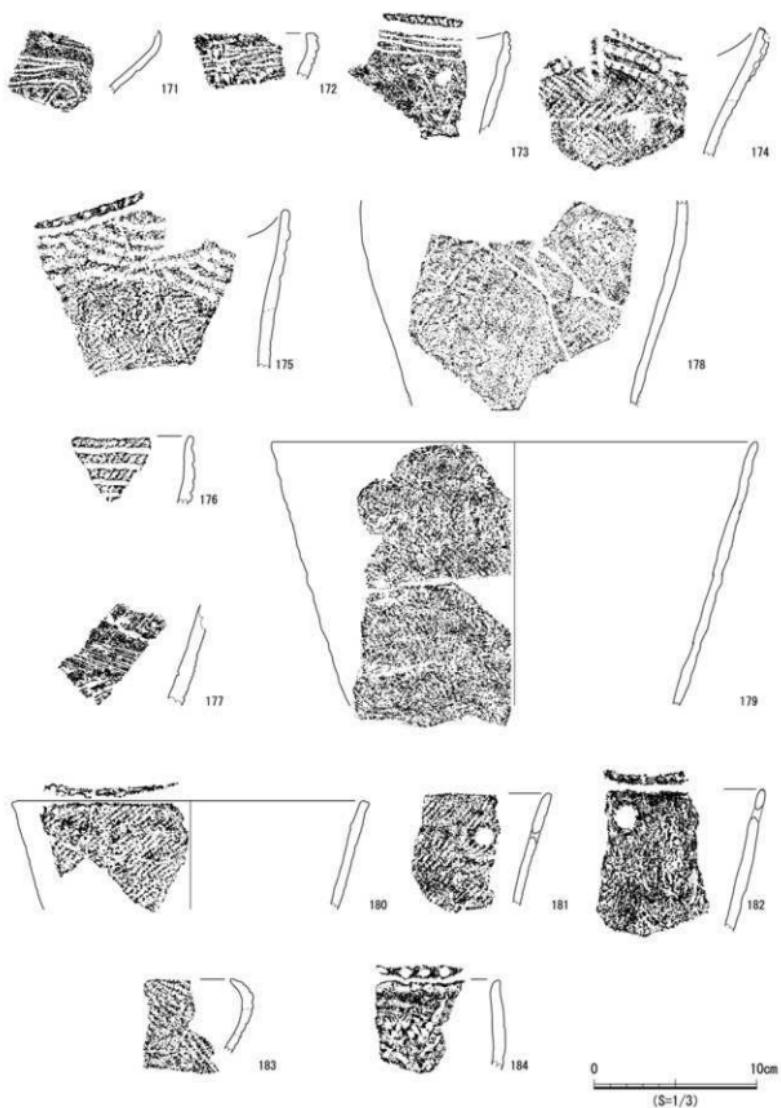


図31 SI 9出土遺物（3）

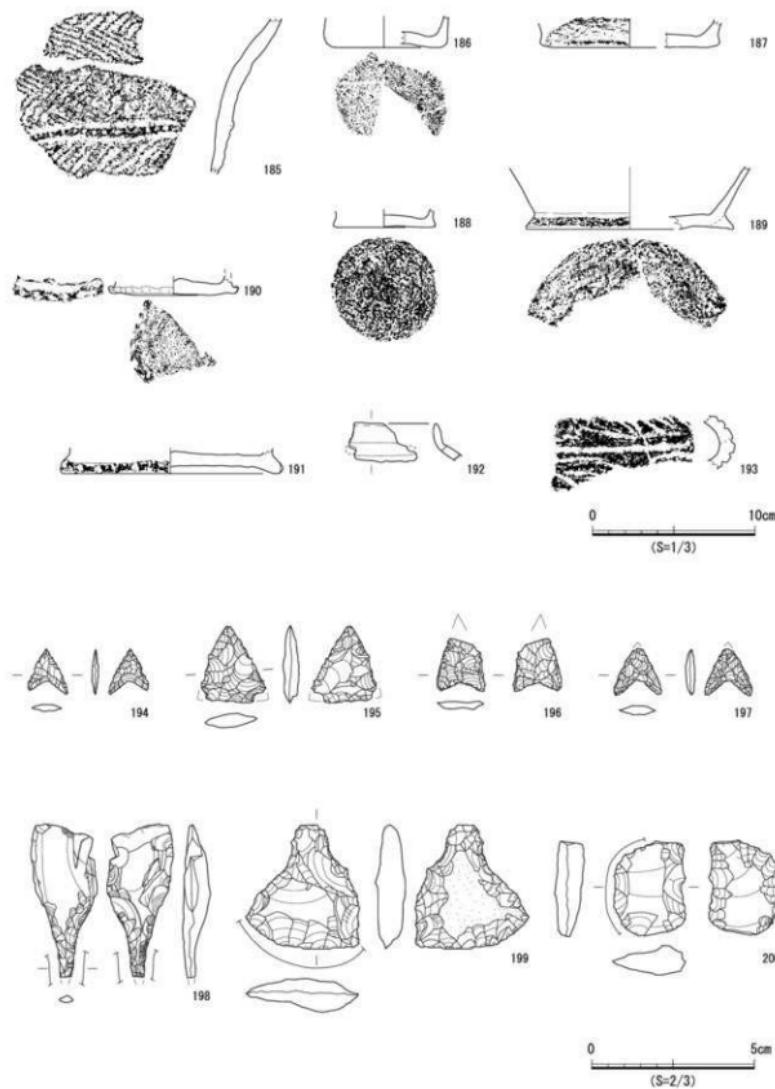


図32 SI 9出土遺物 (4)

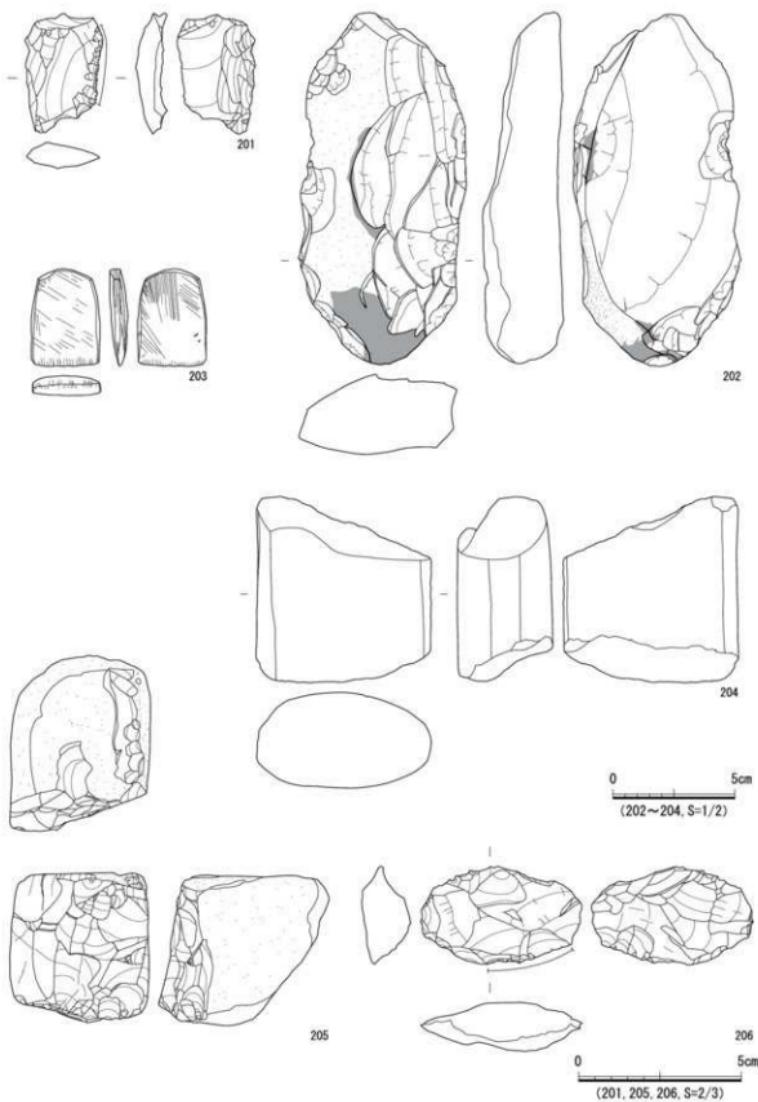


図33 SI 9出土遺物（5）

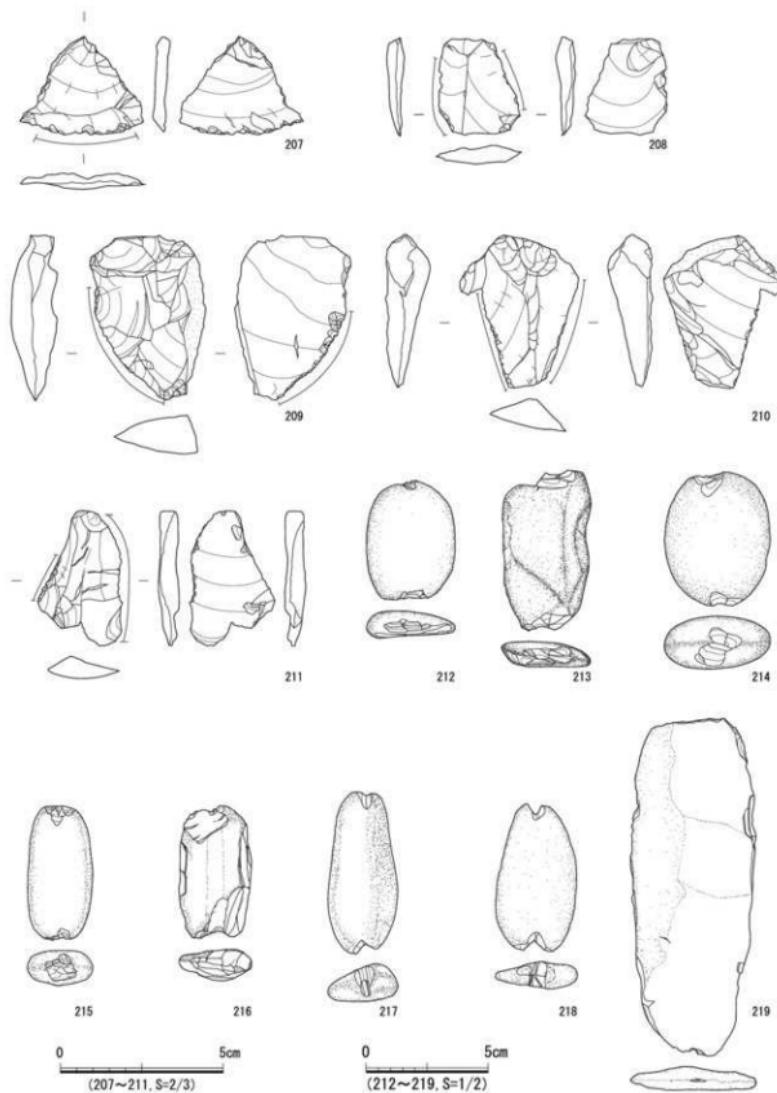


図34 SI 9 出土遺物 (6)

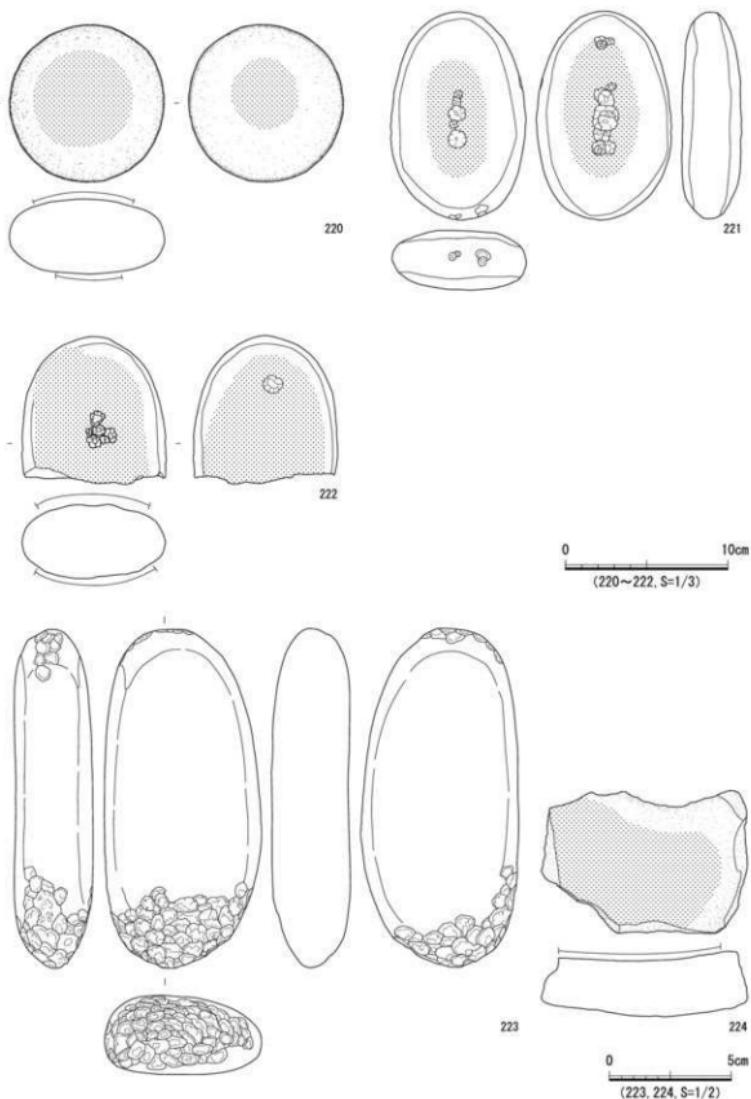


図35 SI 9出土遺物 (7)

文を施し、口縁部外面に突帯を1条巡らせLR繩文を施す。155と156は深鉢B2類で、口縁部外面に3条の粗い刻みを持つ突帯を巡らせる。157は深鉢B2類で、口縁部外面に4条の突帯を巡らせるが、その間に斜行や円形の突帯を加える。158と159は深鉢C1類で、口縁部外面に短い縦位の突帯や円形の突帯を貼り付ける。160は深鉢C1類で、口縁部外面に斜行や弧状、直線的な突帯を貼り付け、繩文を施す。161は波状口縁となる深鉢C2類と思われるが、口縁部外面にC字状の押引きを伴う突帯を巡らせる。162は深鉢C類と思われる、口縁部外面に刻みを持つ突帯を6条巡らせる。163は深鉢C類と思われるが、逆C字状の押引きを伴う突帯を3条巡らせる。164は深鉢D1類で、口縁端部から口縁部外面にかけて縦位の突帯を間隔をあけて貼り付け、その下に2条の突帯を巡らせる。胸部文様は半截竹管沈線文を施す。165は深鉢D2類で、口縁部外面に5条～6条の突帯を巡らせ、繩文を施す。166は深鉢D類若しくはE類の胸部片で、4条以上の突帯を巡らせ繩文を施すが、最下段の突帯はC字状の押引きが伴う。167～172は深鉢F類で、半截竹管による沈線文を施す。168と169は同一個体で、口縁部に沿って直線文を施す。170は口縁端部に刻みを施す。172は横位の直線文の上に半截竹管の刺突を伴うボタン状の貼付文を施す。173は深鉢F類で、口縁端部に刻み、口縁部外面に3条の直線文を施す。174は波状口縁となる深鉢F類で、口縁端部に粗い刻みを施す。波頂部には口縁部外面に垂下する短い突帯を縦位に貼り付け、その左右に端部が方形に近い工具による押引き沈線を3条展開する。175は波状口縁となる深鉢F類で、口縁端部に粗い刻みを施す。口縁部外面は波頂部に竹管状工具による弧状の押引き沈線を5条施し、その左右に4条の押引き沈線を展開する。176は口縁部外面にLR繩文を施したのち、5条以上の横位の沈線を巡らせる。177は深鉢F類と思われる胸部片であるが、半截竹管状工具による羽状の沈線を施す。178は深鉢F類と思われる胸部片で、格子目状の沈線を施しており、他の土器よりもやや古くなる可能性がある。179～184は深鉢G類で、179は口縁部が直線的に開く植木鉢状の器形である。180は口縁端部に部分的に繩文を施す。181と182は口縁部近くに焼成後の穿孔があけられ、182の口縁端部には粗い刻みを施す。184は口縁端部に幅広の刻みを施す。185は胸部片で、粗い刻みを持つ突帯を横位に1条巡らせる。186～191は底部片で、底部外面がやや張り出すもの(188)、大きく張り出すもの(189～191)がある。また、底部外面に刻みを施すもの(188・190・191)がある。192は口縁部に沿って一定間隔で円孔をあける浅鉢で、193は沈線による文様を施す浅鉢である。194～197は打製石鏨である。194は石鏨1d類で、左右非対称の形態となる。195は石鏨2類で、平基となり、基部の両側を欠損する。196は石鏨1c類で、先端と両側刃を欠損する。197は石鏨1b類で、脚部は尖る形態となり、先端を欠損する。198は石鏨3類で、ほぼ全周に調整を加えて錐部を作り出している。先端部を欠損する。199は石匙で、両面調整により刃部を形成している。200と201はスクレイバーである。200はスクレイバー1b類で、側辺に外湾する刃部をもつ。201はスクレイバー1a類で、側辺に直線的な刃部をもつ。202は、表裏面に摩滅が確認できたため打製石斧2類とした。203と204は磨製石斧である。203は、ほぼ全面を研磨した定角式のもので、基部に斜め方向、側縁部に縦方向の整形痕をもち、刃部には細かい縦方向の使用痕が観察できる。204は、基部と刃部が欠損しているため平面形態は不明だが、側縁部の断面形態から磨製石斧とした。205は石核で、自然面を打点とし、1つの作業面をもつ。206はRFである。207～211はMFで、いずれも側辺や末端辺に微細な剥離痕が認められる。212～216は打欠石錐である。212～215は、両端とも裏表面に剥離痕が認められる。216は、紐掛け部に磨痕、片面に帶状痕が認められる。

217～219は切目石錐である。217と218は、両端とも表裏2方向から切り目を入れている。220～223は、磨石・回石類である。220は磨石・回石類1a類で、扁平な円錐の平坦面に磨痕が認められる。221と222は磨石・回石類2b類で、平坦面に磨痕と敲打痕が認められる。223は磨石・回石類4類で、細長い棒状の自然縫を用いたもので、側面に敲打による小さな面があり、反対の側面には多数の敲打痕と部分的に被熱痕が認められる。224は石皿で、使用面がやや凹む。

時期 床面直上から散在して出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、近畿地方の北白川下層IIc式～III式、尾元遺跡前期後葉3期～4期に併行する時期のものと思われ、SI7やSI8よりもやや新しい時期の堅穴建物と考えられる。

2 土坑

SK5（図36）

検出状況 A地点 AL8～9グリッド、Ib層基底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 南部が発掘区外に広がり、全体の形状は不明である。壁は北側が急で、他は緩やかに開く。北部がテラス状になる。底面はほぼ平坦である。

埋土 埋土は2層に分層した。1・2層とも炭化物を含み、1層では5cm程の炭化材が数点出土した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 1層から炭化材とともに繩文土器のやや大きな破片が散在して出土したが、表面の磨耗が著しく、図示していない。

出土遺物 225はRFである。

時期 出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。

SK9（図36）

検出状況 A地点 AL8グリッド、Ib層基底面で検出した。平面形はやや明瞭であった。北西部が発掘区外に延びる。東部でSK5と重複し、SK5が新しい。

形状 形状は楕円形と思われる。壁はほぼ直立し、南東部がややテラス状になる。底面は平坦である。

埋土 埋土は3層に分層し、ほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 繩文土器が2層・3層から散在して出土した。いずれも細片である。

出土遺物 226～227は前期後葉、228は中期後葉の繩文土器である。226は深鉢D類若しくはE類の胴部片で、逆く字状の押引きを伴う突帯を弧状に貼り付ける。227は底部片で外面に刻みを施す。228は深鉢胴部片で、条線を地文とし半截竹管沈線による文様を施す。229はMFで、末端辺に微細な剥離痕が認められる。230は打欠石錐で、両端とも裏表面に剥離痕が認められる。

時期 出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の大麦田III式、近畿地方の北白川下層III式、尾元遺跡前期後葉5期ごろに併行する時期のものと思われる。中期後葉の土器（228）も出土したが、1層からの出土であることから混入と思われる。2層や3層から出土した繩文土器はいずれも前期後葉のものであった。

SK27（図37）

検出状況 A地点 A011・12グリッド、III層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 北東部が発掘区外に広がり、全体の形状は不明であるが、長楕円形と思われる。壁はいずれも

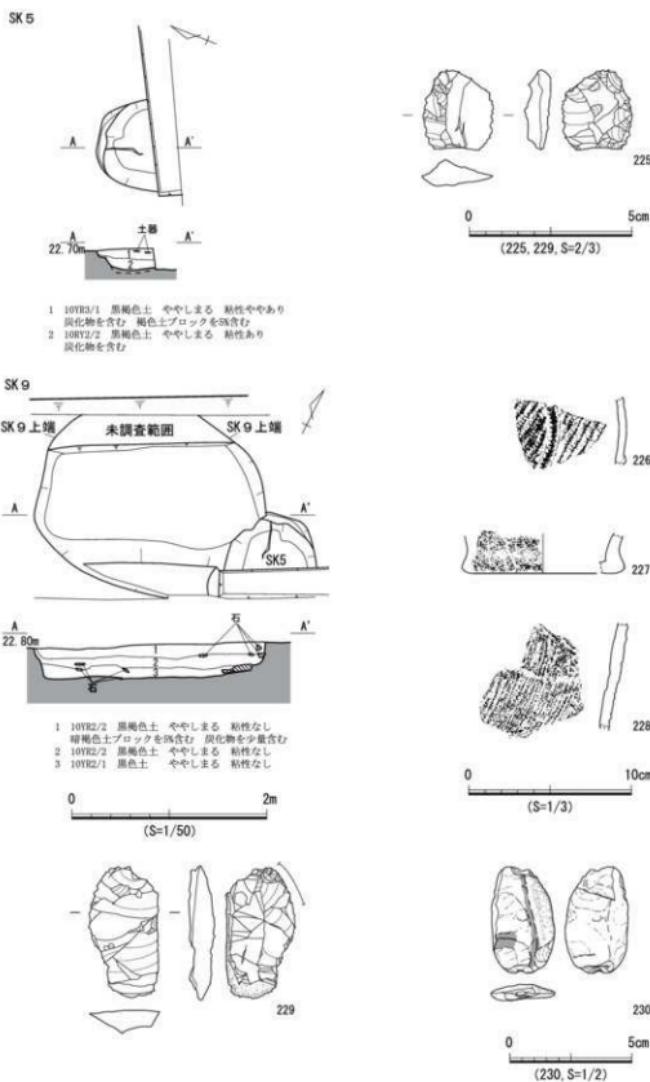


図36 SK 5・SK 9

緩やかに開く。南西部がテラス状の平坦部になり、北東に向かってやや深くなる。

埋土 2層に分層した。埋土はほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 繩文土器が埋土中から散在して出土した。やや大きな破片も含まれる。

出土遺物 231と232は前期後葉の繩文土器で、231は胴部片、232は外面がやや張り出す底部片である。233はMFである。

時期 出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。

SK39（図37）

検出状況 A地点AP11グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形はやや明瞭で、検出面において礫が多く認められた。また、本遺構上面及び東側（AP11・12グリッド）の遺物包含層中には石器が多数含まれていた。

形状 東部が発掘区外に広がり、全体の形状は不明である。壁は急で、底面は南側がやや窪む。

埋土 埋土は単層で、径2cm程の被熱した礫を多く含む。埋土中から被熱した礫がまとまって出土したことから、焼礫集積土坑と思われる。埋土に炭化物や焼土ブロックは認められなかった。

遺物出土状況 被熱した礫とともに磨石や凹石が散在して出土した。出土した磨石や凹石には被熱の痕跡は認められなかった。

出土遺物 234は磨石・凹石類2b類で、扁平な円礫の平坦面に磨痕と敲打痕が認められる。

時期 磨石や凹石、被熱した礫がまとまって出土したことから繩文時代と判断した。

SK65（図38）

検出状況 A地点AL8・9グリッド、Ib層基底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 発掘区外に広がる部分が多いこと、他の遺構との重複が多いことから、全体の形状は不明であるが、東西に長く延びる。検出部分の北側・南側の壁は緩やかに開く。

埋土 2層に分層したが、1層は南部のみに認められ、2層が大部分を占める。埋土にブロック土や炭化物を含むことから人為堆積と考える。

遺物出土状況 繩文土器と石器が埋土中から散在して出土した。いずれも細片である。

出土遺物 235～238は前期後葉の繩文土器である。235と236は小破片であるが、深鉢D3類と思われる。235は口縁部内面にく字状の押引きを伴う突帯を波状に貼り付け、口縁端部もく字状の押引きを施す。口縁部外面には低い突帯を貼り付けてLR繩文を施す。236は口縁部内面を肥厚させてLR繩文を、口縁端部は幅広の刻みを施す。口縁部外面はく字状の押引きを伴う突帯を1条巡らせる。237は深鉢G類で、口縁端部にLR繩文を施す。238は胴部片で、外面にRL繩文を施す。239と240はMFである。

時期 出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の大麦田III式、近畿地方の北白川下層III式、尾元遺跡前期後葉5期に併行する時期のものと思われる。

SK69（図39）

検出状況 A地点AP11グリッド、SK58の底面で検出した。平面形はやや明瞭であった。東部はSP12と重複し、SP12が新しい。

形状 残存部から形状は円形と思われる。壁はほぼ直立し、底面はほぼ平坦である。

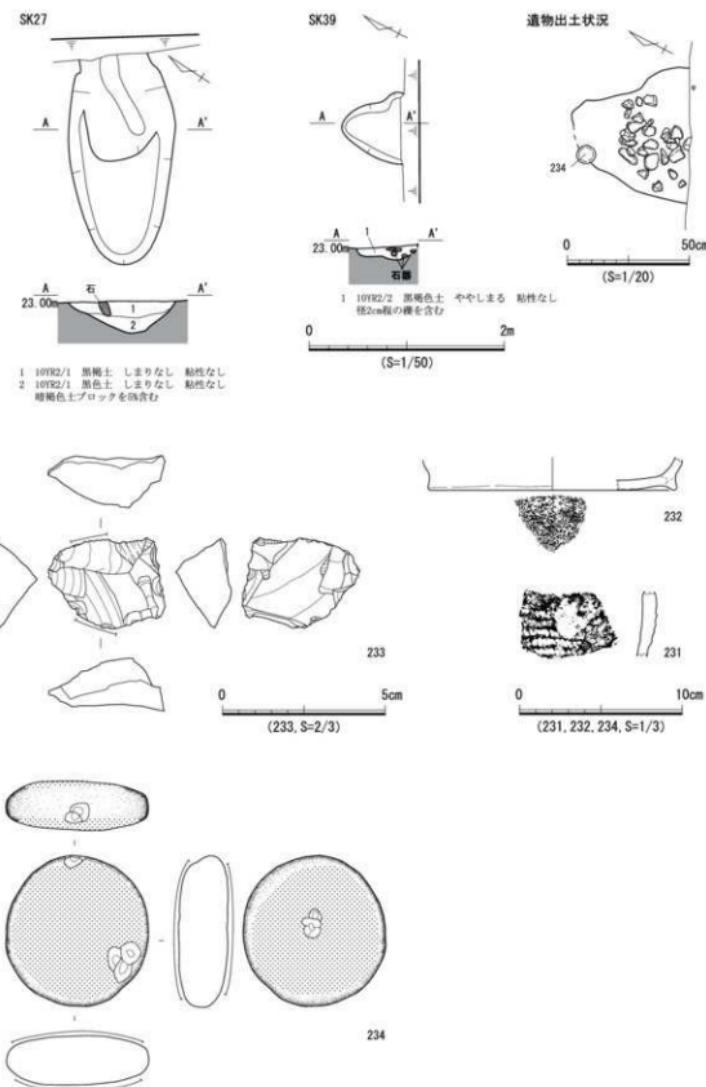


図37 SK27・SK39

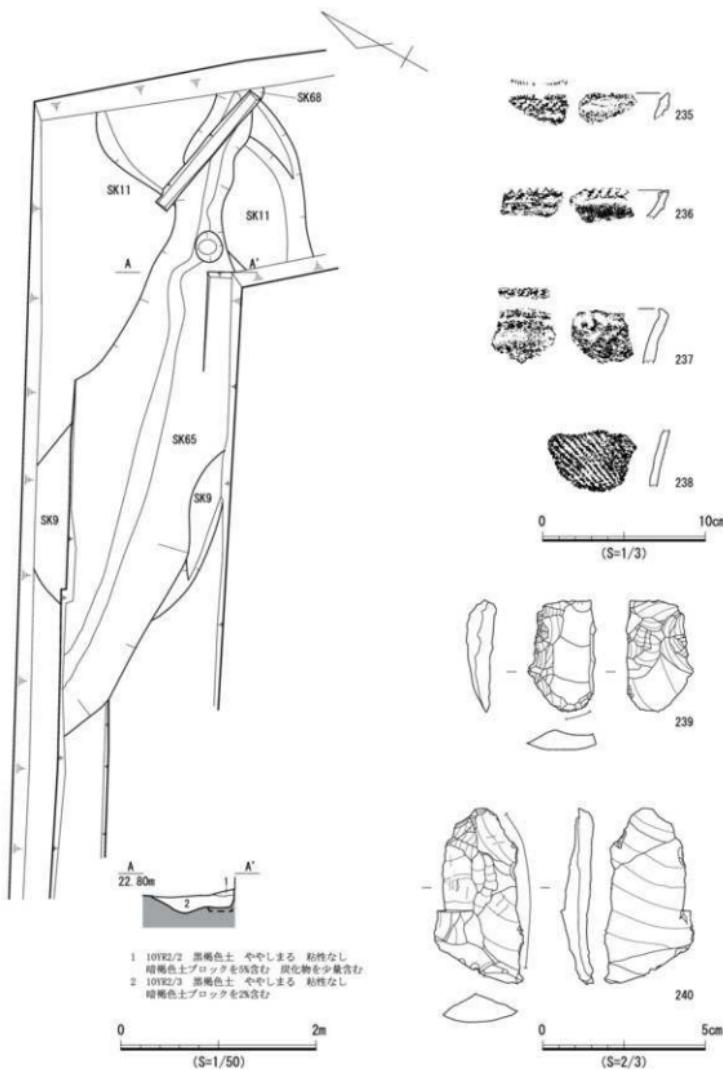


図38 SK65

埋土 単層で、埋土にブロック土を含むことから人為堆積と考える。

遺物出土状況 繩文土器が埋土中から1点出土した。

出土遺物 241は前期後葉の縄文土器の深鉢F類で、半截竹管による沈線文を施す。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の清水ノ上III式、近畿地方の北白川下層IIc式、尾元遺跡前期後葉1期併行に併行する時期のものと思われる。

SK79（図40）

検出状況 B地点AF19・20グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 北側が発掘区外に広がり、全体の形状は不明であるが、長梢円形と思われる。壁は開き、底面はやや丸くなる。

埋土 2層に分層した。埋土にブロック土を含むことから人為堆積と考える。

遺物出土状況 縄文土器と石器が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 242～248は前期後葉の縄文土器である。242は深鉢B1類で口縁部外面に突帯を2条巡らせ、LR縄文を施す。243は深鉢E類と思われるが口縁端部を欠く。逆C字状の押引きを伴う突帯により円形の文様を置き、弧状や直線の文様を展開する。なお、押引きを施す原体は、突帯幅よりも狭いものを使用している。244は深鉢F類で半截竹管による沈線文を施す。245は突帯による文様を施す胴部片である。246は外面にLR縄文を施す。247と248は底部片であるが、247は底部外面がやや張り出し、248は張り出した外面に刻みを施す。249はMFである。250は打欠石錐で、両端とも裏表面に剥離痕が認められる。明瞭な細磨痕は観察できないが、若干帯状に平滑な部分がある。251は磨石・凹石類1a類である。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の大麦田III式、近畿地方の北白川下層III式、尾元遺跡前期後葉5期に併行する時期のものと思われる。

SK128（図41）

検出状況 B地点AG～AH18グリッド、III層上面で検出した。平面形は明瞭で、炭化物とブロック状の暗褐色土が混じる状況が確認できた。

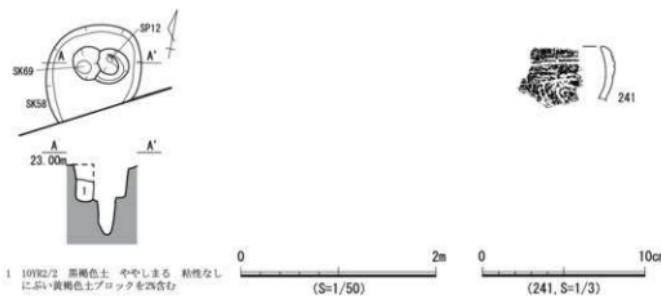


図39 SK69

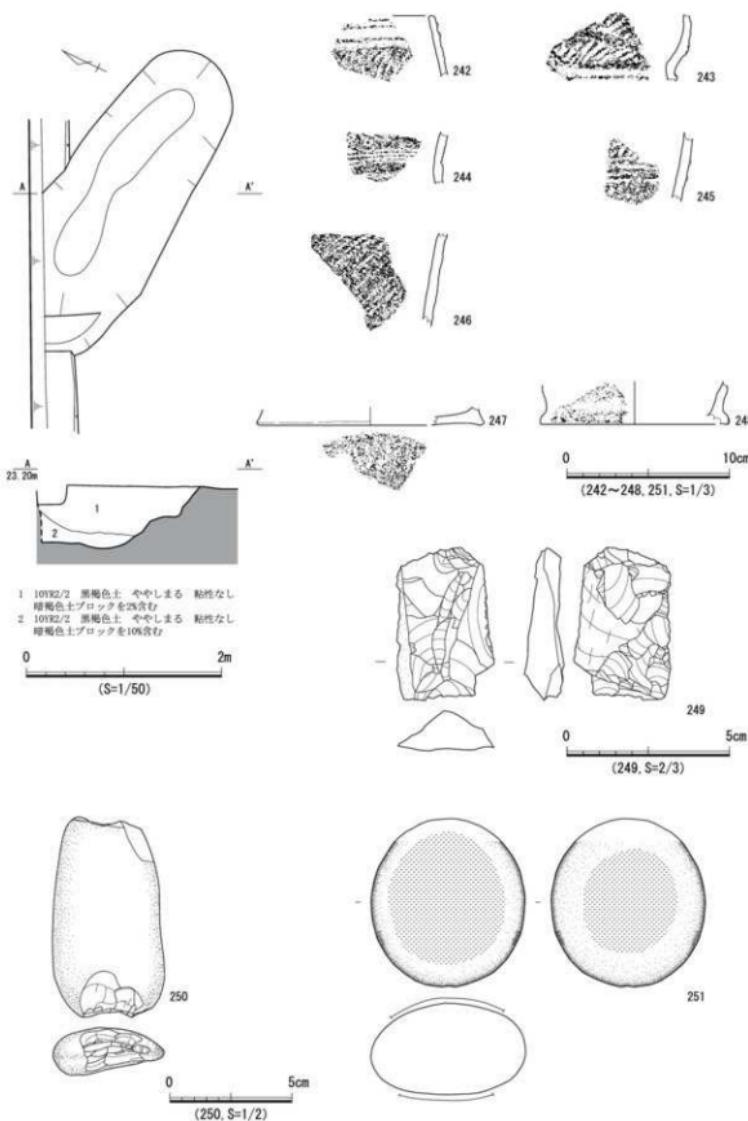


図40 SK79

形状 長軸長1.16m以上で、近接するSK129とともに周辺の遺構と比べてやや大型である。形状は円形である。壁は急で、底面は平坦である。

埋土 埋土は単層で、炭化物やブロック土を含むことから人為堆積と考える。

遺物出土状況 底面中央付近で縄文土器片が複数まとまって出土した。いずれも小片で特異な状況は認められなかった。

出土遺物 252は前期後葉の縄文土器の深鉢胴部片で、外面にR L縄文を施す。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。

SK129(図41)

検出状況 B地点AH18グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 長軸長1.14m以上で、近接するSK128とともに周辺の遺構と比べてやや大型である。西部が発掘区外に広がるため、全体の形状は不明だが、検出した部分から形状は円形と思われる。壁は急である。北側にテラス状の平坦面があり、南部が一段深くなる。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層と2層の埋土はよく似るが、2層はブロック土や炭化物を含む。1層でやや大きな円礫を確認したが、意図的な配置は認められなかった。

遺物出土状況 縄文土器が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 253と254は前期後葉の縄文土器である。253は深鉢F類で半截竹管による沈線文を施す。

254は深鉢胴部片で外面にR L縄文を施す。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の清水ノ上Ⅲ式、近畿地方の北白川下層Ⅱc式、尾元遺跡前期後葉1期併行に併行する時期のものと思われる。

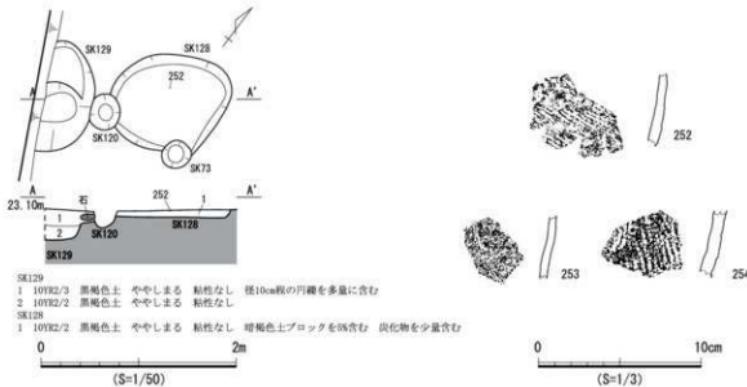


図41 SK128・SK129

SK153（図42）

検出状況 B地点 AJ16～AK16 グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭で、礫やブロック土が混じる状況が確認できた。

形状 北東部が発掘区外に広がり、全体の形状は不明であるが、検出した部分から大型の円形と思われる。壁は緩やかに開き、外周をテラス状の平坦面が巡る。底面は、東部に向かって緩やかに下がる。規模がやや大きいことから竪穴建物の可能性を想定して調査したが、床面や柱穴は確認できなかった。

埋土 3層に分層した。1層はブロック土や径2cm程の礫を含む。3層は部分的に堆積する。

遺物出土状況 繩文土器のやや大きな破片が埋土中から出土した。1層下部付近からの出土が多い。

出土遺物 255～262は前期後葉の繩文土器である。255は深鉢F類でR L繩文を施した後、半截竹管による沈線文を施す。256～258は深鉢胴部片で、256は外面にR L繩文、257と258は羽状繩文を施す。また、257には焼成後の穿孔があけられている。259は底部片で、底部外面がやや張り出す。260～262は沈線による文様を施す浅鉢で、260には口縁部に沿って円孔があけられている。263と264はMFである。

時期 出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の清水ノ上III式、近畿地方の北白川下層IIc式、尾元遺跡前期後葉1期併行に併行する時期のものと思われる。

SK200（図43）

検出状況 B地点 AI13～AJ14 グリッド、SD4底面及びIII層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は不整円形である。壁は緩やかに開き、底面はやや丸くなる。

埋土 2層に分層した。2層は南東部のみに堆積する。

遺物出土状況 繩文土器が埋土中から散在して出土したが、1層からの出土が大半を占める。いずれも細片である。

出土遺物 265は前期後葉の繩文土器の深鉢胴部片で、外面にR L繩文を施す。

時期 出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。

SK232（図43）

検出状況 B地点 AL19～20 グリッド、SK213 及び SK217 の底面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は方形である。壁はほぼ直立する。底面は平坦である。

埋土 単層で、径5cm以下の亜円礫を含む。

遺物出土状況 繩文土器や石器が埋土中から散在して出土した。いずれも細片である。

出土遺物 266は前期後葉の繩文土器の底部片で、底部外面がやや張り出す。

時期 出土した土器から繩文時代前期後葉と判断した。

SK243（図44・45）

検出状況 B地点 AK14～15 グリッド、III層上面及びSD4底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 東部を除いて他の遺構との重複関係が認められるが、形状は不整円形のやや大型の土坑である。

壁は緩やかに開く。1・2層を掘り下げたところ、東側がテラス状の平坦面となり、中央部から西側

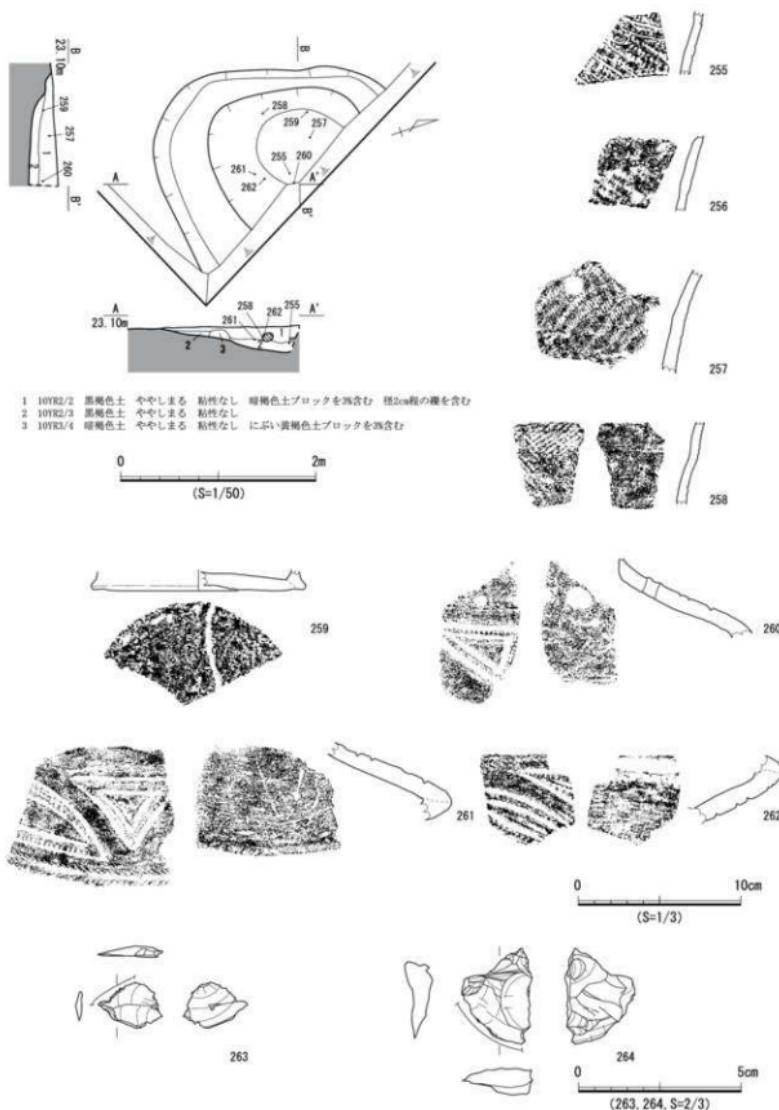


図42 SK153

の底面は一段深くなる。3層まで掘り下げる、中央部がやや深くなり、浅い擂鉢状となった。

埋土 3層に分層した。壁際に2層が傾斜して堆積し、中央に1層が堆積する。1・2層を掘り下げたところ、3層を掘り込む複数の遺構が認められたが、柱穴、壁際溝、貼床など堅穴建物と認定できる遺構は確認できず、本遺構との関連は不明である。3層掘削後の底面では、遺構は確認できなかつた。

遺物出土状況 繩文土器や石器が埋土中から出土した。縄文土器はやや大きな破片を含み、中央部からの出土が多い。

出土遺物 267～278は前期後葉の縄文土器である。267は深鉢A1類と思われるが、口縁端部に幅広の刻みを施し、口縁端部から口縁部外面に継ぎの短い突帯を2条貼り付ける。268は深鉢F類で、口縁端部に刻みを施し、口縁部外面に半截竹管による沈線と刺突列を施す。269～273は深鉢G類で、外面に縄文を施す。269と272は口縁端部に幅広の刻みを施す。274～277は深鉢胴部片で、外面に縄文を施す。278は底部片で、底部外面がやや張り出す。279は石匙で、両面調整により刃部を形成し、その反対側に大きな抉り状の剥離を2方向から加えて、つまみ部を作り出している。280～282はR Fである。283はMFである。

時期 3層から出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の清水ノ上III式、近畿地方の北白川下層IIc式、尾元跡跡前期後葉1期併行に併行する時期のものと思われる。

SK246(図46)

検出状況 B地点 AJ～AK15グリッド、III層上面及びSK160の底面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

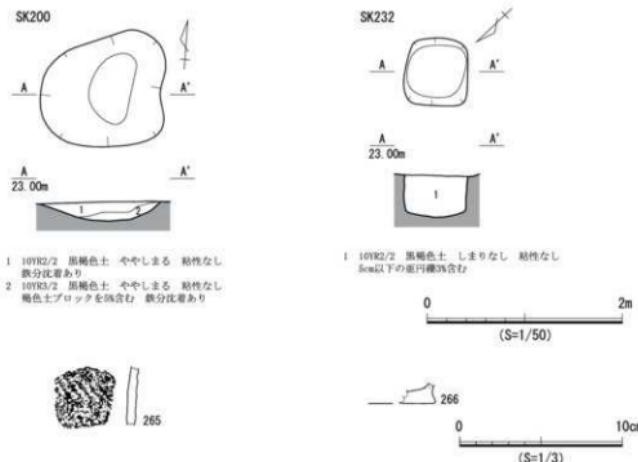
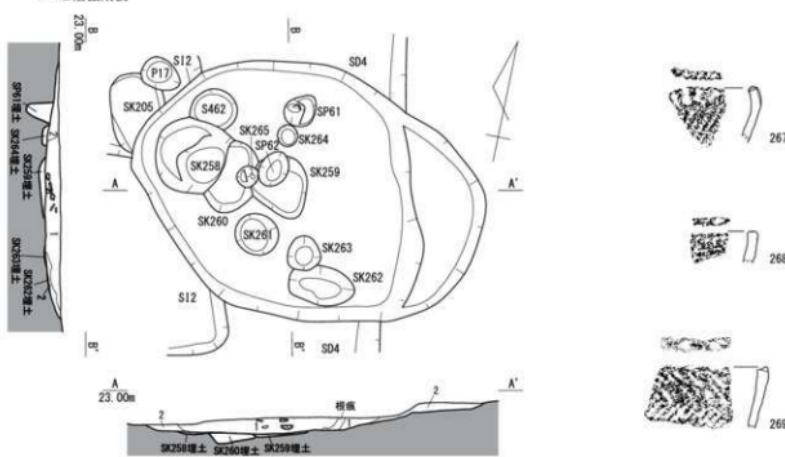
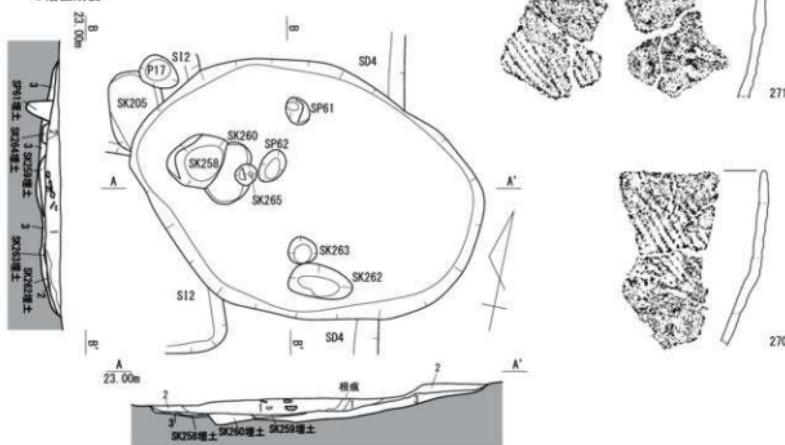


図43 SK200・SK232

1・2層掘削後



3層掘削後



- 1 10Y32/1 黒色土 ややしまる 粘性なし 植5~10cm程度の亜円礫7%含む 土器片を含む
 2 10Y32/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 10Y3/4培養土ブロックを10%含む 熟分沈着あり
 3 10Y32/3 緑褐色土 ややしまる 粘性やあり 10Y3/2黒褐色土を5%含む

0 2m (S=1/50)

0 10cm (S=1/3)

図44 SK243

形状 形状は長方形である。壁はほぼ直立し、北側がテラス状の平坦面となり、中央部から南側は一段深くなる。

埋土 3層に分層した。1層が中央に、2・3層がその両側に堆積する。1・2層は円縞を含み、3層は縦を含まない。

遺物出土状況 繩文土器や石器が埋土中から散在して出土した。縩文土器はやや大きな破片を含む。

出土遺物 284は前期後葉の縩文土器の深鉢胴部片で、外面にLR縩文を施す。

時期 出土した土器から縩文時代前期後葉と判断した。

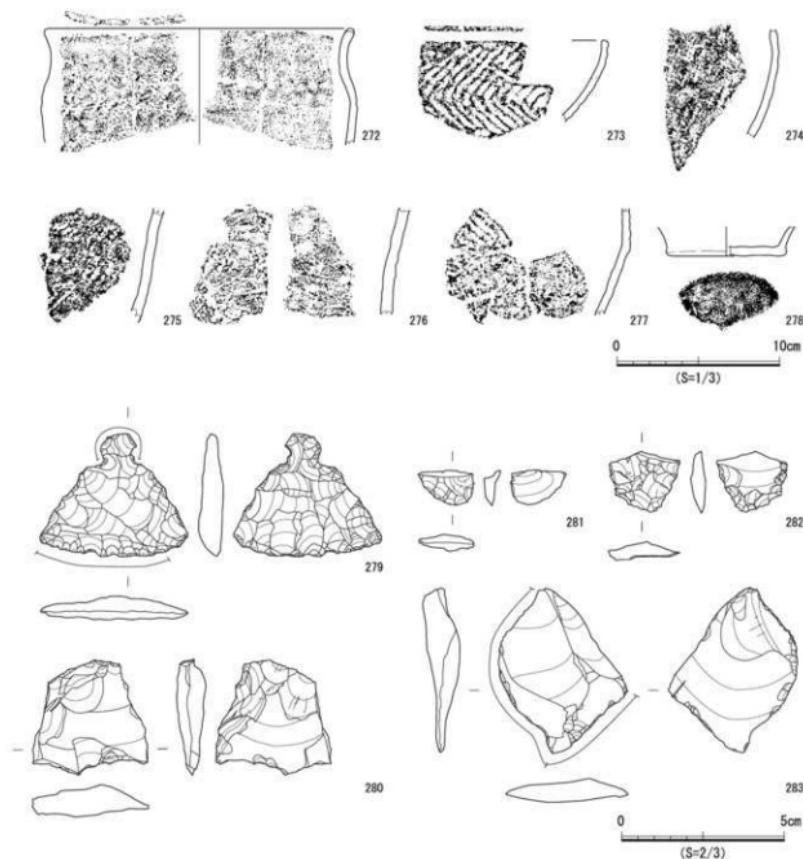


図45 SK243出土遺物

SK249（図46）

検出状況 B地点 AJ～AK14 グリッド、SD 4 の底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 SD 4 との重複関係から全体の形状は不明であるが、不整形と思われる。長軸長 1.97m で大型の土坑である。壁は急で、底面はほぼ平坦である。

埋土 2 層に分層した。1 層を掘り上げたところ、2 層を掘り込む複数の遺構が認められたが、柱穴、壁際溝、貼床など堅穴建物と認定できる遺構は確認できず、本遺構との関連は不明である。2 層掘削後、底面で遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 繩文土器や石器が埋土中から散在して出土した。縄文土器は細片が多い。

出土遺物 285～287 は前期後葉の縄文土器である。285 は深鉢 A 1 類で、口縁部外面に 3 条の突帯を巡らせ、縄文を施す。286 は深鉢 D 類か E 類の胴部片で、突帯を 1 条巡らせる。287 は底部片で、底部外面が張り出す。

時期 2 層から出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の大麦田 I 式、近畿地方の北白川下層 II c 式、尾元遺跡前期後葉 2 期に併行する時期のものと思われる。

SK250（図47）

検出状況 B 地点 AJ14 グリッド、倒木痕底面で検出した。平面形はやや明瞭であった。南側で SK251 と重複し、SK251 が新しい。

形状 残存部から形状は長方形と思われる。壁は急で、底面は南側に向かってやや下がる。

埋土 単層で、径 2 cm 以下の亜円礫を含む。

遺物出土状況 繩文土器や石器が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 288 と 289 は前期後葉の縄文土器である。288 は口縁端部を欠くが深鉢 A 類と思われ、口縁部外面に波状若しくは斜行する突帯を巡らす。289 は深鉢 E 類と思われる胴部片で、縦位の突帯を 2 条貼り付け突带上に半截竹管による刺突を施す。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の大麦田 III 式、近畿地方の北白川下層 III 式、尾元遺跡前期後葉 5 期に併行する時期のものと思われる。

SK392（図48）

検出状況 C 地点 BI 2 ～ 3 グリッド、III 層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。検出面で、北西端と南東端にそれぞれ幅 30cm ～ 40cm の角礫が認められた。

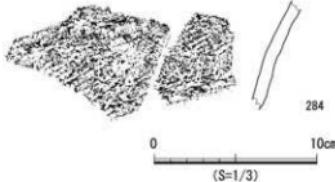
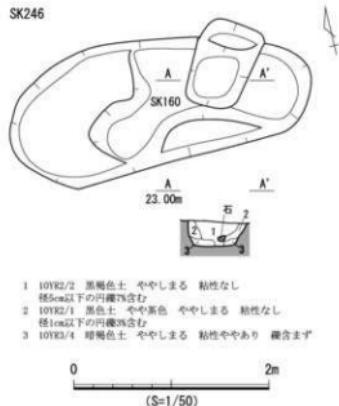
形状 形状は南東から北西に延びる楕円形である。壁は緩やかに開く。底面はほぼ平坦であるが、中央がやや窪む。形状から土坑墓の可能性が考えられる。

埋土 5 層に分層した。角礫を含む 1 層は径 2 cm 程の円礫を含み、遺物の出土も多い。底面中央のやや窪む部分には 4 層が堆積する。埋土にブロックや礫を含むことから人為堆積と考える。

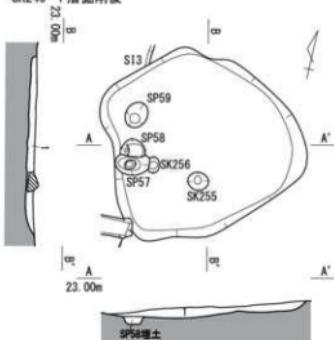
遺物出土状況 繩文土器と石器が散在して出土したが、1 層からの出土が多い。縄文土器はやや大きな破片を含む。

出土遺物 290 ～ 293 は前期後葉の縄文土器である。290 は口縁端部を欠くが深鉢 A 類と思われ、口縁部外面に突帯を 2 条巡らす。突帯横には沈線状の痕跡があり、突带上を半截竹管状工具によりなぞっ

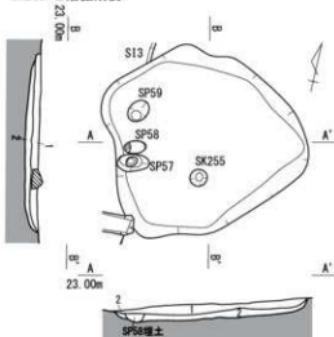
SK246



SK249 1層掘削後



SK249 2層掘削後



1 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 10YR3/4緑褐色土ブロックを5%含む
2 10YR3/4 緑褐色土 ややしまる 粘性なし 10YR2/2黑褐色土ブロックを5%含む

0 2m
(S=1/50)

285

286

287

0 10cm
(S=1/3)

図46 SK246・SK249

ている可能性がある。291は深鉢A類と思われるが、口縁部外面に2条の突帯を巡らせ縄文を施す。292は深鉢G類で、口縁部は直線的に開き、外面にR L縄文を施す。293は胴部片で、外面に突帯を1条巡らせる。突帯横には沈線状の痕跡があるが、突帯上をなぞるか、C字状の押引きを施している可能性がある。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の大麦田III式、近畿地方の北白川下層III式、尾元遺跡前期後葉4期以降のものと思われる。

SK405 (図48)

検出状況 C地点BK2グリッド、III層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SI7と重複し、本遺構が新しい。

形状 形状は不整円形である。壁はやや開き、底面は平坦である。

埋土 単層で、ブロックや径5cm程の円礫を含む。

遺物出土状況 縄文土器や石器が埋土中から散在して出土したが、小片のため図示していない。

時期 SI7との重複関係と、出土した土器から縄文時代前期後葉以降と判断した。

SK437 (図49)

検出状況 C地点AK1～3グリッド、III層上面で検出した。平面形は非常に不明瞭で、遺物や礫を含む部分を本遺構の範囲と捉えた。

形状 西部と南東部が発掘区外に広がる長軸長8.62m以上の大型土坑である。全体の形状は不明である。壁は急で、底面はほぼ平坦である。本遺構の底面で縄文時代前期後葉の堅穴建物SI7を検出した。

埋土 単層で、ブロックや径3cm程の礫を含む埋土が10cm程堆積する。

遺物出土状況 縄文土器や石器が埋土中から散在して出土したが、小片のため図示していない。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。

SK439 (図48)

検出状況 C地点BI4グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は円形である。壁はやや開き、底面は平坦である。

埋土 単層で、径2cm程の亜円礫を含む。

遺物出土状況 縄文土器や石器が埋土中から散在して出土したが、小片のため図示していない。

時期 出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。

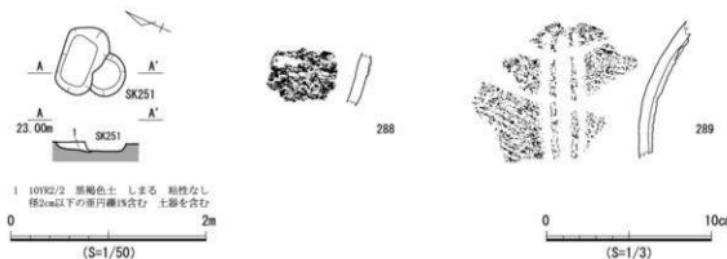


図47 SK252

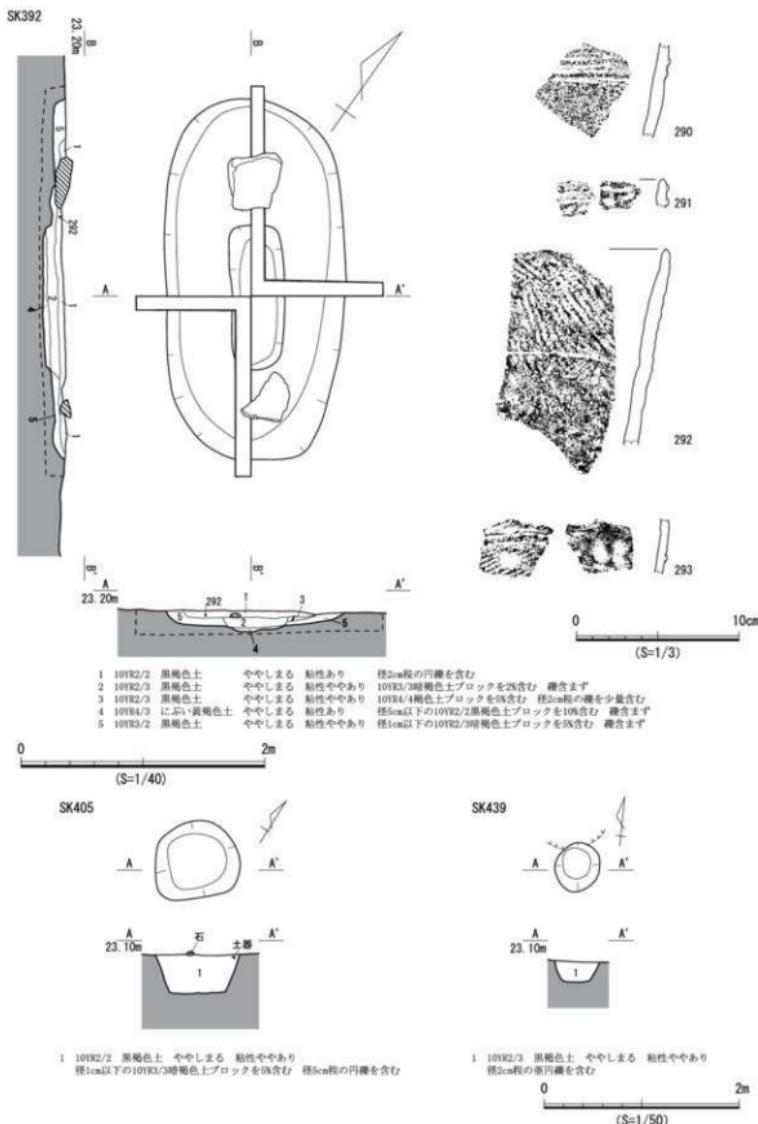


図48 SK392・SK405・SK439

3 柱穴

SP 7 (図 50)

検出状況 A地点 AL9 グリッド、SK10 の底面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は円形である。壁は東端が緩やかに開くが、下部はいずれも直立する。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層にブロックと炭化物を含む。

遺物出土状況 繩文土器が埋土中から散在して出土したが、小片のため図示していない。

時期 出土した土器から縄文時代と判断した。

SP45 (図 50)

検出状況 B地点 AK14 グリッド、SI2 挖方底面及びIII層上面で検出した。北側は SI 2 と重複し、SI 2 が新しい。平面形はやや明瞭で、1層上面には鉄分の沈着が認められた。

形状 残存部から形状は円形と思われる。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。1層が柱痕跡、2~4層が柱掘方埋土であり、亜円礫を含む。柱径は 13cm である。

遺物出土状況 やや大きめの縄文土器(294)が 5cm~10cm の深さから出土した。

出土遺物 294 は前期後葉の縄文土器の深鉢 A 1 類で、口縁部外面に C 字状の刺突を伴う突帶を 2 条 巡らせる。

時期 弥生時代末の竪穴建物 SI 2 との重複関係や、出土した土器から縄文時代前期後葉と判断した。

既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の大麦田 II 式、近畿地方の北白川下層 II c 式、尾元遺跡前期後葉 3 期以降のものと思われる。

SP104 (図 50)

検出状況 C 地点 BH3 グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は円形である。壁は北側を除いて緩やかに開き、下部はいずれも直立する。底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。全体に1層が堆積し、2層が柱痕跡、3・4層が柱掘方埋土である。3層には焼土ブロックが混じる。

遺物出土状況 縄文土器 2 点が 21cm~25cm の深さから出土したが、小片のため図示していない。

時期 出土した土器から縄文時代と判断した。

SP110 (図 50)

検出状況 C 地点 BK2 グリッド、III層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SI 7 と重複し、本 遺構が新しい。

形状 形状は円形である。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1・2層ともブロックを含む。

遺物出土状況 縄文土器が埋土中から散在して出土したが、小片のため図示していない。

時期 SI 7 との重複関係と、出土した土器から縄文時代前期後葉以降と判断した。

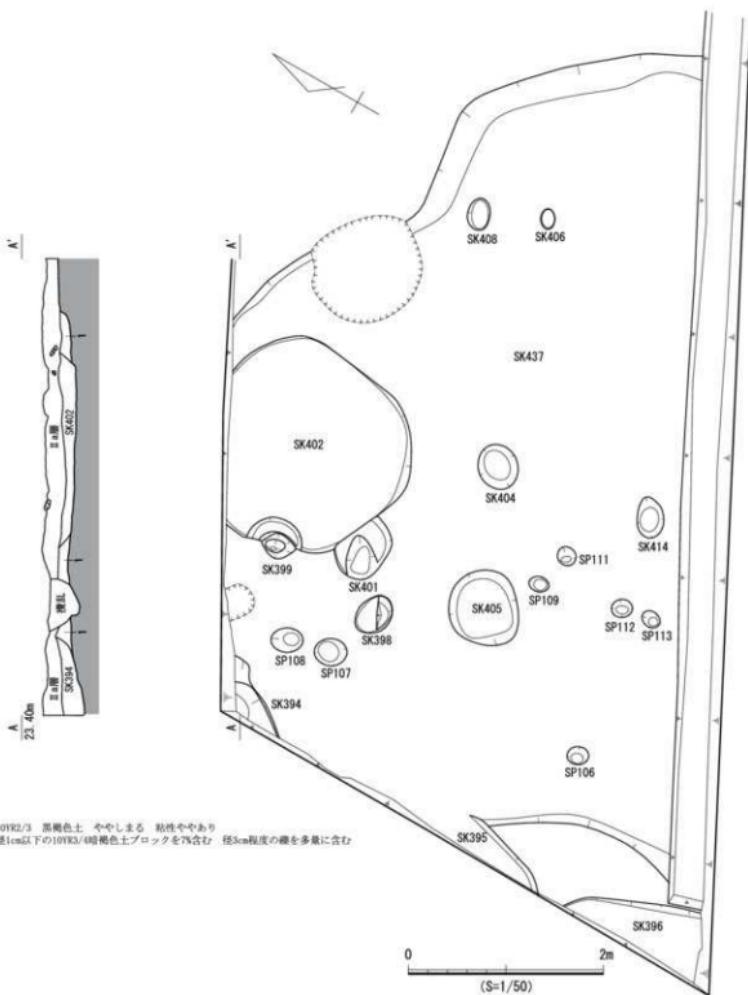


図49 SK437

1 10VR2/3 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10VR3/6暗褐色土ブロックを7%含む 径3cm程度の繊を多量に含む

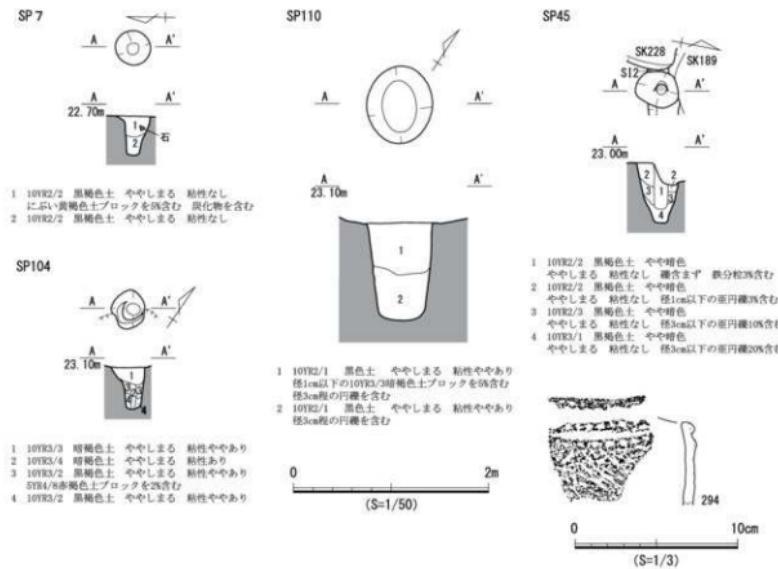


図50 SP110・SP7・SP45・SP104

第4節 繩文時代中期の遺構・遺物

1 壁穴建物

SI 1 (図51~図53)

検出状況 A地点 AN10~A011 グリッド、III層上面で検出した壁穴建物である。検出した範囲で 4.19 m × 2.80m である。北東部と南西部が発掘区外に広がるが、検出した 5 辺から五角形以上の多角形が想定できる。上部は削平されているが、検出時に壁際溝を明瞭に確認した。また、中央付近では、部分的に炉石が露出していた。平面形は明瞭である。長軸方位は N-30° -W である。なお、床面で検出した SK17 と SK18 は、他の遺構と埋土が異なること、SK17 は柱穴を結ぶ溝の上から掘り込まれていることや遺構内出土遺物から、新しい時期のものと判断した。

埋土 検出時には床面まで削平を受けていたため、埋土は確認できなかった。

壁 削平され消失しているため、形状は不明である。

床面 ほぼ平坦である。削平と攪乱により貼床は部分的に薄く残存するのみであった。貼床は黒褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、石圍炉 1 基、柱穴 3 基、壁際溝 2 条、溝 5 条、性格不明土坑 10 基である。埋甕は確認できなかった。壁穴内の位置関係と埋土状況から P1、P2、P3 が柱穴と考えられる。P1 と P2 では柱痕跡を確認し、柱径はそれぞれ 6 cm、11 cm を測る。P3 では柱痕跡を確認できなかった。P1 と P2 では、それぞれ重複する遺構 P5・P7 を検出した。柱痕跡は認められないものの、ともに P1・P2 よりも新しく、深さもあることから建て替えの可能性がある。また、各柱穴を結ぶように巡る溝を確認した。P2・P3 間のみ二本の溝がほぼ平行して延びる。埋甕が確認できなかったこと、検出範囲では壁際溝が途切れる箇所がないことから南西側が建物の入口であった可能性が考えられる。

炉 建物のほぼ中央部に位置する炉跡は、炉石の半数以上が抜き取られていた。抜取痕 2 と抜取痕 3 の底面では炉石と同じ石材の角礫がそれぞれ出土した。角礫の大きさは一辺が 17~34cm である。R-R' 断面の 10 層が被熱した層で、炉底面では 0.66m × 0.63m の範囲で被熱面を確認した。被熱の厚さは 0.1m を測る。

床下 貼床撤去後、性格不明土坑 6 基を検出した。

遺物出土状況 建物の埋土がなかったため、遺物の出土は少量であった。残存する炉石の内側（6・7 層）から炭化物とともに土器片が散在して出土した。

出土遺物 295 は壁際溝 2 から出土した繩文時代前期後葉の深鉢 D 2 類と思われ、口縁部に沿って 3 条の突帯を巡らせ、突带上には L R 繩文を施す。296~299 は繩文時代中期後葉の土器である。296 は炉から出土した胴部片で、垂下する隆帶を施す。297 は炉から出土した深鉢の脚台部で、長楕円形の透かしを 4 方向にあける。298 は P3 から出土した深鉢の胴部片で、外面に R L 繩文を施す。299 は P7 から出土した深鉢で、外面に R L 繩文を施す。300 と 301 は MF である。302 は壁際溝 2 から出土した石錐 1a 類で、片側の脚部を欠損する。303 は炉から出土した石錐 1 類で、末端辺に加工を加えて錐部を作り出している。304 は炉から出土した MF である。

時期 炉出土土器（296 と 297）から繩文時代中期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の島崎 III 式、東野遺跡 SH1 に併行する時期のものと思われる。

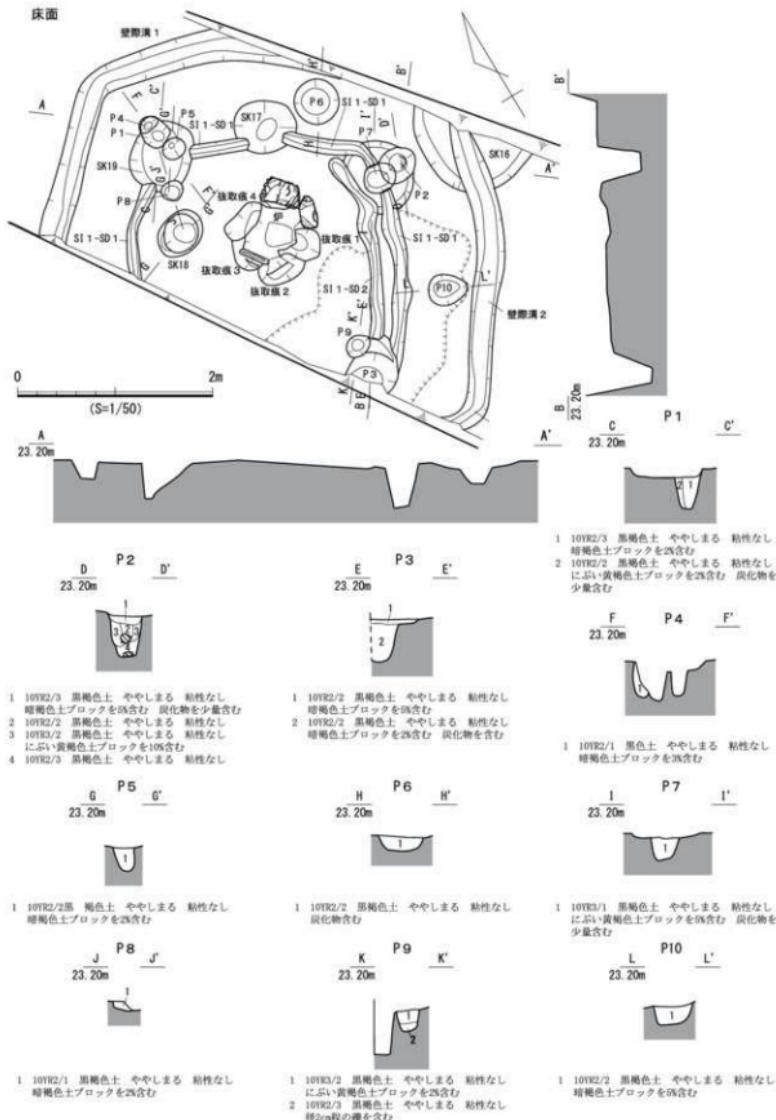


図51 SI 1 (1)

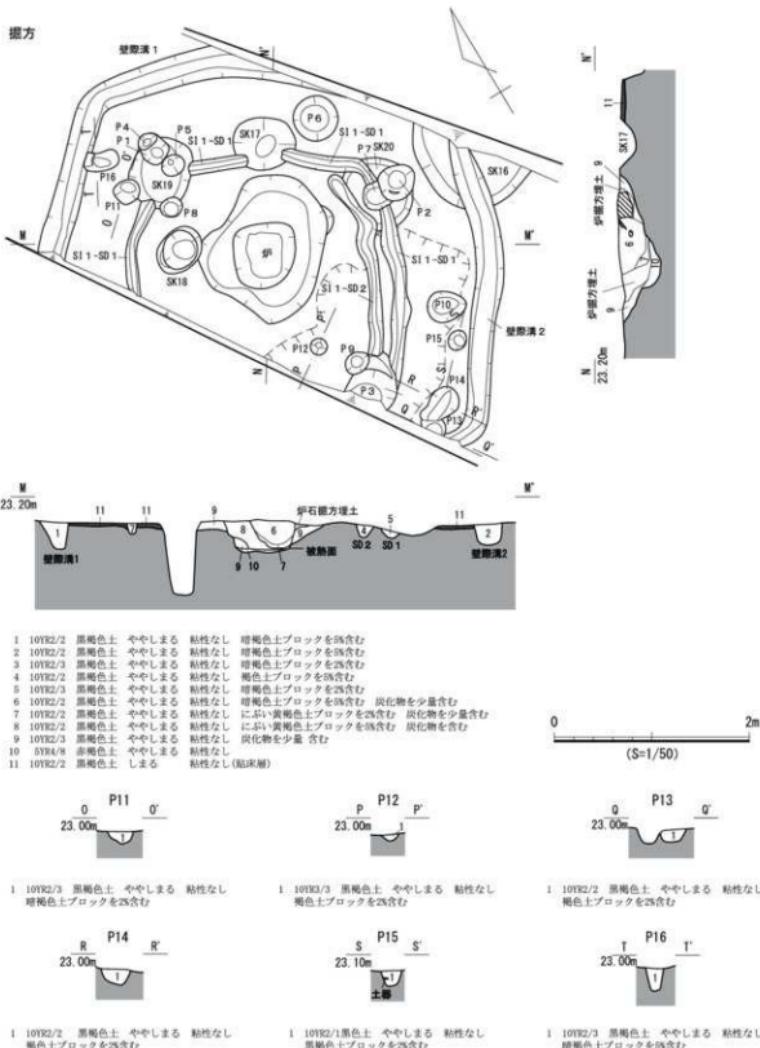


図52 SI 1 (2)

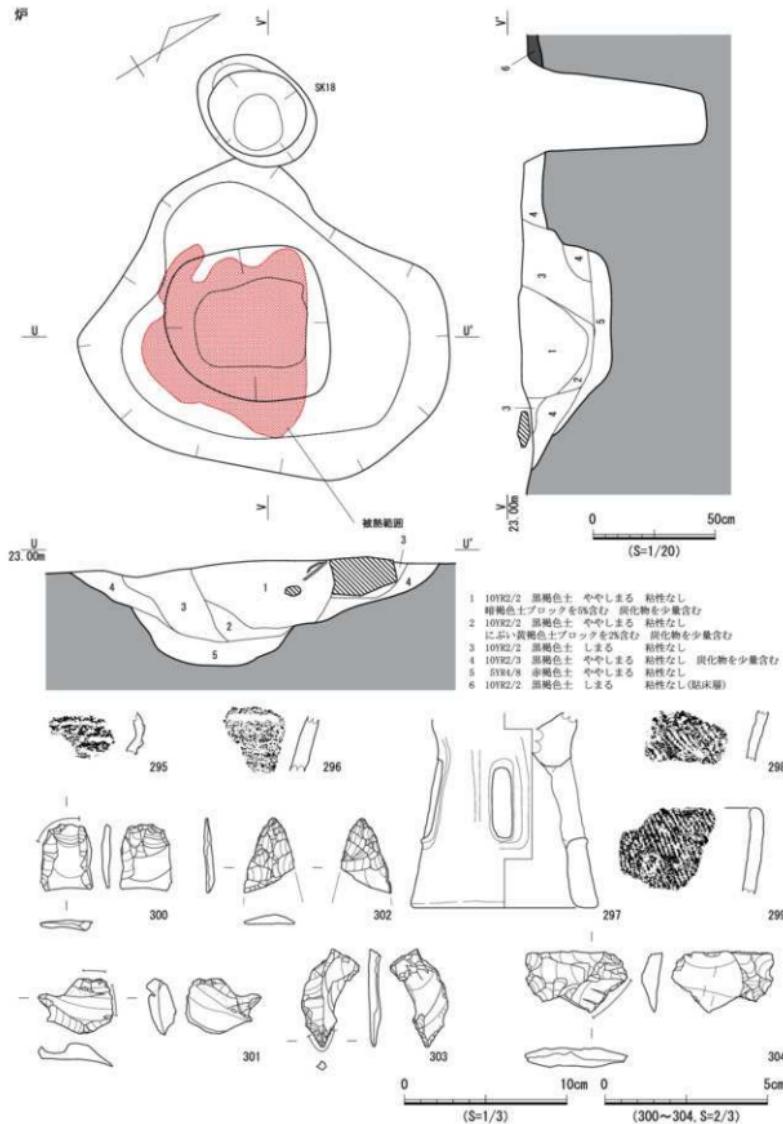


図53 SI 1 (3)

2 土坑

SK20 (図54)

検出状況 A地点 A011 グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。SI 1と重複し、本遺構が新しい。

形状 形状は円形である。壁は緩やかに開き、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層で、ブロック土を含むことや土器がまとまって出土したことから人為堆積と考える。

遺物出土状況 307は底面中央部にて大半の破片が体部外面を上にして出土した。

出土遺物 305～307は中期の縄文土器の深鉢で、沈線による文様を施す。口縁部外面は横位の楕円形区画文とその内部には斜行沈線や羽状沈線が施される。胴部は2条の縦位沈線により区画され、その内部には崩れた羽状沈線を施す。

時期 出土した土器から縄文時代中期と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の島崎III式、東野遺跡 SH 1 に併行する時期のものと思われる。SI 1と重複するが、時期差はあまりないと考えられる。

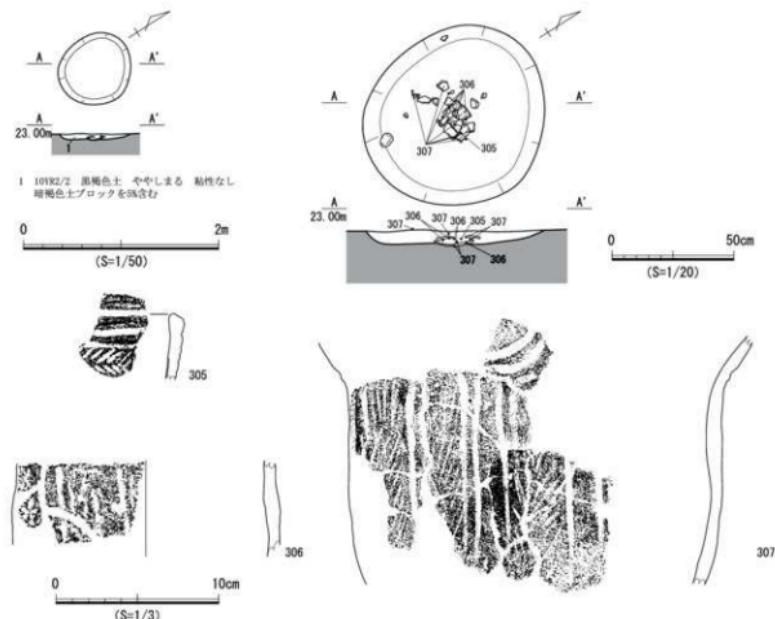


図54 SK20

SK160（図55）

検出状況 B地点 AJ14～AJ15グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は長楕円形である。壁は急で、底面は東側に向かってやや下がる。

埋土 3層に分層した。3層は北部と南部の壁際に堆積する。1・2層は中央の東西方向に壅み状に堆積する。いずれも1～3cmの亜円礫を含む。

遺物出土状況 繩文土器が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 308～312は前期後葉の縄文土器、313は中期の縄文土器である。308は深鉢B類で、口縁部外面に2条の突帯を巡らせ、R L縄文を施す。309～311は深鉢胴部片で、309は外面にR L縄文、310と311はL R縄文を施す。312は口縁部に沿って円孔をあける浅鉢である。313は深鉢の把手で外面に押引沈線を施す。314は石錐2類で、打点部に近い方の両側邊に加工を加えて錐部を作り出している。先端部がやや磨滅する。

時期 出土した土器から縄文時代中期と判断したが、縄文時代前期後葉の土器も多量に含むことから遺構が重複している可能性もある。

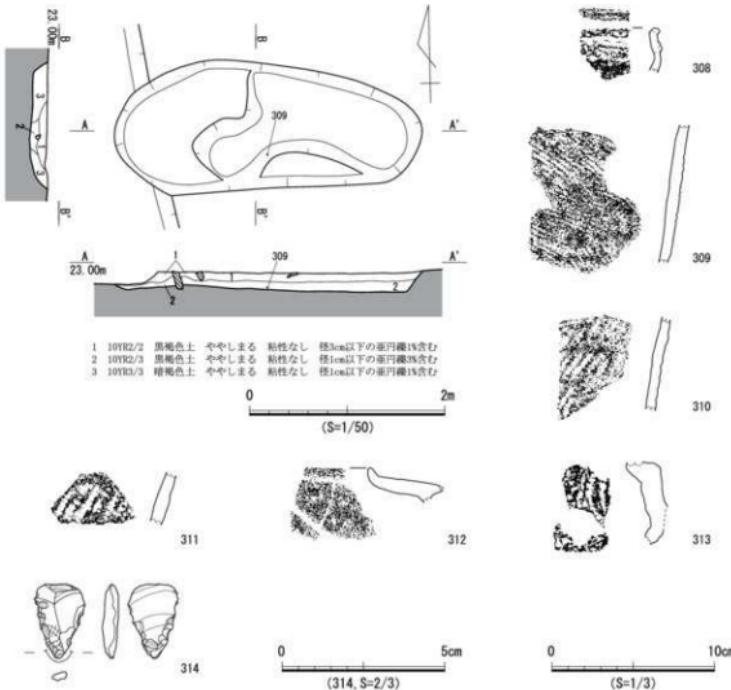


図55 SK160

SK201（図56）

検出状況 B地点 AJ13 グリッド、SI 4 堀方底面で検出した。平面形はやや明瞭で、礫が混じる状況が確認できた。

形状 形状は円形である。壁は東側がほぼ垂直に立ち、他はなだらかである。底面はややとがる。

埋土 単層で、底面付近まで礫を多量に含む。礫やブロック土を含むことから人為堆積と考える。

遺物出土状況 繩文土器が埋土中から散在して出土した。やや大きな破片も複数含まれる。

出土遺物 315 と 316 は中期の繩文土器の深鉢である。315 は口縁部で口縁部に沿って内部に刺突列を伴う凹線を施し、その下部に斜行沈線を施す。316 は胴部で、条線を地文とし縦位の沈線を施す。

時期 出土した土器から繩文時代中期後葉と判断した。既存の土器編年に対比させれば、東海地方西部の島崎III式、東野遺跡 SH 1 に併行する時期のものと思われる。

3 柱穴

SP 2（図56）

検出状況 A地点 AN11 グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 北東部が発掘区外に広がるため、全体形状は不明であるが、円形と思われる。壁は急である。底面は平坦で、周辺の遺構と比べてやや深さがある。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積である。

遺物出土状況 繩文土器と石器が埋土中から散在して出土した。繩文土器は 11cm～20cm の深さから多く出土した。いずれも小片のため、図示していない。

時期 出土した土器から繩文時代中期と判断した。

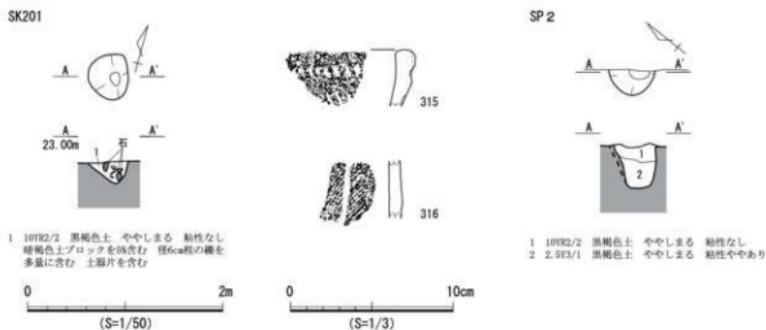


図56 SK201・SP 2

第5節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

1 柵

SA3 (図57)

検出状況 C地点 BA8・9グリッド、III層上面で検出した。3基の柱穴が直線上にほぼ等間隔で並ぶ。

平面形はP1とP3はやや明瞭、P2は不明瞭であった。

規模・形状 P1～P3間は3.9m、柱間は1.9m～2.0mである。方位はN~82°-Eで、発掘区外に延びる可能性がある。

柱穴 平面形状はP1・P2は円形、P3は発掘区外に広がるため不明である。長軸長0.40m～0.56m、深さ0.10m～0.32mである。P1では柱痕跡を確認し、柱径は0.13mであった。

遺物出土状況 P2から土師器2点が出土した。

出土遺物 いずれも小片で図示できるものはなかった。

時期 出土遺物から古墳時代前期以降と判断した。

SA5 (図58)

検出状況 B地点 AH15・16グリッド、III層上面で検出した。3基の柱穴が直線上にほぼ等間隔で並ぶ。

平面形はいずれも明瞭であった。

規模・形状 P1～P3間は3.1m、柱間は1.5m・1.6mである。方位はN~74°-Eで、発掘区外に延びる可能性がある。

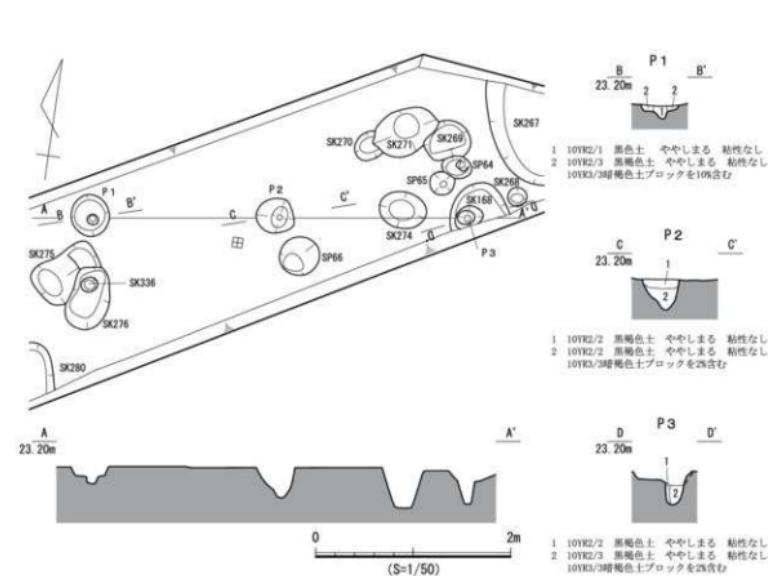


図57 SA3

びる可能性がある。

柱穴 3基とも平面形状は円形で、長軸長0.25m～0.39m、深さ0.08m～0.13mである。いずれも柱痕跡や柱当たりは確認できなかった。

遺物出土状況 いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

時期 古墳時代前期以降の柵SA3と方位が似ることから、古墳時代前期以降の可能性がある。

2 竪穴建物

B地点北西部で4軒、B地点東部で1軒、C地点西部で2軒、当該期の竪穴建物を確認した。B地点北西部で確認した4軒は重複又は近接する。

SI 2 (図59・60)

検出状況 B地点AK13～14グリッド、III層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で4.10m×3.30mである。西部が発掘区外に広がるが、三辺が直線的で北東・南西隅が直角になることから東西に長い長方形と考えられる。北側に位置するSI3との重複関係は不明瞭であった。SI3の掘削を進め、SI3の掘方がSI2の貼床と壁際溝を掘り込んでいることを確認できたため、本遺構はSI3より古

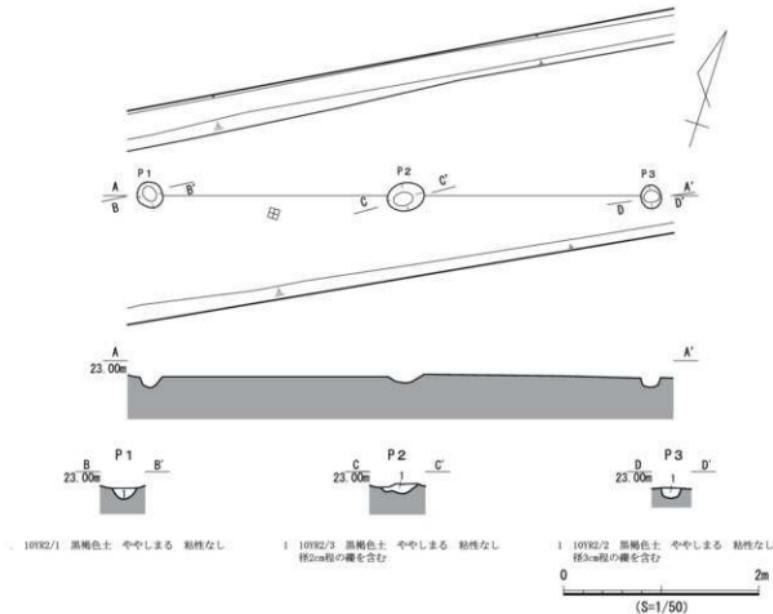


図58 SA 5

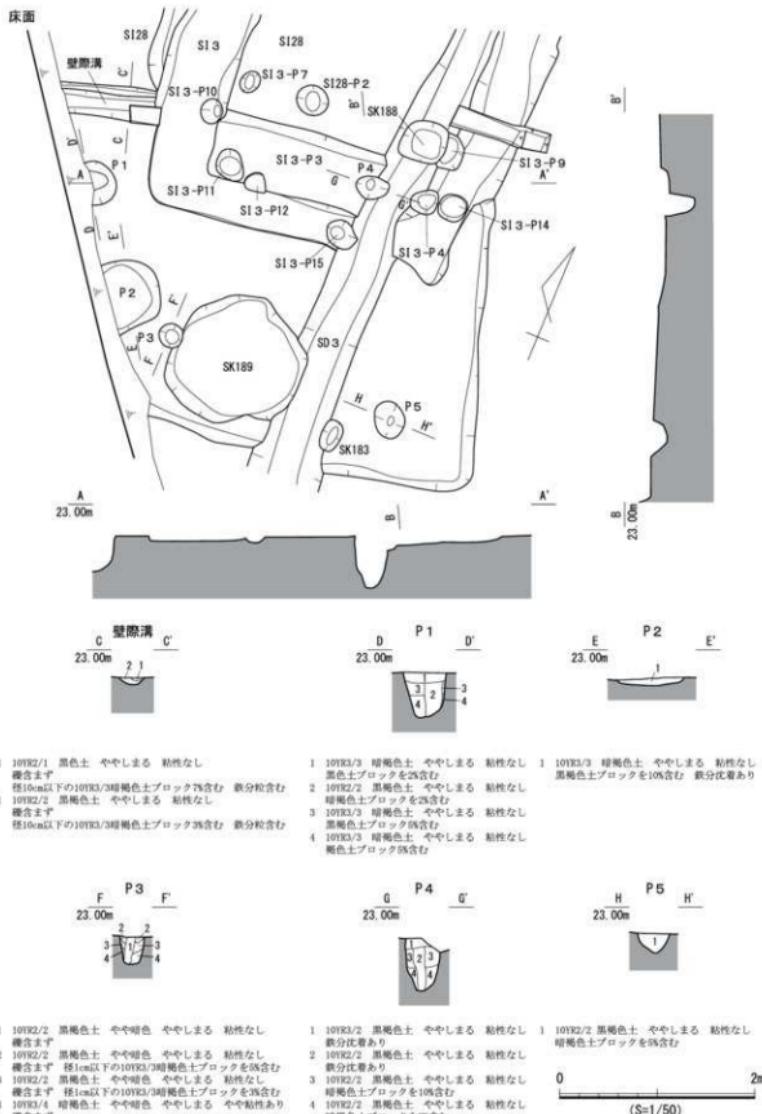


図59 SI 2 (1)

いと判断した。

埋土 単層である。埋土にブロック土を含むため人为堆積と思われる。

壁 残存する東壁と南壁は急で、壁の残存高は最大で0.08mである。

床面 ほぼ平坦である。SI 3と重複関係がない部分を除き貼床を確認し、層厚0.04m～0.09mを測る。暗褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、壁際溝1条、柱穴4基、性格不明土坑1基である。壁

掘方

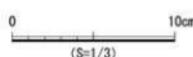
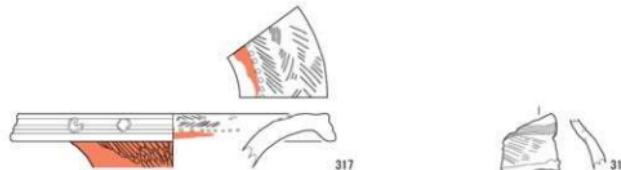
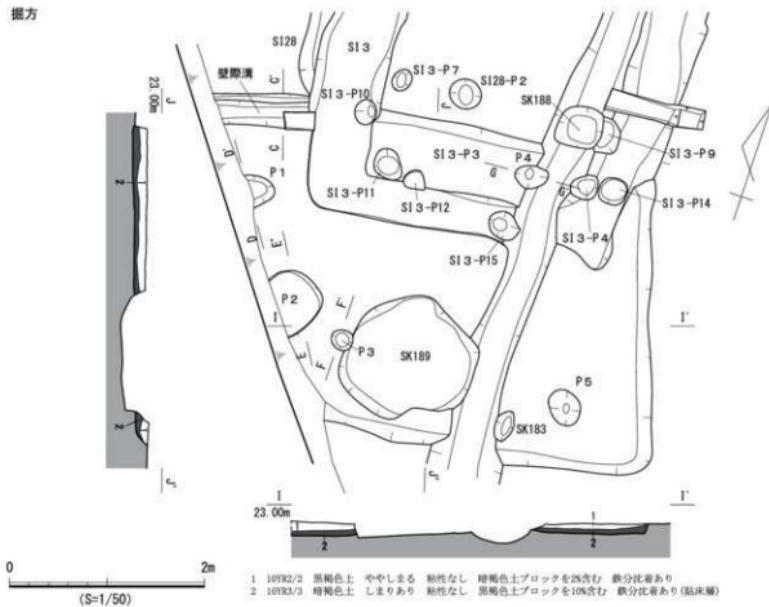


図60 SI 2 (2)

際溝は、本遺構の北西部で確認した。柱痕跡を確認したP1とP4、位置関係からP5が柱穴で、残りの1基は南西側の発掘区外に存在すると思われ、4本柱の建物と考えられる。柱径はP1が0.18m、P3が0.08mを測る。

掘方 貼床除去後、底面に遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土から弥生土器が散在して出土した。

出土遺物 317はパレススタイル壺である。口縁端部を拡張し面をつくり、擬凹線文を施す。口縁部内面と頸部外面に赤彩が塗布される。318は弥生土器の鉢の胴部で、横線を施す。

時期 出土した土器から弥生時代末と判断した。

SI 3（図 61・62）

検出状況 B地点 AJ13～AK14グリッド、Ⅲ層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で2.96m×2.78mである。東辺がやや湾曲するが全体の形状は方形に近い。本遺構の中央部から北西部にかけてSI28と重複し、SI28が新しい。SI28の底面で本遺構の掘方を明瞭に確認した。また、SI2とも重複し、掘方がSI2の貼床を掘り込むことから本遺構が新しい。

埋土 大部分がSI28と重複し、埋土は確認できなかった。

壁 壁はやや開く。壁の残存高は最大で0.12mである。

床面 壁際を幅広の溝状に掘ったあとに埋め戻して床面としている。ほぼ平坦で、貼床や硬化面は確認できなかった。床面で確認した遺構は、柱穴4基、性格不明土坑11基である。柱穴は、位置関係や堆積状況からP1～P4と考えられ、幅広の掘方の四隅内側に設定される。P1では柱痕跡を確認し、柱径は0.14mを測る。

掘方 壁際を全周する幅広の掘方を確認した。幅0.55m～0.80mを測る。掘方底面からはP13とSI2～P4を検出した。同様の掘方をもつ堅穴建物としては、荒尾南遺跡（大垣市）や東野遺跡（坂祝町）でも確認されており、いずれも古墳時代前期のものである。

遺物出土状況 埋土から弥生土器が散在して出土した。須恵器が少量出土したが、いずれも上層からの出土であることや大部分を弥生土器が占めることから混入と思われる。

出土遺物 319は弥生土器の器台の口縁部で、端部に2条の沈線が認められる。320は產地不明の畿内系の坪蓋で、美濃須衛窯II期併行のものである。

時期 SI2との重複関係と出土した土器から弥生時代末から古墳時代初頭と判断した。

SI 4（図 63～図 65）

検出状況 B地点 AI・AJ13グリッド、Ⅲ層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で3.08m×3.00mである。北部が発掘区外に広がり、西部が擾乱を受けている。東辺と南辺が直線で直交することから方形と思われる。平面形はやや明瞭であった。

埋土 2層に分層した。灰黄褐色土と暗褐色土ブロックが混じる黒褐色土がほぼ水平に堆積する。埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 東壁と南壁はやや急で、壁の残存高は最大で0.06mである。

床面 ほぼ平坦である。貼床は全体で確認し、層厚0.04m～0.06mを測る。暗褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、柱穴2基、性格不明土坑6基である。P1、P4がそれぞれ柱穴の可能性がある。柱痕跡を確認したP1が柱穴と考えると、柱配置は西部の擾乱内にあと1基存在していたと想定でき、

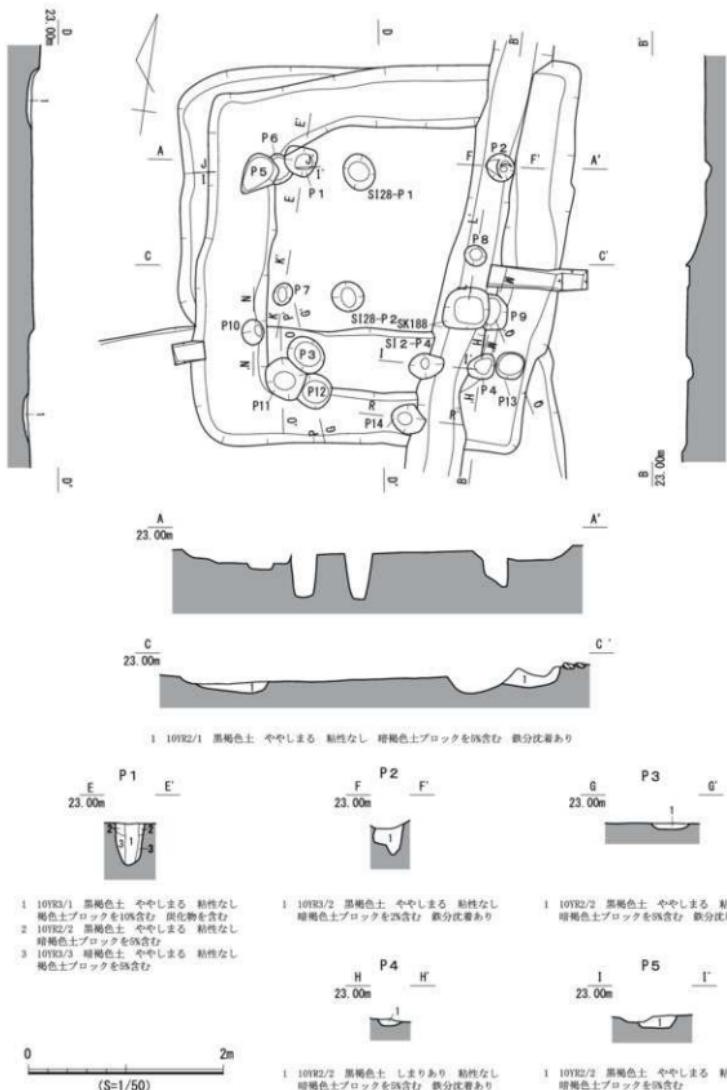


図61 SI 3 (1)

2本柱建物の可能性がある。P1 の柱径は 0.09m を測る。また、位置関係と遺構の深さから P4 が柱穴と考えると、柱配置は北側の発掘区外・西部の擾乱内にあと 3基存在していたと想定でき、4本柱の建物の可能性がある。

掘方 貼床除去後、柱痕跡を確認した柱穴 2基、性格不明土坑 6基を確認した。P10、P13 がそれぞれ柱穴になる可能性がある。P10 が柱穴だとすると、西部の擾乱内にあと 1基存在していたと想定でき、2本柱建物の可能性がある。また、P13 が柱穴だとすると、柱配置は北側の発掘区外・西部の擾乱内にあと 3基存在していたと想定でき、4本柱の建物の可能性がある。床面での検出状況とあわせて、3回建替が行われた可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土から弥生土器と石器が散在して出土した。

出土遺物 321～328 は弥生土器である。321 は高坏坏部、322～324 は壺の底部で平底である。325 と 326 は壺の口縁部、327 は鉢である。328 は高坏の脚部で、直径約 1cm の透しを有する。329 はスクレイバー 1a 類で、側辺に外湾する刃部をもつ。330 は打製石斧の破片で 3 類とした。

時期 出土した土器から弥生時代後期と判断した。

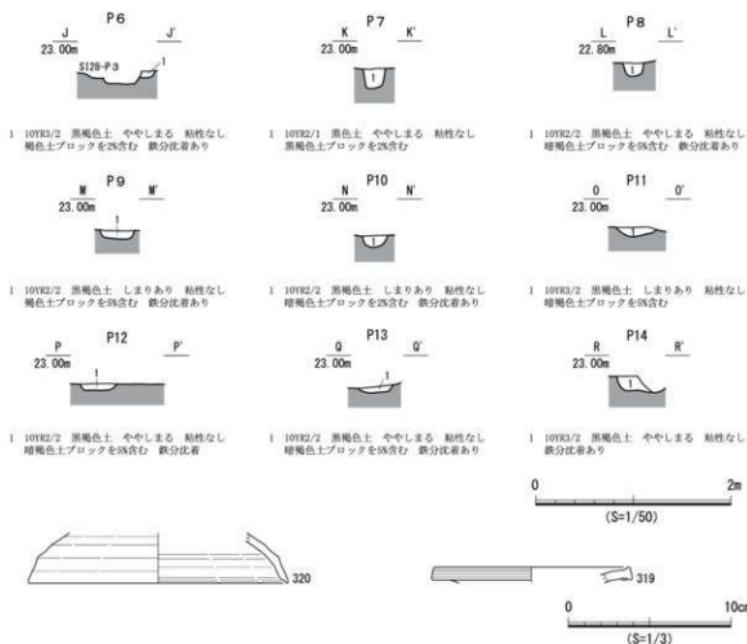


図62 SI 3 (2)

床面

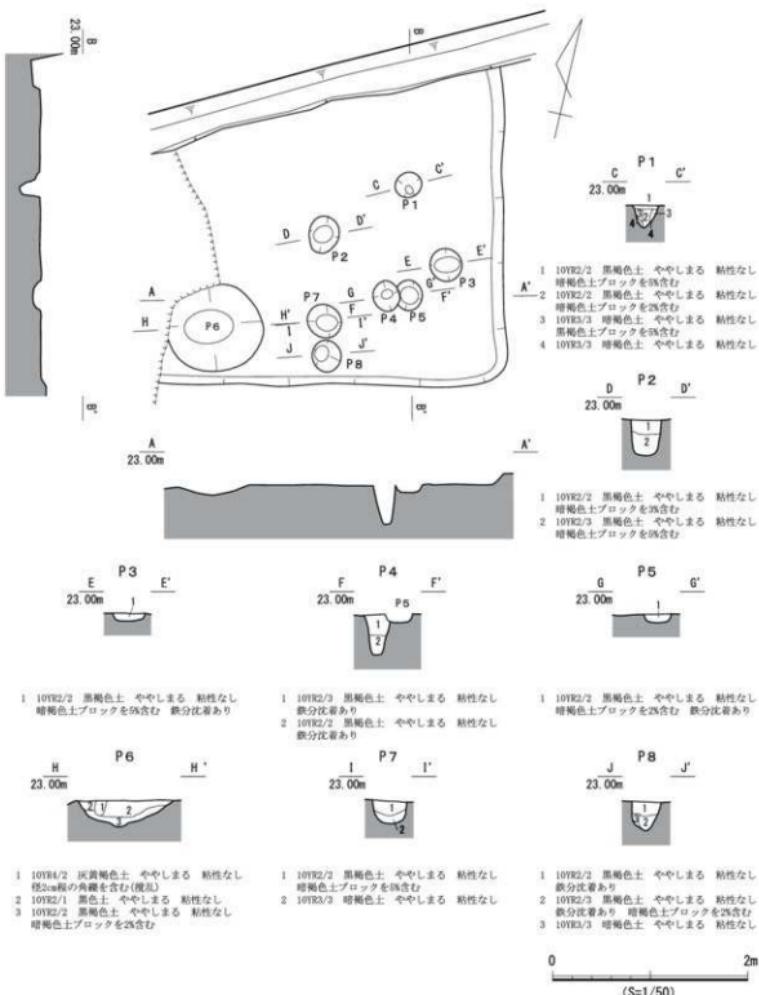


図63 SI 4 (1)

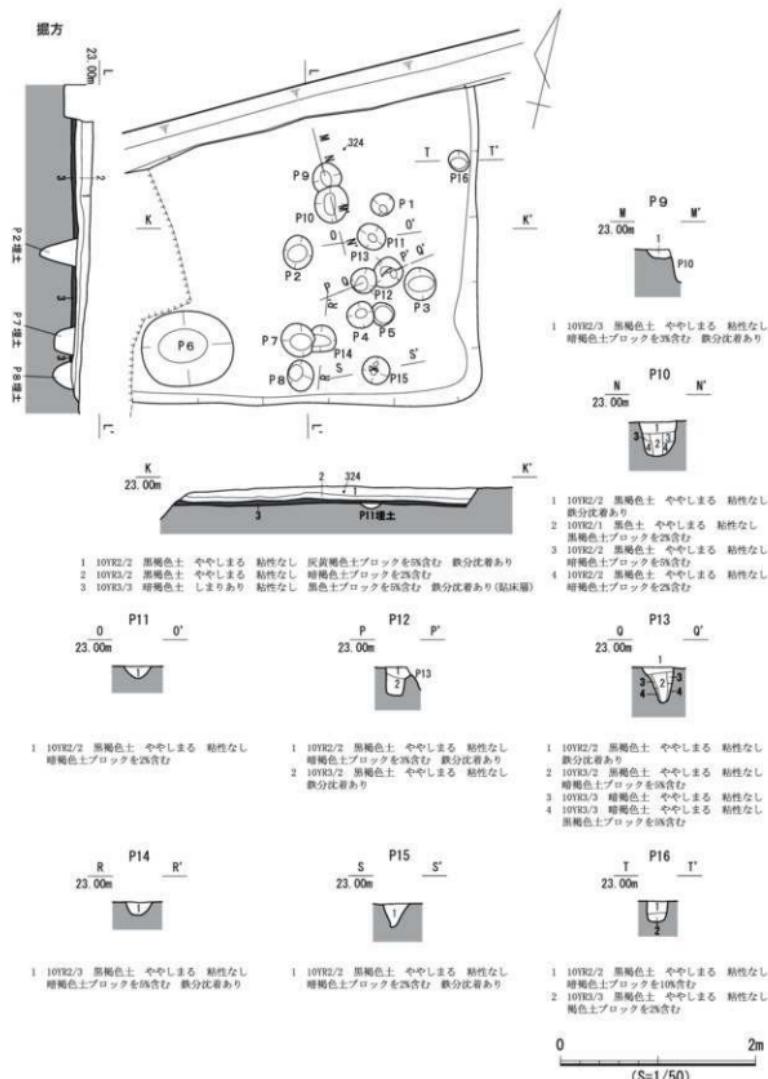


図64 SI4 (2)

SI 5 (図 66・67)

検出状況 B地点 AH18～AI19 グリッド、III層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で 5.07 m × 3.07 m である。南側及び西側が発掘区外に広がり、東側及び南側が他の遺構と重複する。北辺が直線であるため方形が想定できる。上部は削平されているが、検出時に北側の壁際溝を明瞭に確認した。本遺構の東側は SI 6、南側は SK113 と重複し、SI 6、SK113 が新しい。平面形はやや明瞭であった。

埋土 検出時には床面まで削平を受けていたため、埋土は確認できなかった。

壁 削平され消失しているため、形状は不明である。

床面 ほぼ平坦である。削平のため、貼床は薄く残存する。貼床は暗褐色土で、ややしまる。床面で検出した遺構は、柱穴 2 基、壁際溝 1 条、性格不明土坑 6 基である。位置関係や堆積状況から本遺構

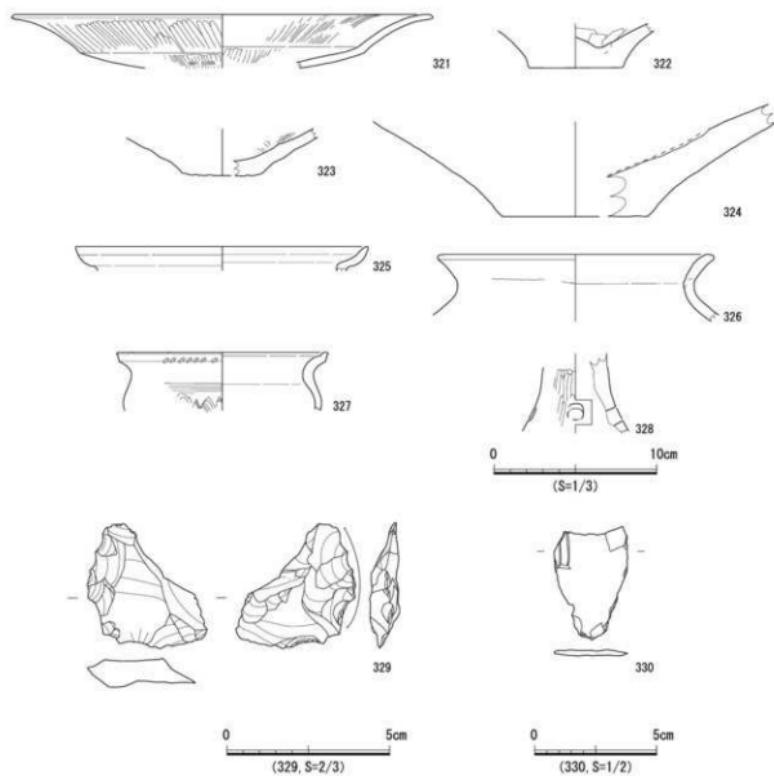


図65 SI 4 出土遺物

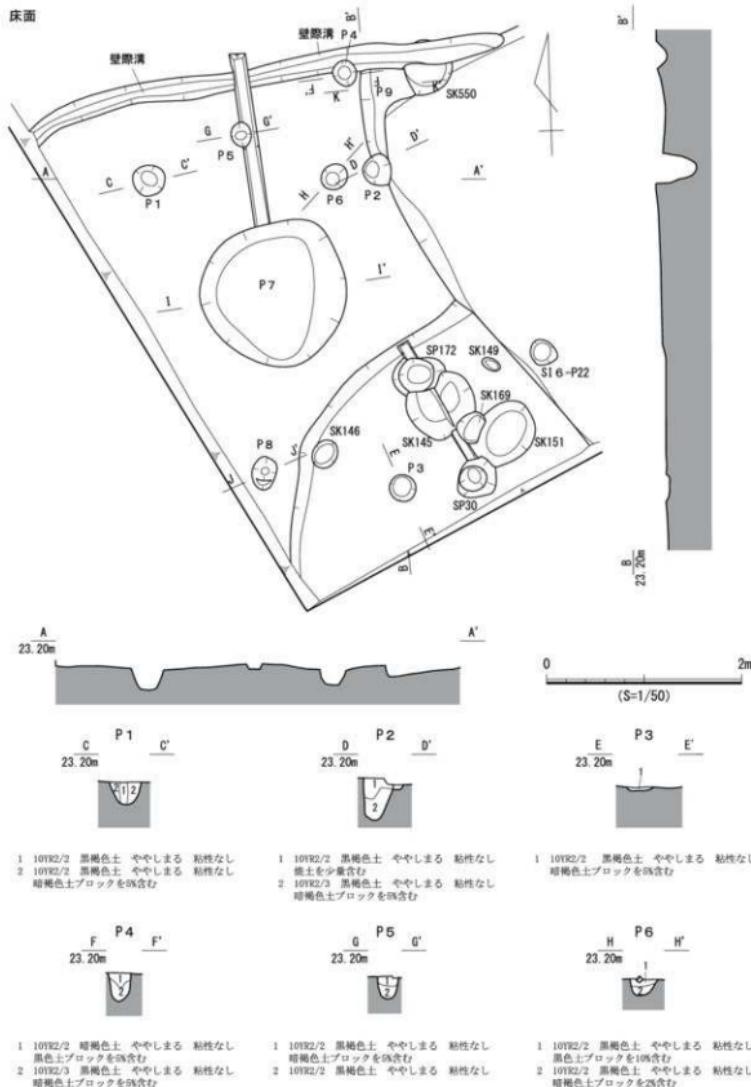


図66 SI 5 (1)

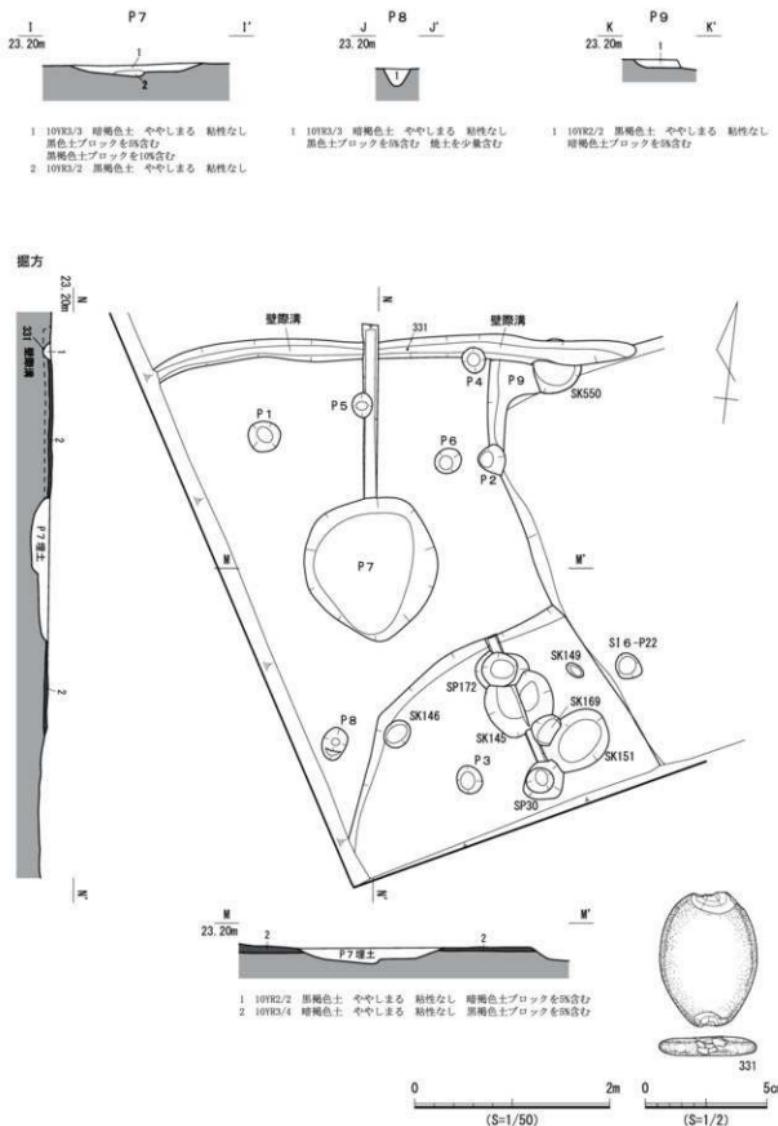


図67 S15 (2)

の床面で検出した P1、P2、SK113 の底面で検出した P3 が柱穴となり、南西側の発掘区外にあと 1 基柱穴が存在していると想定すると 4 本柱の建物と考えられる。P7 は柱穴内側のほぼ中央で検出した径約 1.5m の大型土坑である。床面を掘り込んでいるものの、掘り込んでいる面が不明なため、本遺構に伴うものかは不明である。P7 の埋土に焼土は含まれなかつた。

掘方 貼床除去後、底面に遺構は確認できなかつた。

遺物出土状況 貼床埋土から縄文土器、弥生土器、石器が散在して出土した。

出土遺物 331 は壁際溝から出土した打欠石錐で、両端とも裏表面に剥離痕が認められる。

時期 出土した土器と古墳時代後期の竪穴建物 SI6 との重複関係から弥生時代末から古墳時代初頭と判断した。

SI10 (図 68)

検出状況 C 地点 BI2 グリッド、III 層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 4.58m × 0.94m である。西部の大部分が発掘区外に広がるが、検出した範囲から隅丸方形と思われる。平面形はやや明瞭であった。柱穴は確認できなかつたが、方形の竪穴状の掘方であり、かつ壁際溝と貼床が確認できたため、竪穴建物と判断した。

埋土 単層である。埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 確認した東壁はやや開き、壁の残存高は 0.10m である。

床面 ほぼ平坦である。貼床は全体で確認し、層厚 0.04m ~ 0.06m を測る。暗褐色土ブロックを含む黒色土で、しまる。床面で検出した遺構は壁際溝 1 条で、検出した全ての辺で認められた。柱穴は発掘区外にあると考えられる。

掘方 貼床除去後、遺構は確認できなかつた。

遺物出土状況 埋土から土師器と石器が散在して出土した。

出土遺物 332 と 333 は土師器の壺である。332 は口縁部で、頸部から外反して開く。333 は胴部である。334 は石錐 1c 類で、両側辺と先端を欠損する。335 は砥石で、平坦な面に砥面が認められる。

時期 出土した土器から古墳時代前期と判断した。

SI28 (図 69)

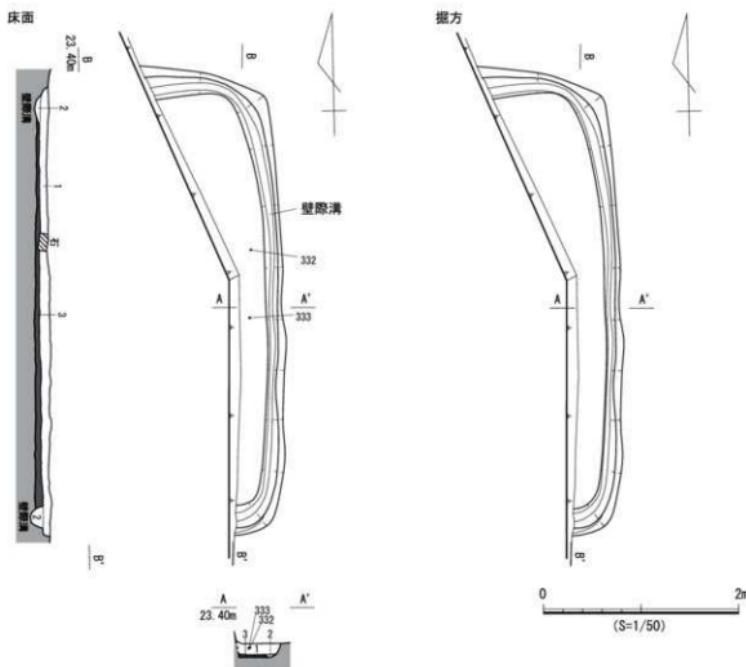
検出状況 B 地点 AJ13 ~ AK14 グリッド、III 層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 2.91m × 2.67m で、検出した他の竪穴建物と比べてやや小型である。東側を本遺構より新しい SD3 と重複するが、北東部で隅部と思われる湾曲が確認できるため、形状は方形と考えられる。SI3 と重複し、本遺構が新しい。平面形は不明瞭で、SI3 との関係性を判断することが困難であった。本遺構の北西隅が湾曲する形状が SI3 の形状と一致しないことから、本遺構と SI3 は別遺構であると判断した。

埋土 3 層に分層した。1 層が全体に堆積し、その下に 2 層または 3 層が堆積する。本遺構の東部では 2 層・3 層が認められない範囲があった。

壁 壁は開く。壁の残存高は最大で 0.14m である。

床面 ほぼ平坦である。貼床や硬化面は確認できなかつた。床面で検出した遺構は、柱穴 2 基、性格不明土坑 1 基である。中央付近に配置される P1・P2 が柱穴で 2 本柱の建物と考えられる。また、床面北部と西部で L 字状に延びる SI3 の掘方の一部を明瞭に確認した。

遺物出土状況 埋土から弥生土器、石器が散在して出土した。



- 1 10YK2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 残1cm以下の10YR3/3暗褐色土ブロックを25含む 緩合せず
 2 10YK2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 緩合せず(壁際溝地土)
 3 10YK2/2 黒褐色土 しまる 粘性ややあり 残1cm以下の10YR3/3暗褐色土ブロックを10%含む 緩合せず(粘床土)

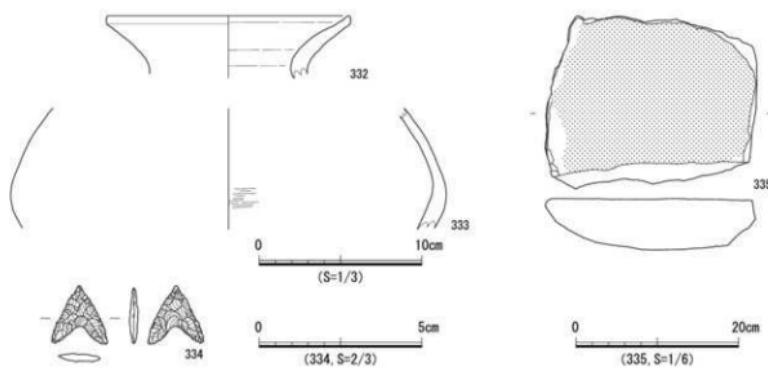


図68 SI10

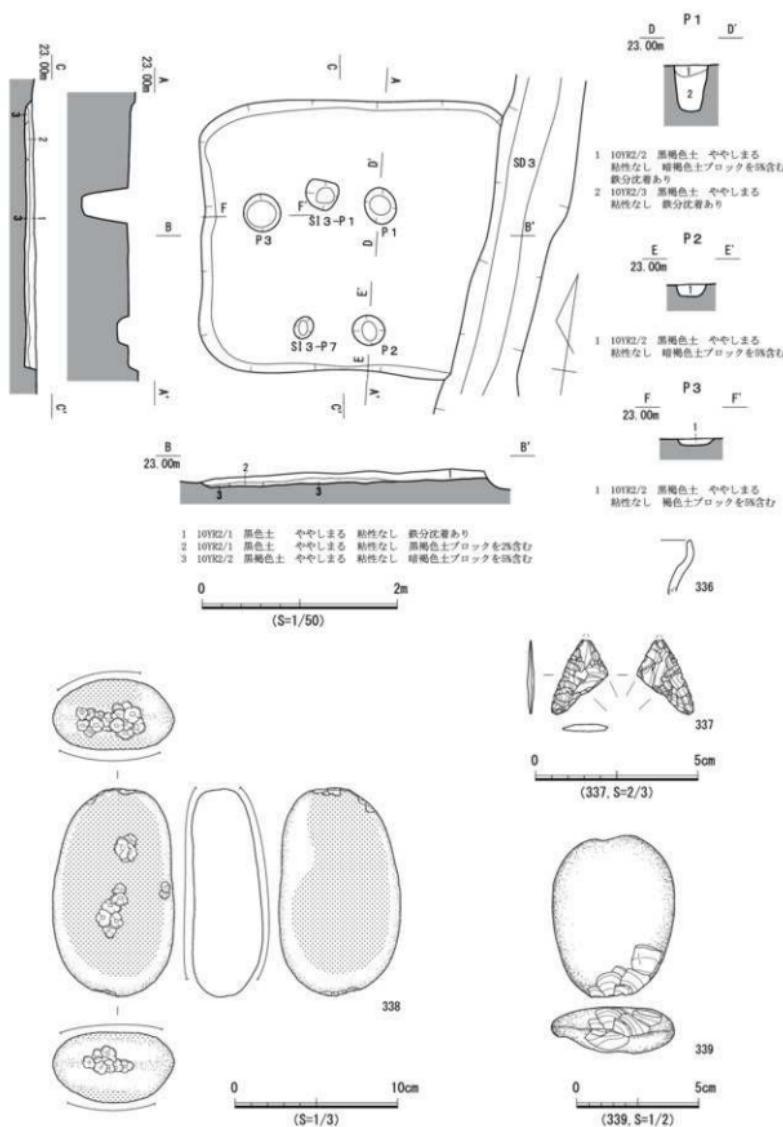


図69 SI128

出土遺物 336は弥生土器の壺の口縁部で、上段が受口状となる。337は石鎌1b類で、片側の脚部と先端を欠損する。338は磨石・圓石類2b類で、平坦面に磨痕と敲打痕が認められる。339はP1から出土した打欠石錐で、一端のみ表裏面に剥離痕が認められる。

時期 出土した土器やSI3との重複関係から弥生時代末～古墳時代初頭と思われる。

2 土坑

SK17(図70)

検出状況 B地点 AN11 グリッド、III層上面で検出した。SI1と重複し、本遺構が新しい。本遺構とSP173の埋土は類似し、SI1の埋土とは異なっていたため平面形はやや明瞭であった。

形状 形状はほぼ円形である。壁は緩やかに開き、底面は狭く、やや丸くなる。

埋土 単層で、ブロック土や炭化物を含み、土器がまとまって出土したことから人為堆積と考える。

遺物出土状況 深さ約0.09mの中央部から弥生土器がまとまって出土した。大部分の破片が横位で出土した。

出土遺物 340は弥生土器の壺である。口縁部が直線的に開き、端部に外傾面を有する。341は弥生土器の壺の胴部で、4条の横線が施される。

時期 SI1との重複関係や出土した土器から弥生時代後期と判断した。

SK279(図71)

検出状況 C地点 BB8 グリッド、III層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 南部が発掘区外に広がり、全体の形状は不明であるが、円形と思われる。壁はやや開き、底面は平坦である。

埋土 単層で、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土底面付近からやや大きめの土師器片が散在して出土した。いずれも小片のため、図示していない。

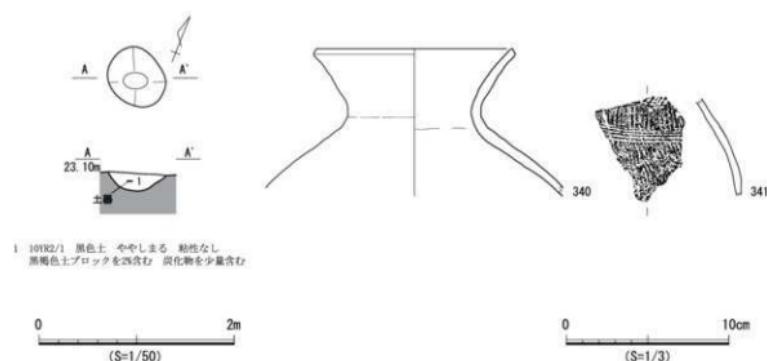


図70 SK17

時期 出土した土器から古墳時代前期と判断した。

SK307（図71）

検出状況 C地点 BD8 グリッド、III層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 東部が発掘区外に広がり、全体の形状は不明である。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

埋土 単層で、ブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から弥生土器が散在して出土した。いずれも小片のため、図示していない。

時期 出土した土器から弥生時代末～古墳時代初頭と判断した。

SK369（図71）

検出状況 C地点 BE1 グリッド、III層上面で検出した。北東部はやや攪乱を受けているが、平面形は明瞭であった。

形状 形状は不整形である。壁は西部が直立し、他は上方が緩やかに開き、下方はほぼ直立する。底面は平坦である。

埋土 上下2層に分層した。1層は中央がやや壅む堆積である。

遺物出土状況 埋土から弥生土器が散在して出土した。底面付近からの出土が多い。

出土遺物 342は弥生土器の壺の口縁部である。口縁部が直立気味にのび、端部を丸く收める。

時期 出土した土器から弥生時代末～古墳時代初頭と判断した。

SK404（図71）

検出状況 C地点 BK2 グリッド、III層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 形状は円形である。底部付近は直立し、中程から外方に向かって開く。底面は平坦である。

埋土 単層で、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土から縄文土器と土師器が散在して出土した。いずれも小片のため、図示していない。

時期 出土した土器から古墳時代前期と判断した。

3 柱穴

SP76（図71）

検出状況 B地点 BD7 グリッド、III層上面で検出した。平面形は明瞭であった。周辺に同様の規模・形状の遺構は確認できなかった。

形状 形状は方形である。壁はほぼ直立し、底面中央がやや壅む。

埋土 4層に分層した。2層が柱痕跡、3・4層が柱掘方埋土であり、4層にブロック土を含む。柱径は12cmである。

遺物出土状況 2・3層から複数の土師器片が出土した。いずれも小片のため、図示していない。

時期 掘方埋土である3層から出土した土器から古墳時代前期と判断した。

SP173（図71）

検出状況 B地点 AN～A011 グリッド、III層上面で検出した。SI1と重複し、本遺構が新しい。本遺構とSK17の埋土は類似し、SI1の埋土とは異なっていたため平面形はやや明瞭であった。

形状 平面の規模に対して深く、形状はほぼ円形である。壁は、上方は緩やかに開き、下方はほぼ直

立する。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層は中央がやや瘤む堆積で、ブロック土や炭化物を含む。

遺物出土状況 2層下部から弥生土器の破片が出土したが、小片のため、図示していない。

時期 SI 1との重複関係や出土した土器から弥生時代後期と判断した。

4 溝

SD 4 (図72・73)

検出状況 B地点 AJ13～AL15グリッド、III層上面で検出した。当該期の堅穴建物SI 2～4の東側に位置する溝で、平面形は、北側はやや明瞭、南側は不明瞭であった。SI 3・SI 4と重複し、SI 3・SI 4が新しい。

形状 南北方向の溝で、南北端は発掘区外に延びる。幅4.90m、深さ0.1mである。壁はやや開き、底面は平坦である。

埋土 単層で、ブロック土を含む。通水の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器と弥生土器、石器が散在して出土した。南部では縄文土器の出土が多い。

出土遺物 343～351は前期後葉の縄文土器である。343は深鉢A類の口縁部と思われるが、口縁端部は平坦である。口縁部外面には突帯による文様を施す。344も深鉢A類の口縁部と思われるが、2条の突帯を貼り付け、突带上には斜めの刻みや格子目状の刻みを施す。345は深鉢B 1類と思われるが、

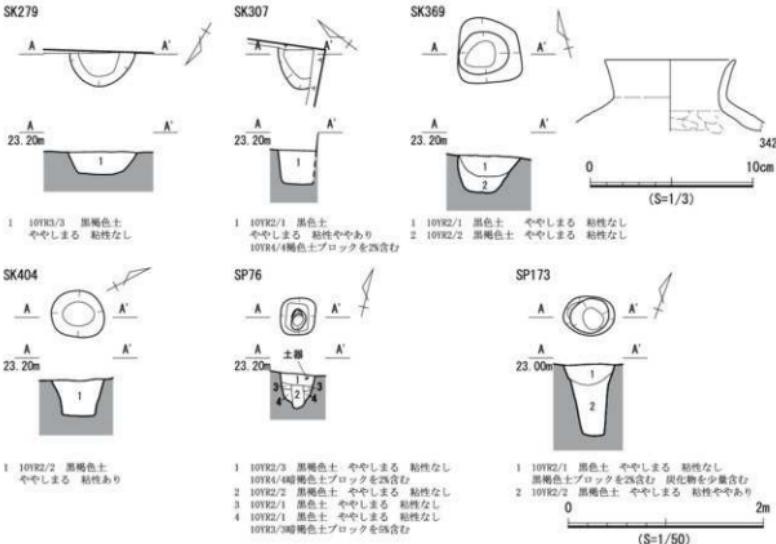


図71 SK279・SK369・SK404・SP76・SP173

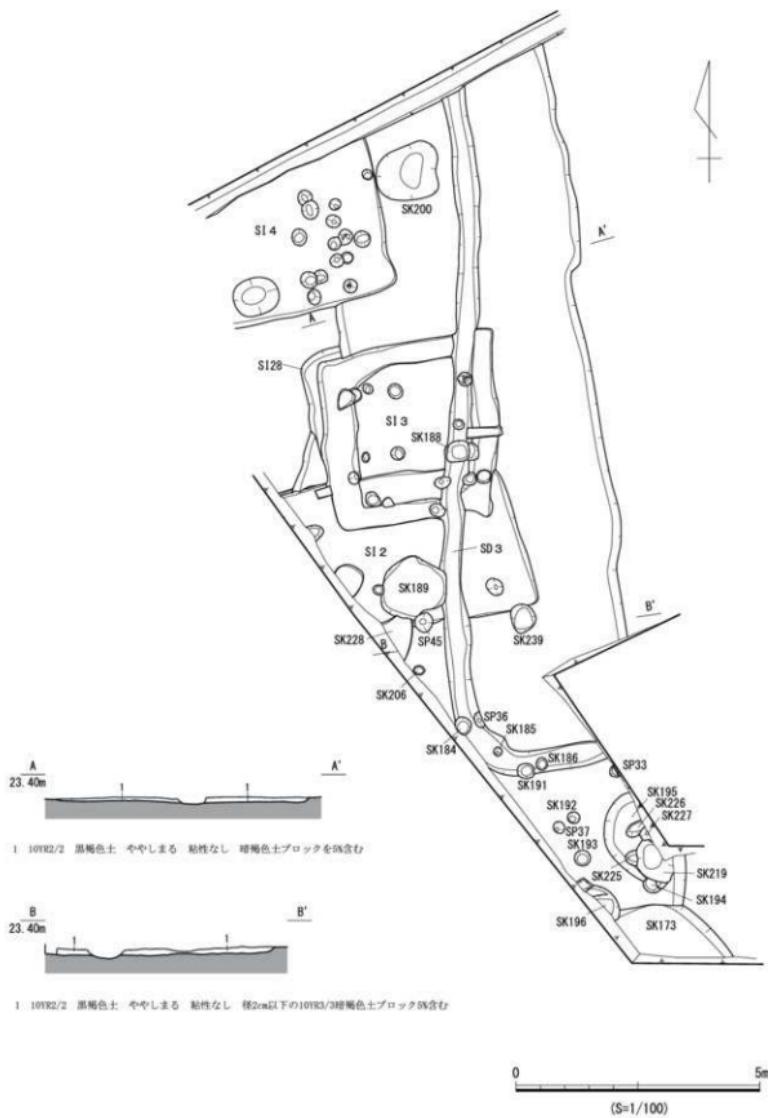


図72 SD 4

3条の突帯を貼り付ける。346 も深鉢B 1類と思われるが、口縁部に沿って2条の突帯を貼り付け、突帯上にC字状の刺突文を施す。347は深鉢F類で、半截竹管による沈線文を施し、その内部を刺突する。348は波状口縁となる深鉢G類で、外面にL R繩文を施すが、繩文原体の開く末端を縛った繩と思われる痕跡が確認できる。349は外面に羽状繩文を施す胴部片である。350は底部片で、外面がやや張り出す。351は浅鉢の胴部片である。352はRFで、石匙若しくはスクレイパーの欠損品の可能性がある。353はMFである。354は石皿で、扁平な自然石を用いている。

時期 弥生時代末の堅穴建物SI 2との重複関係や出土した土器から弥生時代末以前と判断した。

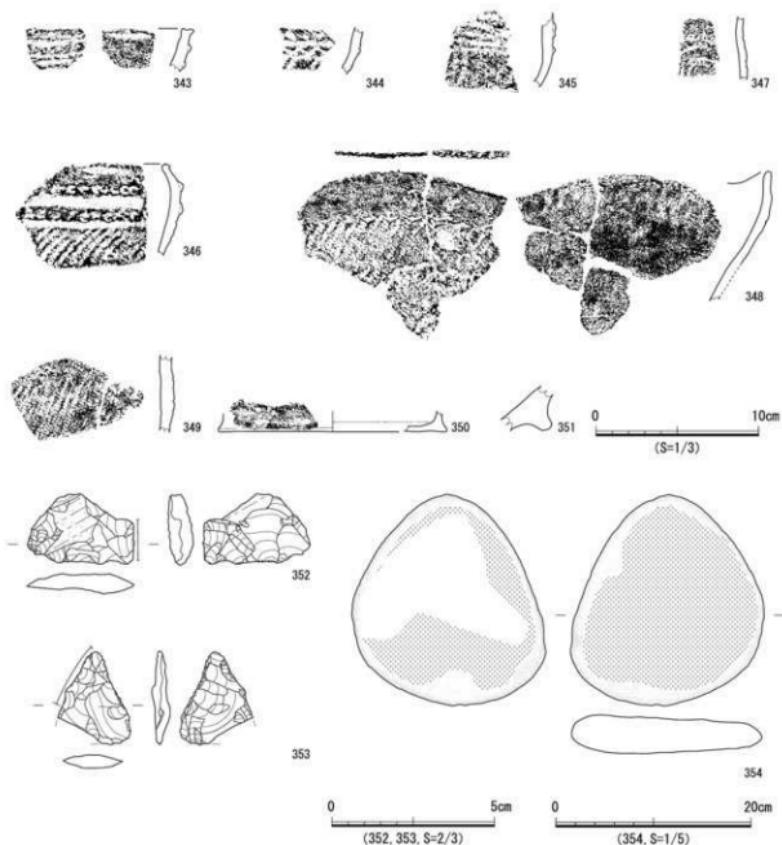


図73 SD 4 出土遺物

第6節 古墳時代後期の遺構・遺物

1 標

SA 1 (図74)

検出状況 C地点 BD5・6グリッド、III層上面で検出した。4基の柱穴が直線上にほぼ等間隔で並ぶ。平面形はいずれもやや明瞭であった。

規模・形状 P1～P4間は4.4m、柱間は1.4m～1.5mである。方位はN-23°-Wである。

柱穴 4基とも平面形状は円形で、長軸長0.25m～0.38m、深さ0.13m～0.37mである。P3・P4では柱痕跡を確認し、柱径はそれぞれ0.14m、0.08mであった。

遺物出土状況 いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

時期 古墳時代後期の堅穴建物SI16と長軸方位が似ることから、古墳時代後期の可能性がある。

SA 2 (図75)

検出状況 C地点 BD7・8グリッド、III層上面で検出した。3基の柱穴が直線上に並ぶ。平面形はいずれもやや明瞭であった。

規模・形状 P1～P3間は3.5m、柱間は1.6m・1.9mである。方位はN-78°-Wで、発掘区外に延びる可能性がある。

柱穴 3基とも平面形状は円形で、長軸長0.22m～0.37m、深さ0.23m～0.41mである。P1・P3では柱痕跡を確認し、柱径はそれぞれ0.13m、0.10mであった。

遺物出土状況 いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

時期 古墳時代後期の堅穴建物SI14と長軸方位が似ることから、古墳時代後期の可能性がある。また、

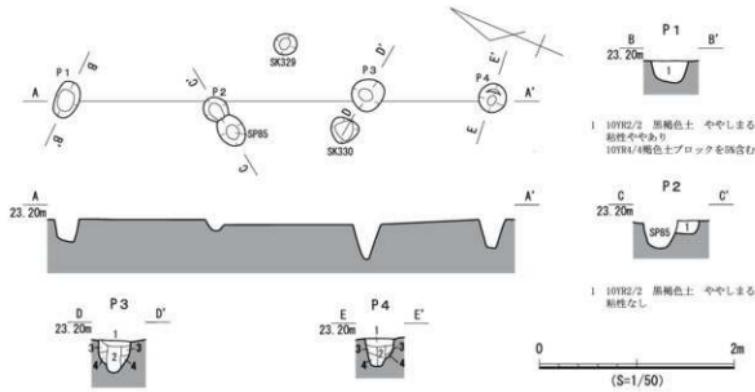


図74 SA 1

SA 6 と方位が似ることから同時期と思われる。

SA 4 (図 76)

検出状況 B 地点 AI14~15 グリッド、III 層上面で検出した。3 基の柱穴が直線上にほぼ等間隔で並ぶ。平面形はいずれも明瞭であった。P1 が SB 1-P1 と重複し、P1 が新しいことから、本遺構は SB 1 より新しい。

規模・形状 P1~P3 間は 4.1m、柱間は 2.1m~2.0m である。方位は N-54° -W で、発掘区外に延びる可能性がある。

柱穴 3 基とも平面形状は円形で、径は 0.33m~0.36m、深さは 0.08m~0.30m である。いずれも柱痕跡や柱当たりは確認できなかった。

遺物出土状況 P2 の埋土から土師器 2 点が散在して出土した。

出土遺物 いずれも小片で図示はしていない。

時期 古墳時代後期の掘立柱建物 SB 1 との重複関係から、古墳時代後期以降と考えられる。

SA 6 (図 76)

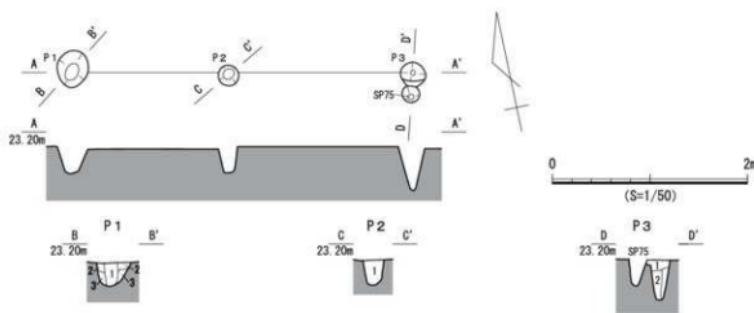
検出状況 C 地点 BD 5・6 グリッド、III 層上面で検出した。4 基の柱穴がほぼ等間隔で L 字状に並ぶ。平面形はいずれもやや明瞭であった。

規模・形状 P1~P3 間は 2.8m、柱間は 1.4m で、P3~P4 間は 1.5m である。長軸方位は N-67° -W である。

柱穴 4 基とも平面形状は円形で、長軸 0.27m~0.33m、深さ 0.14m~0.27m である。P2 では柱痕跡を確認し、柱径は 0.07m であった。

遺物出土状況 いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

時期 古墳時代後期の堅穴建物 SI14 と長軸方位が似ることから、古墳時代後期の可能性がある。また、SA 2 と方位が似ることから同時期と思われる。



- 1 10YR2/3 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
- 2 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
- 3 10YR3/3 黑褐色土ブロックを2%含む

- 1 10YR3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし

- 1 10YR2/3 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
- 2 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
- 3 10YR3/3 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり

10YR3/3層褐色土ブロックを2%含む

図75 SA 2

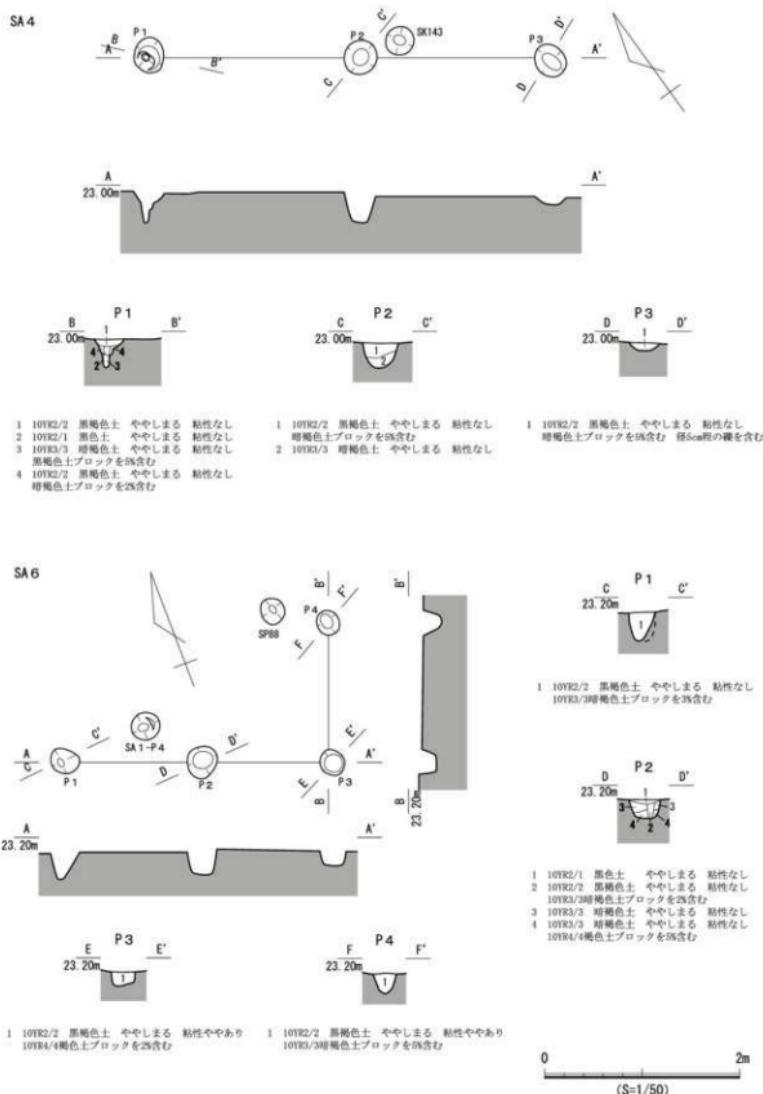


図76 SA 4・SA 6

2 堀立柱建物

SB 1 (図 77)

検出状況 B地点 AI14～AJ15 グリッド、III層上面で検出した。各柱穴の平面形は P1～P7・P9・P10 は明瞭、P8 はやや明瞭に確認できた。P1 が SA4-P1 と重複し、SA4-P1 が新しいことから、本遺構は SA4 より古い。

規模・形状 長軸方位は N-26° -W の堀立柱建物である。形状は長方形で、桁行 3間（5.2m）、梁行 2間（3.7m）、床面積 19.24 m² である。柱間は桁行 1.7m～1.8m、梁行 1.8m～1.9m である。P9 は柱筋からわずかに外側に位置する。桁行の中央に位置する P2 と P9 は他の柱穴と比べてやや小さい。柱穴 10 基の柱穴から成る。柱穴の平面形はいずれも円形で、長軸長 0.19m～0.55m、深さ 0.04m～0.26m である。

遺物出土状況 P1 から土師器が 2点、P2 から土師器が 2点、P4 から縄文土器が 1点、P5 から土師器が 4点、P7 から土師器が 1点出土した。

出土遺物 いずれも小片で図示はしていない。

時期 出土遺物から古墳時代後期と判断した。

SB 2 (図 78)

検出状況 C地点 BG8～BH9 グリッド、III層上面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれもやや明瞭に確認できた。

規模・形状 長軸方位は N-27° -W の堀立柱建物で、発掘区外に広がる可能性がある。長軸方位が SB 1 と近似する。形状は長方形で、桁行 3間（4.0m）、梁行 1間（3.6m）、床面積 14.4 m² である。柱間は桁行 1.1m～1.5m である。

柱穴 8 基の柱穴から成る。柱穴の平面形状はいずれも円形で、長軸長 0.33m～0.47m、深さ 0.05m～0.23m である。

遺物出土状況 P2 から縄文土器が 1点、P8 から土師器が 1点出土した。

出土遺物 いずれも小片で図示できるものはなかった。

時期 出土遺物や古墳時代後期の堀立柱建物 SB 1、堅穴建物 SI11・SI12 と長軸方位が似ることから、古墳時代後期の可能性がある。

SB 3 (図 79)

検出状況 C地点 BF11・12 グリッド、III層上面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれもやや明瞭に確認できた。P7 が SI20 と重複し、本遺構は SI20 より新しい。

規模・形状 長軸方位は N-62° -E の堀立柱建物である。形状は方形で、桁行 2間（4.3m）、梁行 2間（2.5m）、床面積 10.75 m² である。柱間は桁行 1.5m・2.8m、梁行 1.2m・1.3m である。梁行はほぼ等間隔に柱穴が並ぶが、桁行は柱間が異なる。

柱穴 7 基の柱穴から成る。柱穴の平面形状は、P2～P7 は円形で、P1 は発掘区外に広がるため不明である。長軸長 0.39m～0.59m、深さ 0.13m～0.34m である。

遺物出土状況 いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

時期 古墳時代後期の堅穴建物 SI20 との重複関係から古墳時代後期以降と判断した。

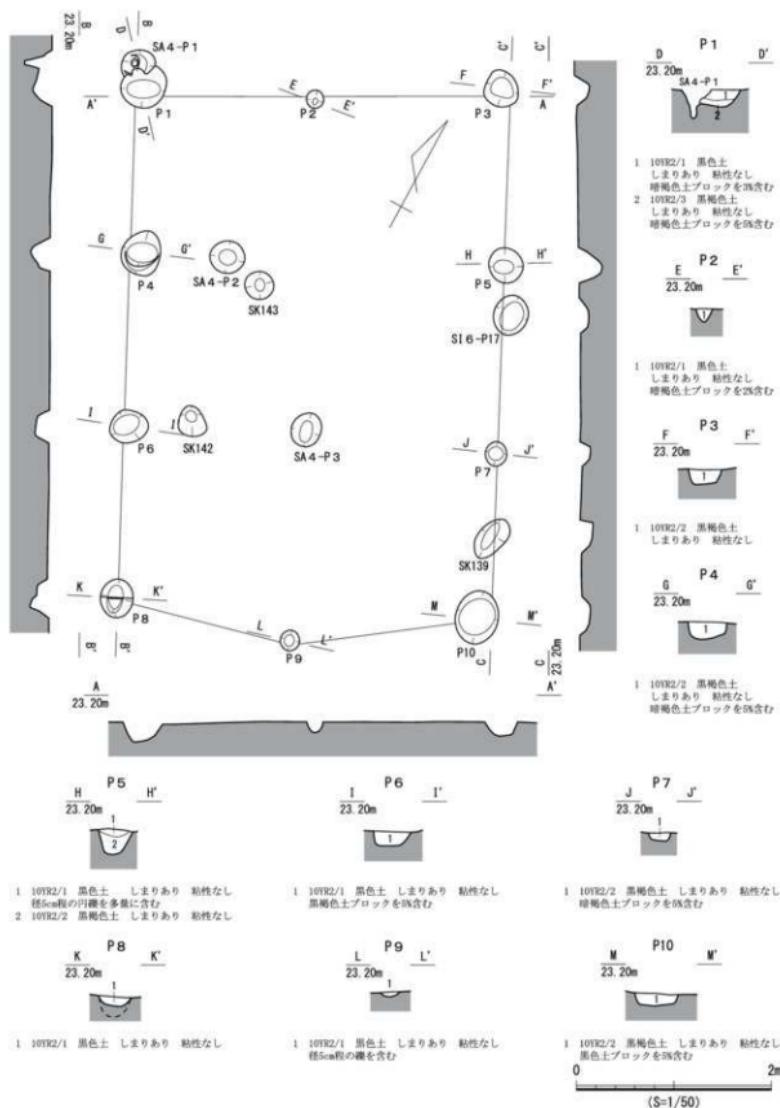


図77 SB 1

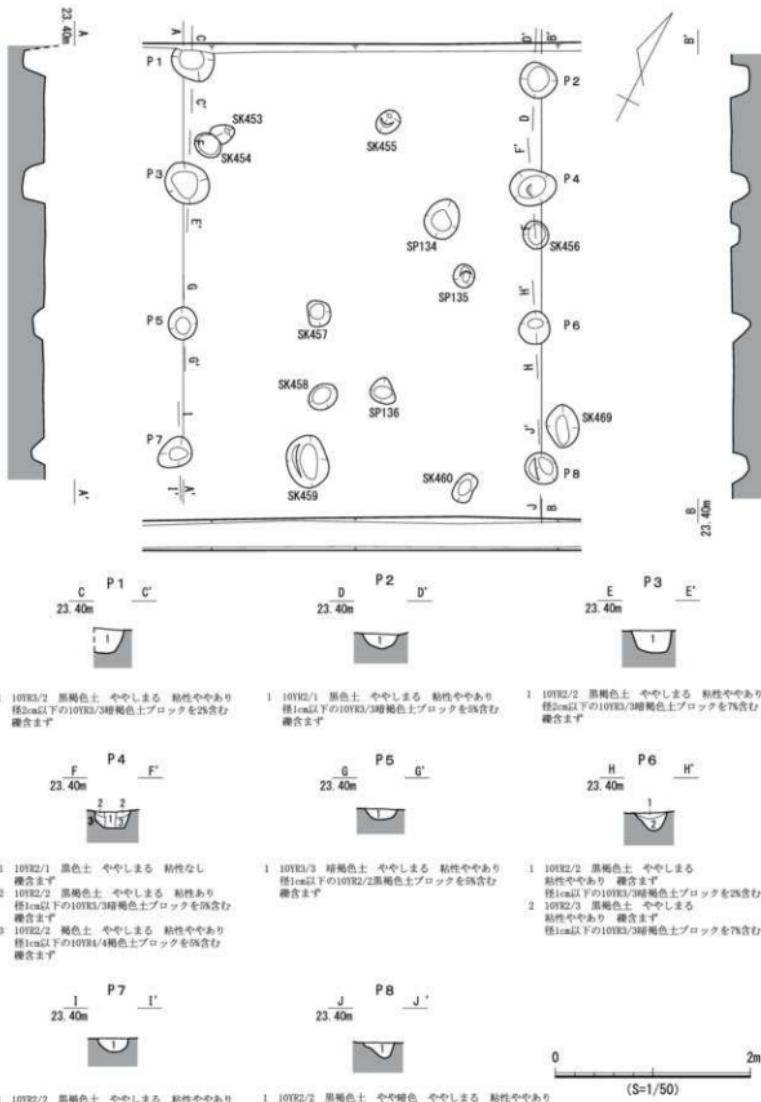


図78 SB2

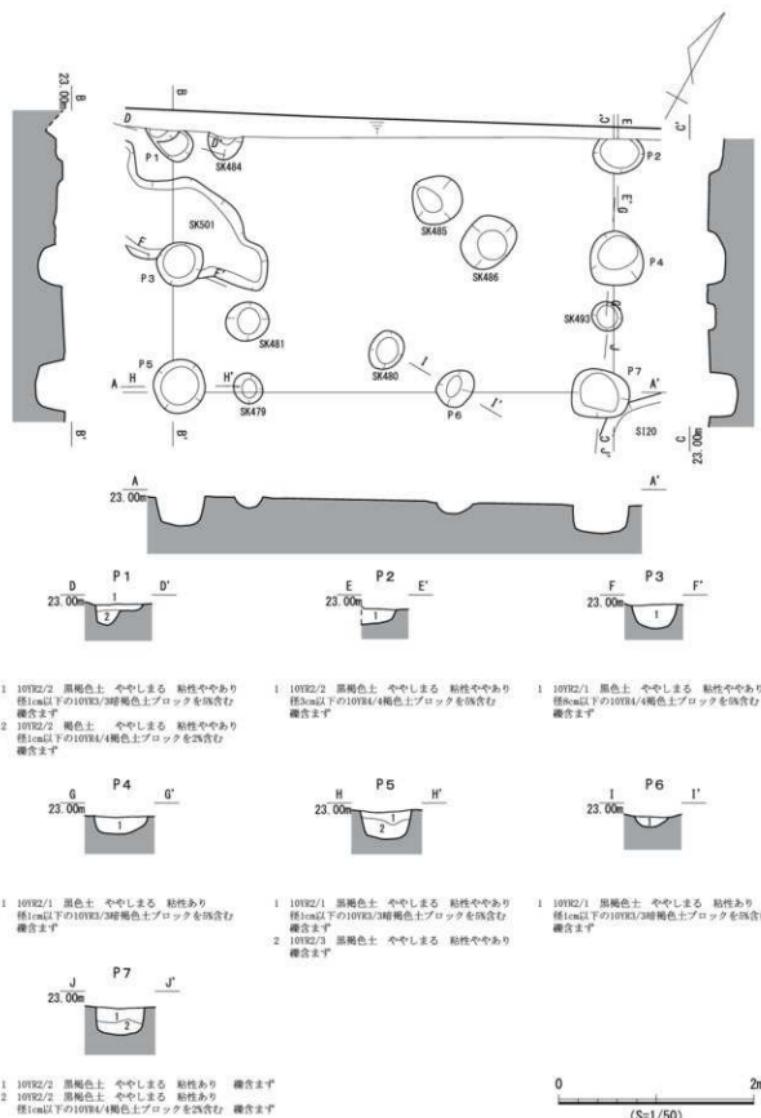


図79 SB 3

3 壺穴建物

B地点東部で1軒、C地点北西部で6軒、C地点東部で5軒、当該期の壺穴建物を確認した。B地点東部からC地点北西部で確認した7軒、C地点東部で確認した5軒はそれぞれ重複又は近接する。

SI 6 (図80~83)

検出状況 B地点 AH19~AI20 グリッド、III層上面で検出した壺穴建物である。検出した範囲で 4.71 m × 4.26m である。南側と東側が発掘区外に広がるが、検出した3辺が直線的であることから、方形と思われる。SI 5 と重複し、本遺構が新しい。平面形はやや明瞭であった。

埋土 埋土は単層で、全体に堆積する。埋土中に炭化物が散在するが、床面からは浮く。埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 壁は、北西辺と南西辺がやや開き、北東辺は急である。壁の残存高は最大で 0.08m である。

床面 ほぼ平坦である。貼床（2層）は全体で確認し、層厚 0.07m ~ 0.12m を測る。ブロック土を含む黒褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、柱穴 5 基、性格不明土坑 13 基である。位置関係と堆積状況から P 1 ~ P 4 が柱穴と判断した。すべての柱穴で明瞭な柱痕跡を確認し、柱径は P 1 が 0.14m、P 2 が 0.13m、P 3 が 0.12m、P 4 が 0.15m である。床面で重複して検出した P 7 ・ P 8 は柱穴の内側で検出した大型土坑で、長軸長はそれぞれ 0.78m、1.48m である。ともに貼床を掘り込んでいることから、貼床構築後に P 7 を掘り、埋め戻した後に、再び P 8 を掘り、埋め戻した可能性がある。P 7 ・ P 8 に被熱の痕跡や埋土中に焼土ブロックは確認できなかった。また、壁際溝やカマドは確認できなかった。

掘方 貼床除去後、性格不明土坑 5 基を検出した。

遺物出土状況 壺穴埋土から縄文土器、土師器、須恵器、石器が散在して出土した。南西部からの遺物の出土が多い。

出土遺物 355 と 356 は縄文時代前期の土器である。355 は深鉢 F 類の胴部片で、半截竹管による沈線文を施す。356 は外面に R L 縄文を施す胴部片で、焼成後の穿孔が 1 箇所あけられている。357 は土師器の甕の胴部である。358 は P 8 から出土した產地不明の畿内系の須恵器坏蓋で、陶邑編年 II 型式第 5 段階 ~ 第 6 段階に併行するものである。359 は石鏡 1 b 類で、左右非対称の形態となる。360 は P 8 から出土した磨石・凹石類 1 c 類で、平坦面に広く磨痕が認められ、敲打痕は側面にある。

時期 壺穴埋土と P 8 から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SI11 (図84~86)

検出状況 C地点 BG 2 ~ BH 3 グリッド、III層上面で検出した壺穴建物である。検出した範囲で 4.56 m × 4.20m である。南西側が発掘区外に広がるが、検出した各辺が直線的であることからやや隅丸の方形と思われる。本遺構を一回り大きくした形状の壺穴建物 SI12 と重複し、本遺構が新しい。SI12 と形状や軸がよく似ることや出土遺物から大きな時期差が見られないことから、本遺構は SI12 の建て替え後の壺穴建物と思われる。平面形はやや明瞭であった。

埋土 3 層に分層した。中央部に 1 層が堆積し、壁際に 2 層と 3 層が傾斜して堆積する。北西辺中央部でカマドと思われる焼土ブロックを含む埋土を確認した。

壁 壁はやや開く。壁の残存高は最大で 0.09m である。

床面 ほぼ平坦であるが北西部はやや陥る。貼床（10 層）は、北西部に位置する P 5 の範囲と中央部

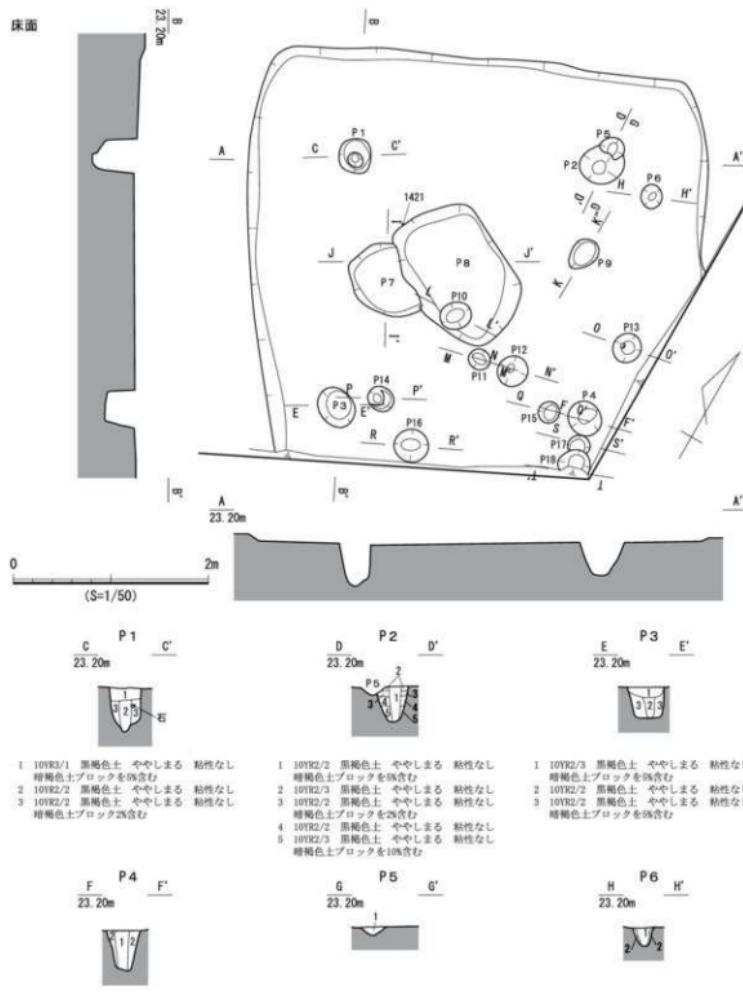


図80 S16 (1)

のP10を除くほぼ全体で確認し、層厚0.03m~0.08mを測る。暗褐色と黒色のブロック土を含む黒褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、柱穴4基、壁際溝3条、カマド1基、貯蔵穴1基、性格不明遺構6基である。位置関係からP1~P4を柱穴と判断した。P1、P2、P4で柱痕跡を確認し、柱径はP1が0.14m、P2が0.12m、P4が0.16mである。壁際溝は南西辺、南東辺、東辺で認められ、部分的に途切れる。北東隅で確認した土坑は竪穴内の位置と形状から貯蔵穴の可能性が高いと判断した。壁はやや開き、長軸長0.60m、短軸長0.58m、深さは0.22mである。貯蔵穴の周囲は盛土されており、盛土が途切れる部分にはP2が配置され、P2の西側がこの盛土に覆われることから、貼床の形成→柱穴の掘削→盛土の順に構築していると考えられる。柱穴の内側で検出した大型土坑P10は貼床を掘り込んでいることから、貼床構築後にP10を掘り、再び埋め戻したと考えられる。被熱した痕跡や埋土中の焼土は認められず、その性格は不明である。

カマド 建物の北壁ほぼ中央に構築される。煙道部は上層の削平によって確認できない。両袖部の残存状況は良好で、両袖上面でカマドの構造材と思われる拳大の礫を確認した。両袖部は貼床の上に盛

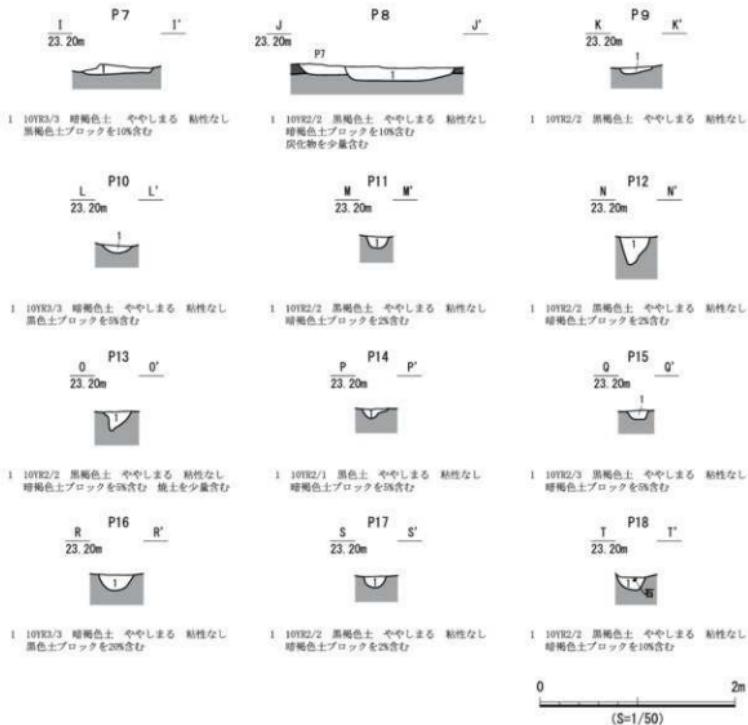


図81 SI6 (2)

掘方

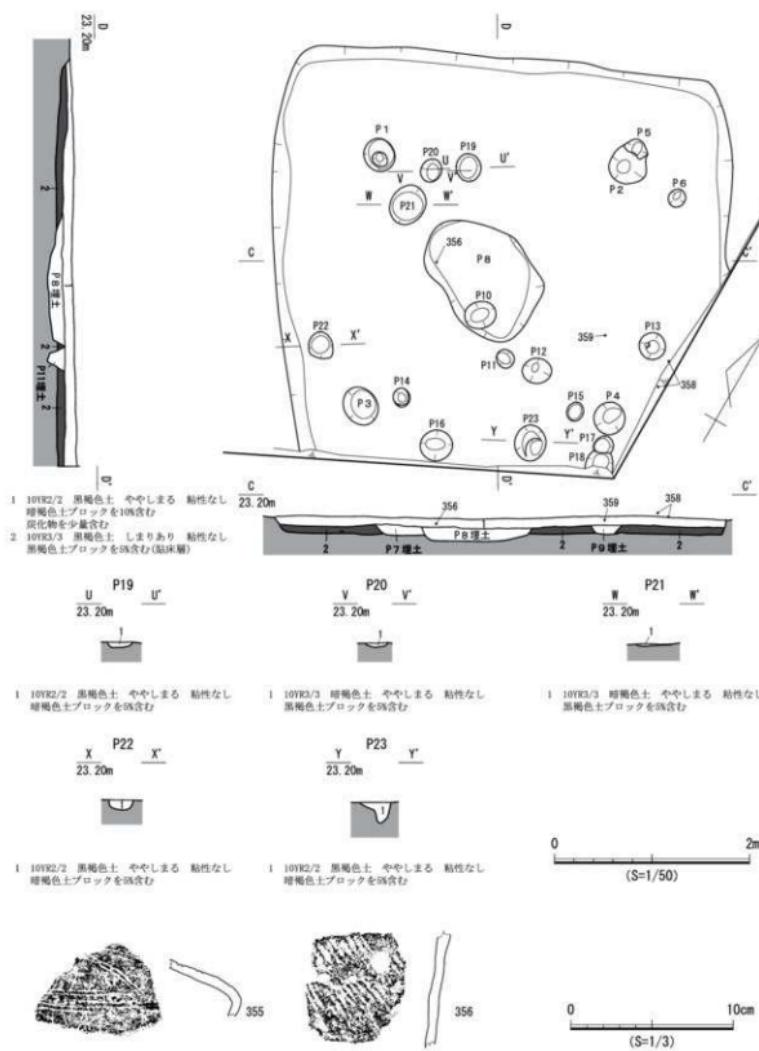


図82 SI6 (3)

られていることから、貼床形成後にカマドを構築している。両袖の内側で $0.36m \times 0.32m$ の被熱面を確認した。層厚 0.02m を測る。被熱面の上層には焼土ブロックを含む埋土 (D-D' 断面 6 層) が堆積しており、カマドの構築土であった可能性がある。

掘方 本遺構は SI12 と重複し、SI12 の床面を掘り込むため、掘方底面で検出した遺構については、本遺構と SI12 のいずれに属するものを判断することが困難である。しかし、検出状況から、本遺構の南東辺と平面形が一致する P17 は本遺構に属する可能性が高いものと判断した。P17 は南壁ほぼ中央で検出した東西に延びる土坑で、カマドの対面に位置する。性格は不明である。P17 以外の遺構については配置等から SI12 に属するものと判断した。

遺物出土状況 カマドと貯蔵穴間の床面直上で土師器瓶 (365) が内面を上にした状況で出土した。カマド周辺と竪穴南東部からの遺物の出土が多い。貯蔵穴から縄文土器、土師器、石器が散在して出土した。

出土遺物 361 と 362 は土師器の甕の口縁部で、口縁部が開き、口縁端部を上方につまみあげる。363 は土師器の瓶である。口縁部は開き、端部に面をもつ。胴部には差しみにより把手が取り付けられ、把手には成形時の指オサエ痕が認められる。底部は欠損する。364 は産地不明の畿内系の須恵器坏身で、陶邑編年 II 型式第 5 段階に併行するものである。365 は尖頭器の先端部と思われる。366 はカマドから出土した石鐵 1 a 類で、左右非対称の形態となる。

時期 床面直上から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

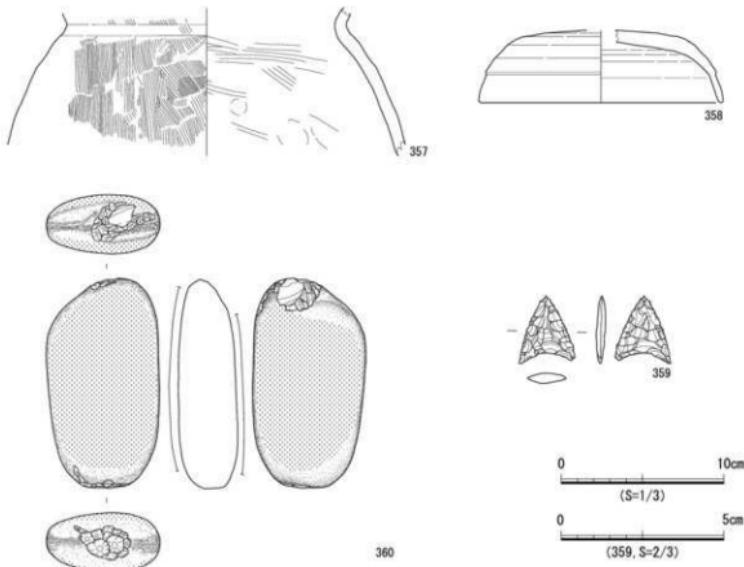


図83 SI16出土遺物

床面

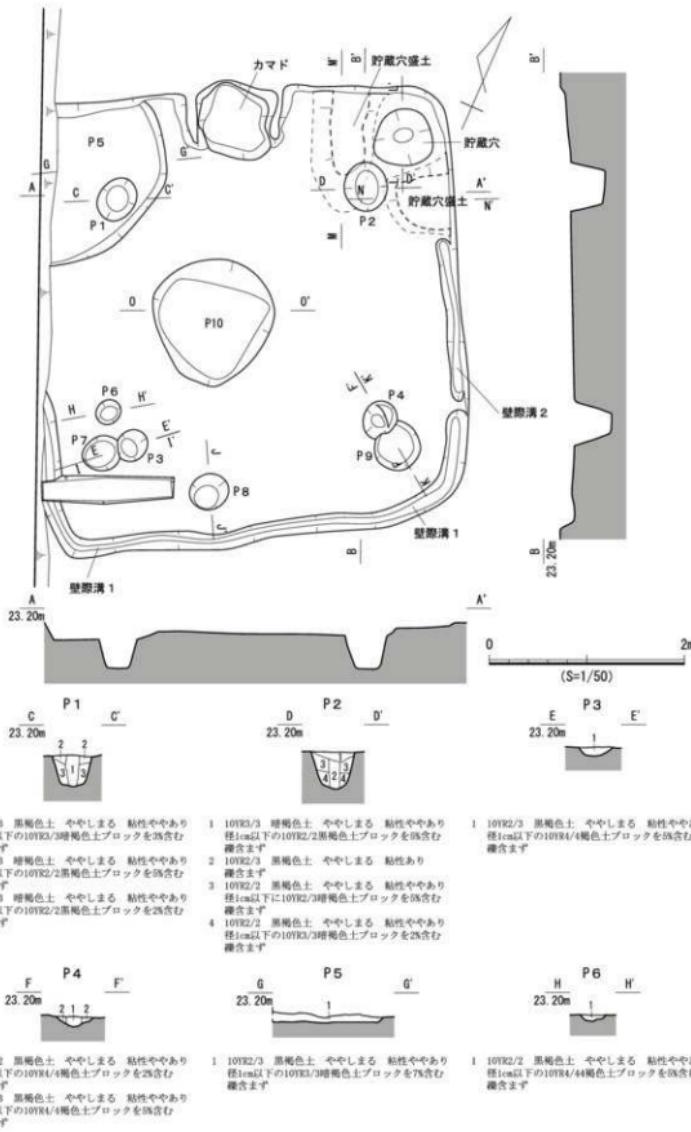


図84 S111 (1)

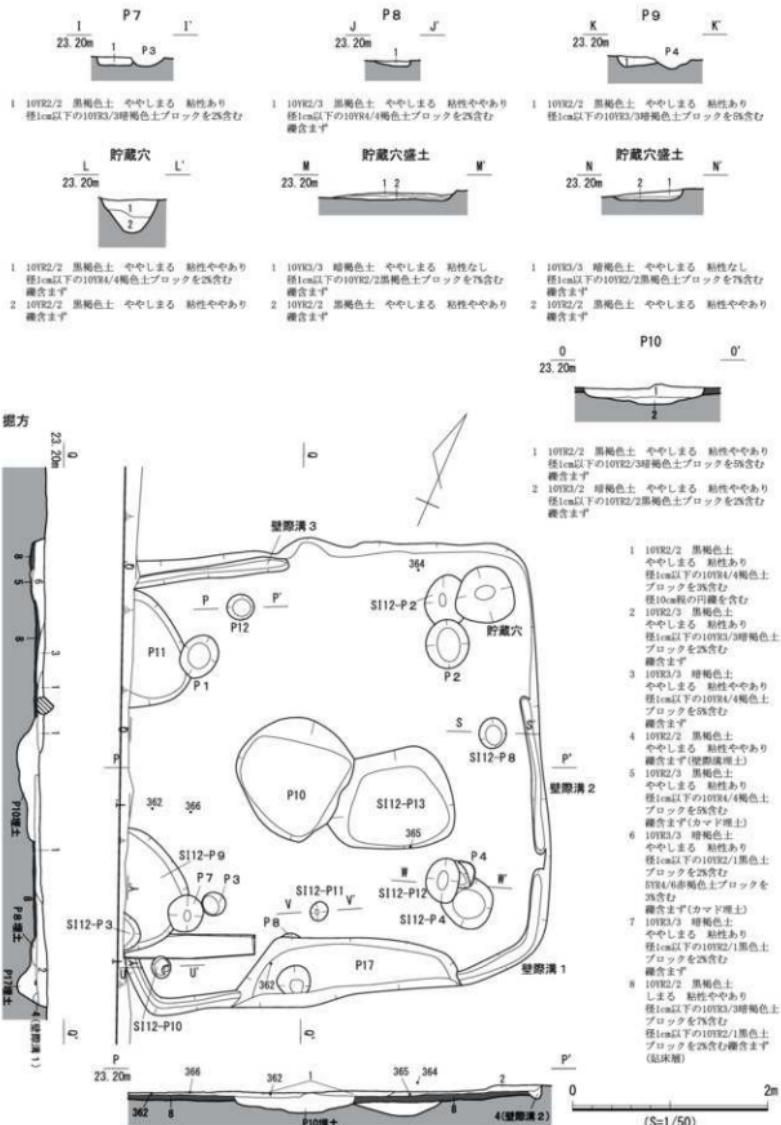


図85 SI11 (2)

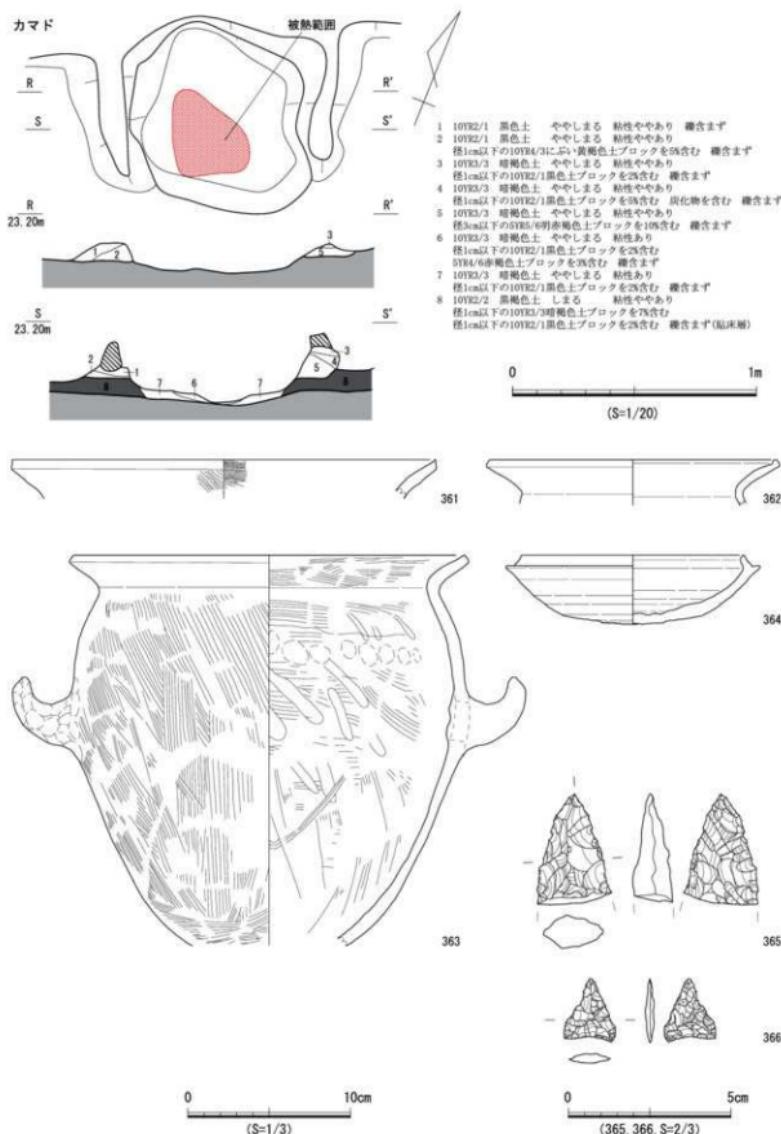


図86 SI11 (3)

SI12（図87～89）

検出状況 C地点 BG2～BH3 グリッド、III層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で、5.69m×4.30mである。南西側が発掘区外に広がるが、検出した3辺が直線的であることから方形と思われる。本遺構の内側は堅穴建物 SI11 と重複し、本遺構が古い。SI11 と形状や長軸方位がよく似ること、出土遺物に大きな時期差が見られないことから、本遺構は SI11 の建て替え前の堅穴建物と思われる。平面形はやや明瞭であった。

埋土 15層のみ確認することができた。大部分が SI11 と重複し、埋土はほとんど残っていなかった。
壁 壁は、確認した3辺でやや開く。壁の残存高は最大で0.09mである。

床面 SI11 によって床面の大部分は掘り込まれているが、重複していない部分からはほぼ平坦であったことが想定できる。床面で検出した遺構は、柱穴1基、貯蔵穴1基、性格不明土坑1基である。また、SI11 の掘方底面で検出した遺構のうち、遺構の配置等から本遺構に属すると判断した遺構は、柱穴1基、性格不明遺構7基である。位置関係と堆積状況から SI11 の掘方底面で確認したP2・P4とP9の底面で確認したP3を柱穴と判断した。P2～P4で柱痕跡を確認し、柱径はP2が0.08m、P3が0.09m、P4が0.12mである。北隅で確認した穴を堅穴内の位置と形状から貯蔵穴の可能性が高いと判断した。形状は円形で、壁はやや開く。長軸長0.59m、短軸長0.59m、深さは0.45mである。P13は柱穴内側で検出した大型土坑である。被熱した痕跡や埋土中の焼土は認められず、その性格は不明である。本遺構は、北西辺中央にカマド、北隅に貯蔵穴、柱穴の内側に大型土坑P13が配置され、SI11と堅穴内の遺構の配置に共通性が見られる一方、SI11で検出した貼床や壁際溝は確認できなかった。

カマド 建物の北壁ほぼ中央に構築される。煙道部は上層の削平によって確認できない。検出時に両袖の内側中央で拳大の礫を確認した。礫に被熱の痕跡は認められなかった。両袖部は SI11 と重複する南東部が残存していない。被熱面は確認できなかった。

遺物出土状況 堅穴埋土から繩文土器、土師器、石器が散在して出土した。

出土遺物 367と368は打製石鎌である。367は石鎌未成品と思われることから3類とした。368は石鎌1d類で、片側の脚部を欠損する。

時期 SI11 の建て替え前の建物と思われることから古墳時代後期と判断した。

SI13（図90）

検出状況 C地点 BF・BG3 グリッド、III層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で、1.71m×0.68mである。大部分は発掘区外となるが、検出した2辺が直線的で直交することから方形と思われる。平面形はやや明瞭であった。柱穴は確認できなかったが、方形の掘方と壁際溝、貼床が確認できたため、堅穴建物と判断した。

埋土 単層で、ブロック土を含む埋土であることから、人為堆積と思われる。

壁 壁は確認した2辺で急である。壁の残存高は最大で0.12mである。

床面 ほぼ平坦である。貼床は全体で確認し、層厚0.04m～0.06mを測る。黒褐色土ブロックを含む暗褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、壁際溝1条であった。柱穴は発掘区外に存在すると考えられる。

掘方 贼床除去後、遺構は確認できなかった。

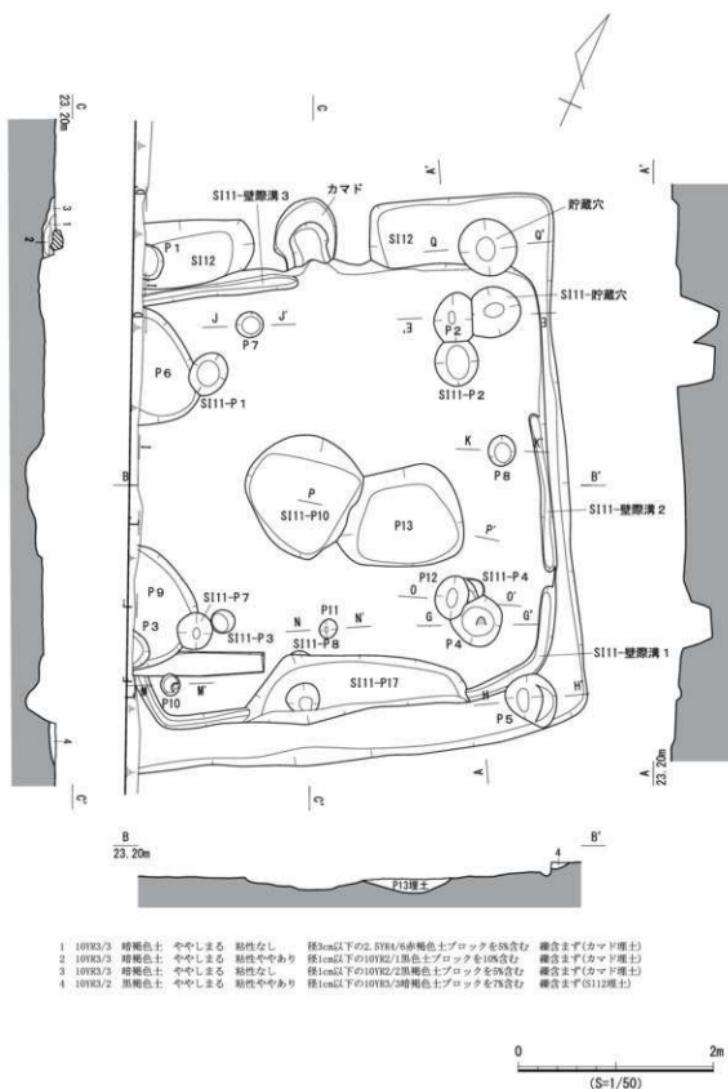


図87 SI12 (1)

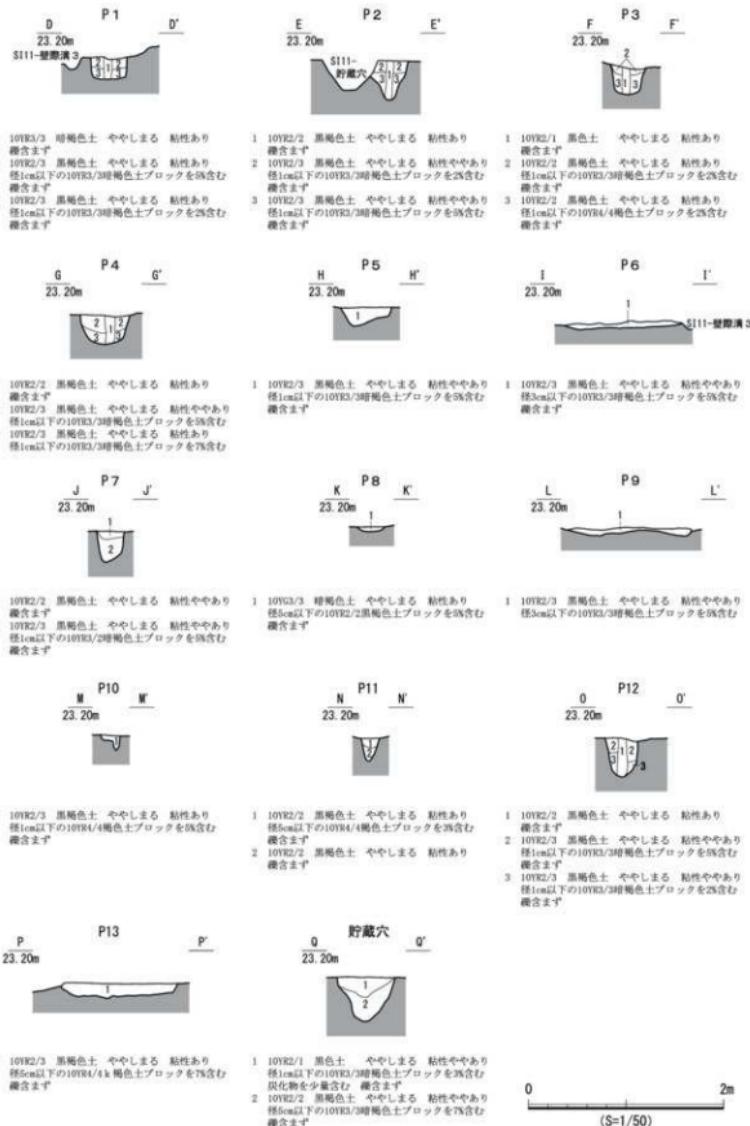


図88 SII12 (2)

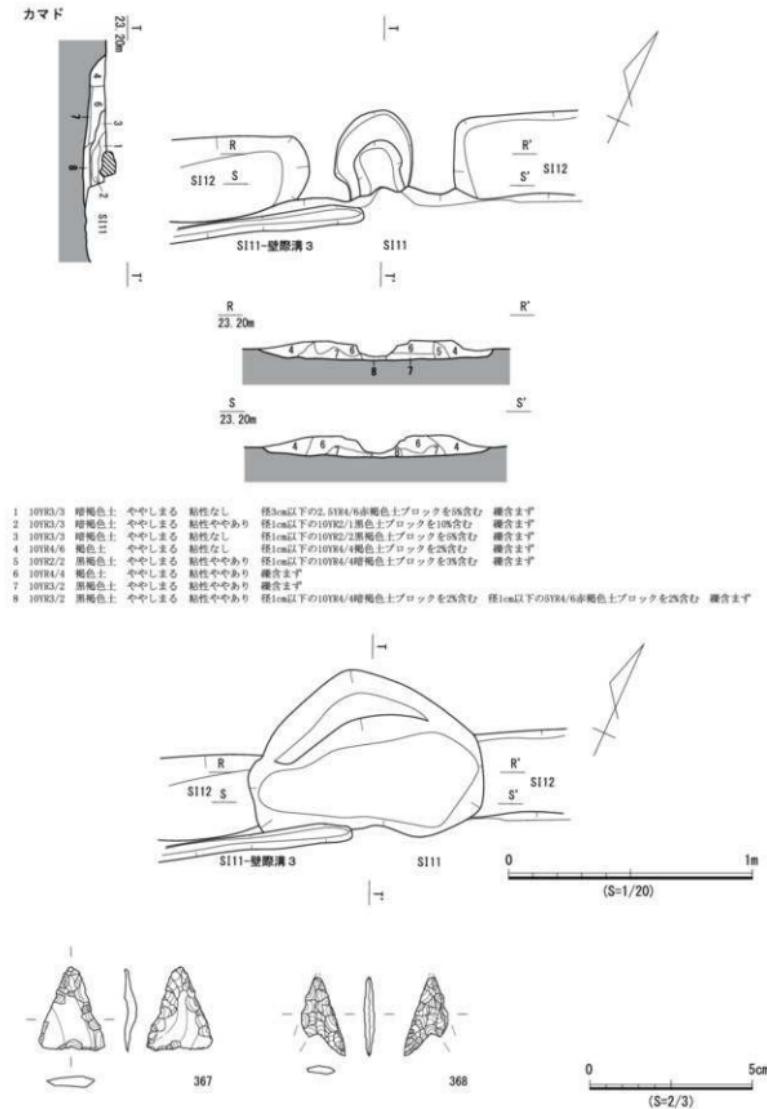


図89 SI12 (3)

遺物出土状況 壁穴埋土から縄文土器、土師器、石器が散在して出土した。床面直上でやや大きめの土師器(369)が内面を上にした状況で出土した。

出土遺物 369は土師器の甕の口縁部である。口縁端部を上方につまみあげ、口頸部が肥厚する。

時期 床面直上から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SI14(図91~95)

検出状況 C地点BF1・2、BG2グリッド、III層上面で検出した壁穴建物である。検出した範囲で4.60m×4.45mである。検出した各辺が直線的であることから方形と思われる。SI15と重複し、本遺構が新しい。平面形は全体的に不明瞭であったが、本遺構と重複し、本遺構より新しいSK489の底面では明瞭に確認できた。また、北東側トレンチ東壁で本遺構と貯蔵穴の立ち上がりを確認した。

埋土 6層に分層した。1層が大部分を占め、カマド周辺の北東部では焼土ブロックを含む埋土が認められた。

壁 壁は確認した3辺でやや開く。壁の残存高は最大で0.16mである。

床面 ほぼ平坦であるが南隅は盛土され一段高くなる。貼床は中央で検出したP10の範囲を除き全体で確認し、層厚0.06m~0.10mを測る。黒褐色土ブロックを含む暗褐色土で、しまる。床面で検出し

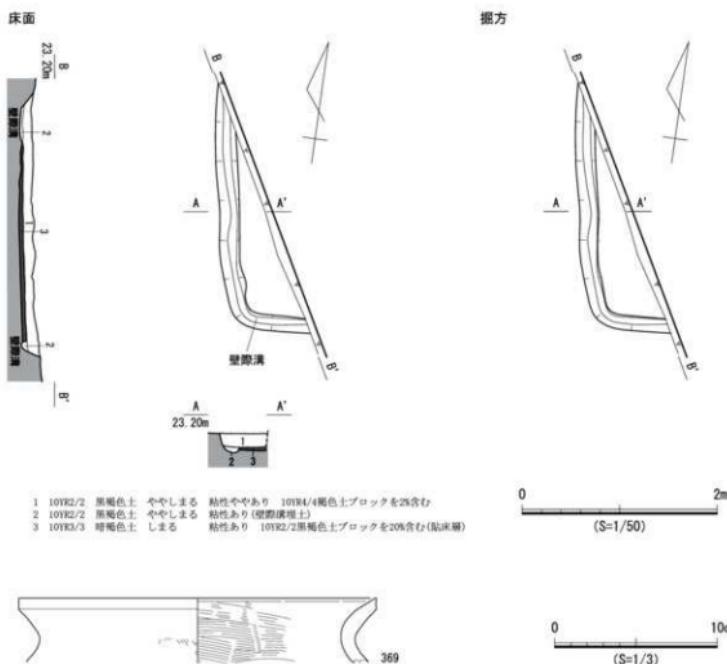
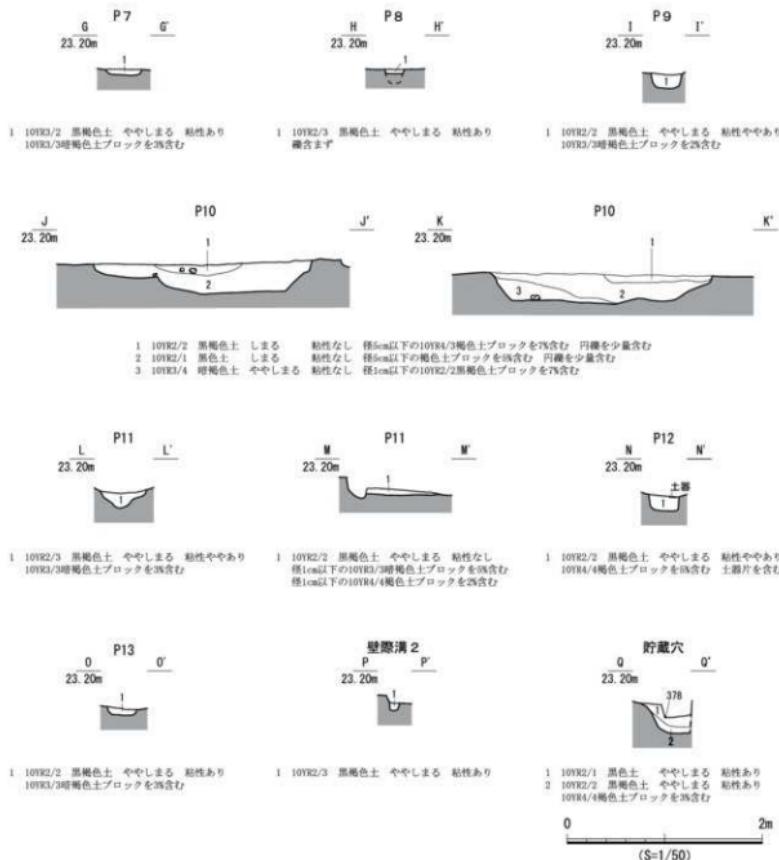


図90 SI13

床面



図91 SI14 (1)



貯藏穴遺物出土状況図

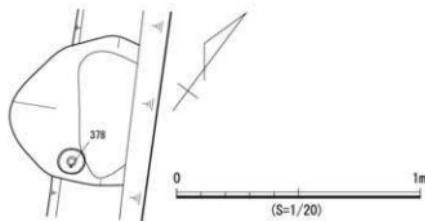


図92 SI14 (2)

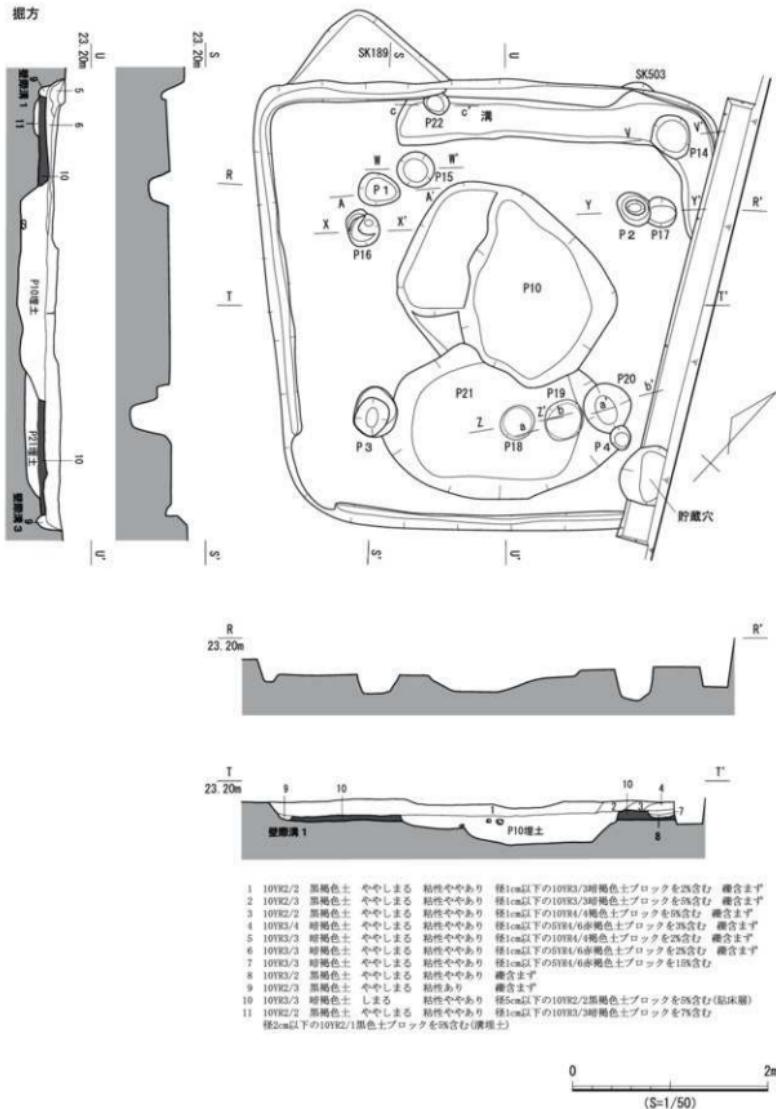


図93 S114 (3)

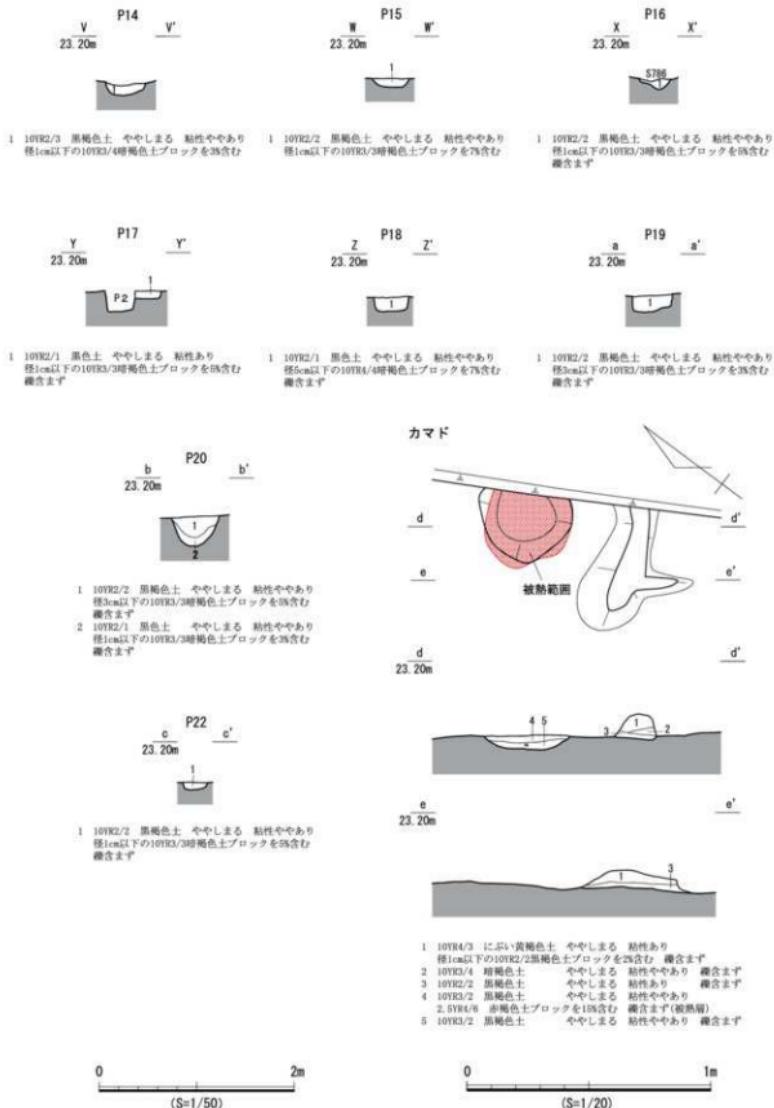


図94 SI14 (4)

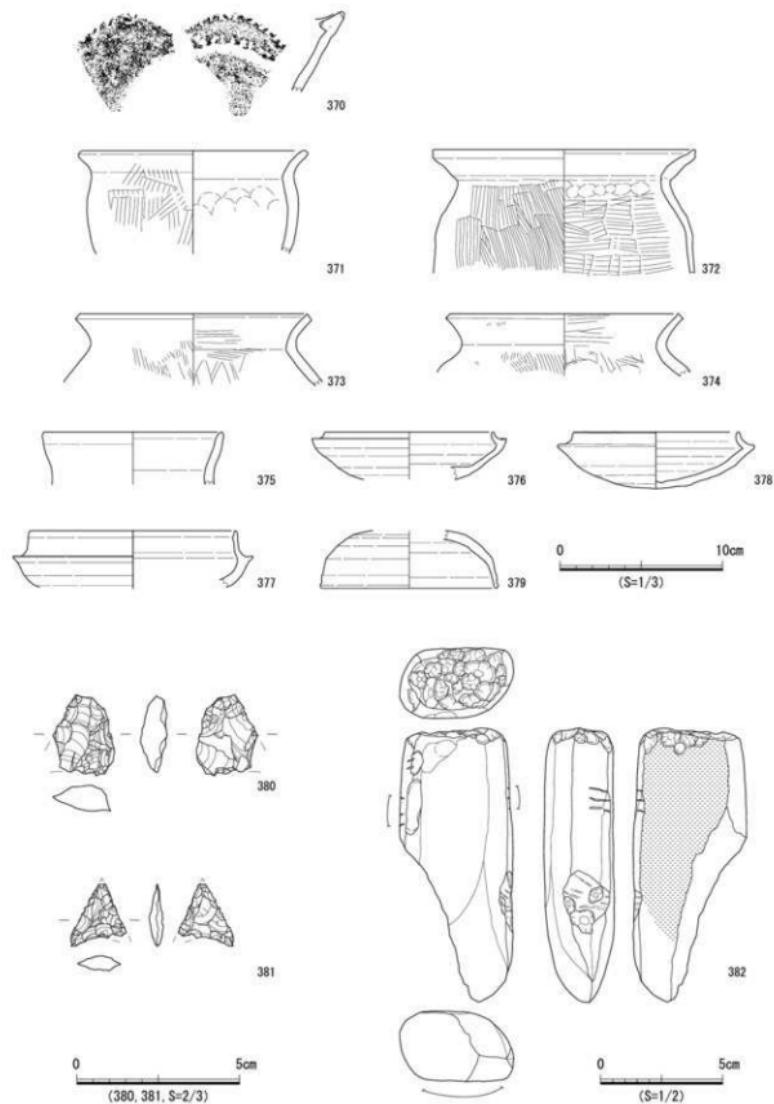


図95 SI14出土遺物

た遺構は、柱穴5基、カマド1基、壁際溝3条、貯蔵穴2基、性格不明土坑8基である。柱穴は位置関係と堆積状況からP1～P3と東部についてはP4又はP20が考えられる。P1～P3は、床面で柱痕跡のみを確認したことから、貼床構築前に柱穴を掘削し、柱を建てた後、貼床を行ったと考えられる。P4とP20は近接しており、いずれも柱穴の可能性がある。P4は、床面で掘方を検出した。P4の1層が、柱痕跡の上層に堆積することから、柱を切り取った可能性がある。P20は床下から検出しが、土層断面および床面に柱痕跡は確認できなかった。壁際溝は北西辺と南西隅で一部途切れるが、検出したすべての辺を巡る。東隅で確認した穴を竪穴内の位置と形状から貯蔵穴の可能性が高いと判断した。壁はやや開き、検出した範囲で長軸長1.24m、短軸長0.99m、深さ0.29mである。柱穴内側のほぼ中央で検出した長軸長2.36mの大型土坑P10の埋土は貼床と同様にしまることから、貼床構築後にP10を掘り、再び埋め戻したと考えられる。南隅では盛土上面でP11を検出した。P11は長軸方向にテラスをもつ二段構造の穴で、壁はやや開く。長軸長0.47m、短軸長0.45m、深さ0.15mである。カマド 建物の北東壁中央に構築される。煙道部は発掘区外である。片袖のみ検出し、残存状況は良好であった。もう一方の袖は北東側レンチの土層でも確認できなかった。袖部は貼床の上から盛られていることから、貼床形成後にカマドを構築したと考えられる。袖の内側で、0.35m×0.31mの被熱面を確認し、層厚は0.03mを測る。袖部が片方しか確認できなかったことから、竪穴建物廃絶時にカマドを解体したと考えられる。また、カマドの上層に堆積するT-T'の2層～4層はいずれもブロック土を含むことから人為堆積と考えられ、堆積状況や4層に焼土を含むことからカマド解体時の堆積と思われる。

掘方 掘方除去後、溝1条、柱穴1基、性格不明土坑7基を検出した。溝は幅0.54mと幅広のもので、北西辺から北東辺にかけての壁際を巡る。P21はP10と重複する長軸長2.28mの大型土坑で、性格は不明である。

遺物出土状況 竪穴埋土から縄文土器、土師器、須恵器、石器が散在して出土した。床面に近づくにつれて遺物の出土量が増え、床面直上で須恵器(376)が出土した。貯蔵穴の1層埋土から完形の須恵器の坏身(378)が逆位で出土した。出土状況から意図的に置かれたものと思われる。

出土遺物 370は縄文時代前期の土器で、あまり類例がないため深鉢G類としたが、他の器種とすべきかもしれない。口縁部内面を肥厚させ口縁端部と内面の肥厚部に粗い刻みを施す。371～374は土師器である。371は甕の口縁部から胴部で、口縁部が開き、端部を丸くおさめる。372は甕である。口縁部が開き、端部に面をもつ。373と374はカマドから出土した甕である。口縁端部に面をもち、口頸部が肥厚する。375～379は須恵器である。375は壺の口縁部で、東山50号窯式のものである。376と377は坏身である。376は美濃須衛窯III期第1小期のもの、377は产地不明の畿内系で陶邑編年II型式第5段階～第6段階併行のものである。378は貯蔵穴から出土した坏身で、美濃須衛窯III期第1小期のものである。376と378は、受部が外反して立ち上がり、378は底部に丸みが認められる。379はP13から出土した坏蓋で、美濃須衛窯III期第1小期のものである。380と381は打製石鏟である。380は石鏟2類で、先端と基部の片側を欠損する。381は石鏟1b類で、先端と一方の脚部を欠損する。382は磨製石斧の破片でほぼ全面を研磨している。頭部には敲打痕が認められ、成形時のものである可能性がある。側面に線状の痕跡が認められるが何によるものかは不明である。

時期 貯蔵穴から出土した土器(378)から古墳時代後期と判断した。

SI15（図96）

検出状況 C地点 BF1・2グリッド、III層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 3.55m × 1.12m である。検出した各辺が直線的であることから方形と思われる。東側は SI14 と重複し、本遺構が古い。平面形は、北辺は明瞭に確認でき、西辺と南辺は不明瞭であった。方形を想定できる竪穴状の掘方であり、かつ北辺と西辺で壁際溝が確認できたため、竪穴建物と判断した。

埋土 単層で、埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 壁は確認した 3 辺でやや開く。壁の残存高は最大で 0.06m である。

床面 ほぼ平坦で、貼床や硬化面は確認できなかった。床面で確認した遺構は、柱穴 1 基、壁際溝 2 条、性格不明土坑 1 基である。P1 が柱穴となり、SI14 と重複する範囲にあと 3 基が存在していた 4 本柱の建物の可能性がある。

遺物出土状況 竪穴埋土から縄文土器 1 点と石器 2 点が出土した。壁際溝埋土から土師器が散在して出土した。

出土遺物 383 は P1 から出土した RF である。

時期 SI14 との重複関係と壁際溝埋土から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SI16（図97・98）

検出状況 C 地点 BE6 グリッド、III 層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 2.32m × 2.06 m である。南東側と南西側が発掘区外に広がることから全体の形状は不明であるが、検出した 2 辺が直線的であることから方形と思われる。平面形は明瞭であった。方形の掘方と壁際溝、貼床が確認できたため、竪穴建物と判断した。

埋土 単層で、東部に擾乱を受けるが全体に堆積する。北西部で埋土中に焼土を含む範囲が認められたが、トレンチを開けて確認したところカマドの袖や被熱面は認められなかった。埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と考える。

壁 壁は確認した北西辺でほぼ直立する。壁の残存高は 0.09m である。

床面 やや凹凸があり、北西部がやや陥る。貼床は、部分的に擾乱を受けるがほぼ全体で確認し、層厚 0.18m を測る。褐色土ブロックを含む黒色土で、しまる。床面で検出した遺構は、壁際溝 1 条、性格不明土坑 4 基である。明確な柱穴は確認できなかったが、P4 と発掘区外の 1 基を柱穴とする 2 本の建物、若しくは P1 と発掘区外の 3 基を柱穴とする 4 本柱の建物の可能性が考えられる。

掘方 贊床除去後、遺構は確認できなかった。底面は平坦となる。

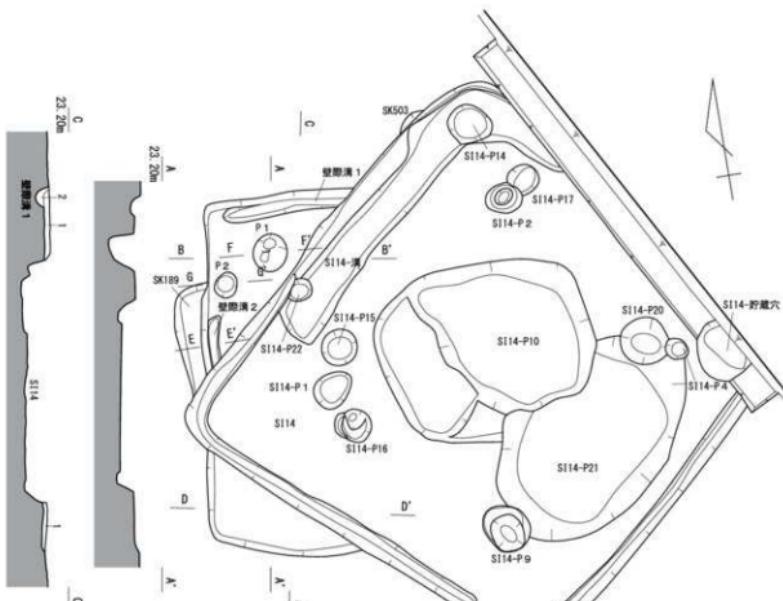
遺物出土状況 床面直上からの遺物の出土が多く、土師器、須恵器、石器が散在して出土した。

出土遺物 384 と 385 は土師器である。384 は甕の口縁部から胴部で口縁端部に面をもち、口頸部が肥厚する。385 は甕の口縁部から胴部である。386 は須恵器短頸壺で、美濃須衛窯Ⅲ期第1小期頃のものである。口縁端部は丸くおさめる。

時期 床面直上から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SI19（図99～図101）

検出状況 C 地点 BF10～BG11 グリッド、III 層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 5.18 m × 4.70m である。北西部が発掘区外に広がるが、検出した西辺、南辺、東辺は直線的で、形状は方形と思われる。平面形はやや明瞭であった。



- 1 10YR3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
根5cm以下の10YR3/2暗褐色土ブロックを5%含む 雜合土す
2 10YR3/3 暗褐色土 ややしまる 粘性ややあり
根1cm以下の10YR2/1黒色土ブロックを5%含む 雜合土す(壁際溝1埋土)

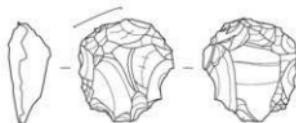


- 1 10YR2/3 黑褐色土 ややしまる
粘性ややあり 根1cm以下の10YR3/3
暗褐色土ブロックを5%含む 雜合土す
2 10YR3/2 黑褐色土 ややしまる
粘性ややあり 根1cm以下の10YR3/3
暗褐色土ブロックを5%含む 雜合土す

- 1 10YR2/2 黑褐色土 ややしまる
粘性ややあり 根1cm以下の10YR3/3
暗褐色土ブロックを5%含む 雜合土す

0 2m
(S=1/50)

- 1 10YR3/3 暗褐色土 ややしまる 粘性ややあり
根1cm以下の10YR2/1黑色土ブロックを5%含む 雜合土す

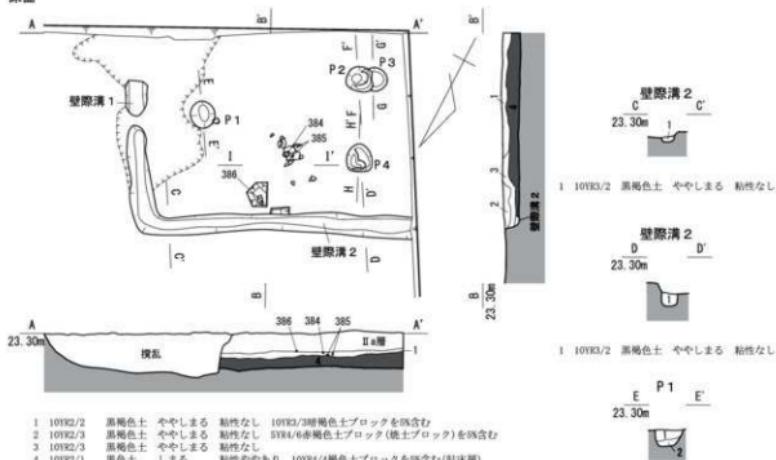


383

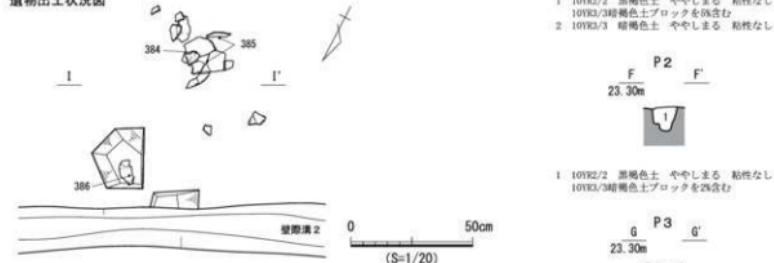
0 5cm
(S=2/3)

図96 S114

床面



遺物出土状況図



堤方

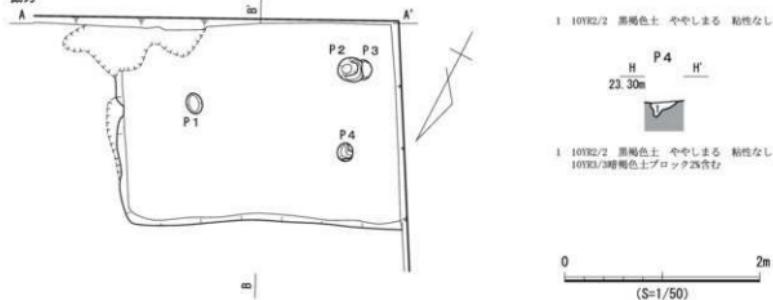


図97 SI16

埋土 単層で、一部に擾乱を受けるが全体に堆積する。埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 壁は確認した三辺でほぼ直立する。壁の残存高は最大で0.06mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床がほぼ全体にわたって残る。貼床は黒褐色土ブロックを含む暗褐色土で、硬くしまる。床面で検出した遺構は、柱穴6基、壁際溝2条、性格不明土坑5基である。壁際溝は検出した全ての辺で認められ、南東隅と東辺で一部途切れる。位置関係や堆積状況からP1～P4が柱穴の4本柱の柱配置（柱配置1）とP5・P6が柱穴の2本柱の柱配置（柱配置2）が考えられる。柱配置1では、柱配置を構成する柱穴のうち、P2は床面上では検出できず、貼床除去後に検出した。P1、P3、P4では上層が削平されており確認できないが、P2では北壁土層断面を観察したところ柱掘方埋土上層に貼床が確認できた。このことから、当初は柱を建てた後に貼床を形成したと考えられる。P5・P6は柱掘方埋土が貼床を掘り込んでいる。以上から、柱配置1で建物を建てた後、掘方の大きさを変えたり、床面を貼り替えたりはせず、柱配置2で構成される建物へと建て替えが行われたと考えられる。P1～P6の柱穴全てで柱痕跡を確認し、柱径は、P1が0.10m、P2が0.15m、P3が0.12m、P4が0.14m、P5が0.10m、P6が0.08mを測る。

掘方 貼床除去後、性格不明土坑2基を検出した。

遺物出土状況 埋土から繩文土器と土師器が散在し、P12から須恵器が出土した。他の竪穴建物と比べて遺物の出土が少なかった。

出土遺物 387はP12から出土した須恵器壺身で、美濃須衛窯III期のものである。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

S120（図102・103）

検出状況 C地点BF12・13グリッド、III層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で4.78m

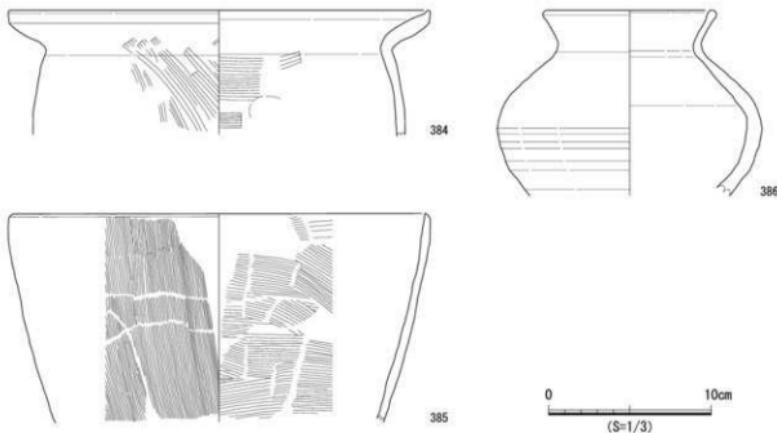


図98 S116出土遺物

床面

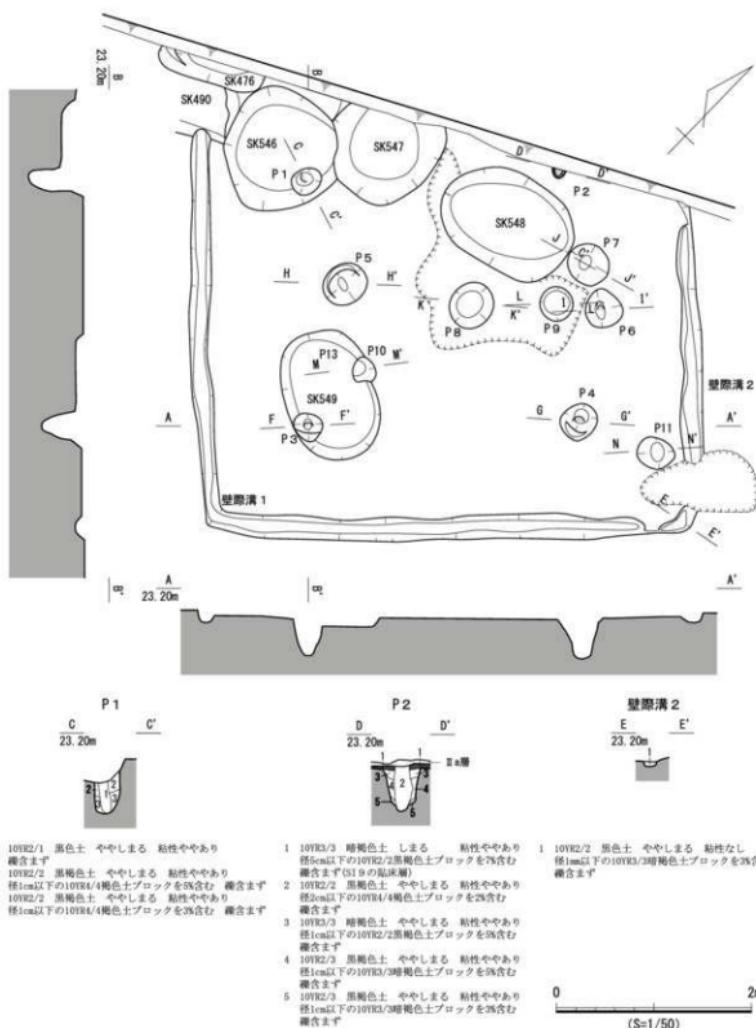


図99 SI19 (1)

×3.50mである。南東側が発掘区外に広がるが、検出した各辺がほぼ直線的であることから方形と思われる。平面形はやや明瞭であった。

埋土 単層で、埋土にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 壁は、確認した3辺で開く。壁の残存高は0.09mである。

床面 贅床や硬化面は確認できなかったが、掘方底面を床面と考えた。ほぼ平坦である。床面で検出した遺構は、柱穴4基、性格不明土坑6基である。P3は南側の排水溝の底面で検出した。位置関係からP1～P4を柱穴と判断した。壁際溝、カマドは確認できなかった。P8・P10は性格不明の大型土坑である。P10は竪穴中央部で検出したが、被熱した痕跡や埋土中の焼土は認められなかった。

遺物出土状況 竪穴埋土から縄文土器、土師器、石器が散在して出土した。灰釉陶器が1点出土したが、上層からの出土で混入と考えられる。

出土遺物 388と389は土師器の壺の口縁部である。口縁端部をつまみあげ、口頸部が肥厚する。389は口縁部のゆがみが大きい。390は須恵器瓶類で、岩崎101号窯式頃のものと思われる。391は切目石錠で、薄い継長の自然石を利用している。

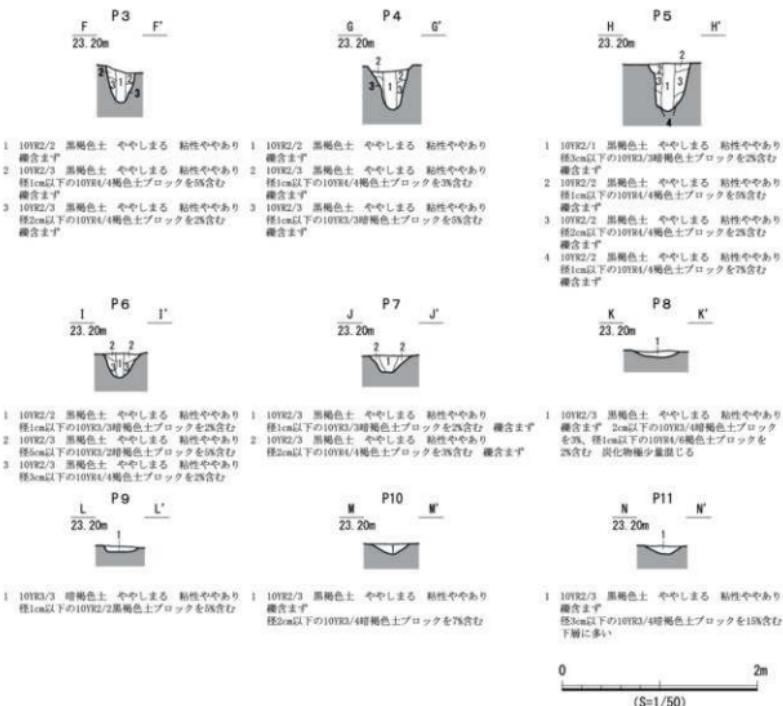


図100 SI19 (2)

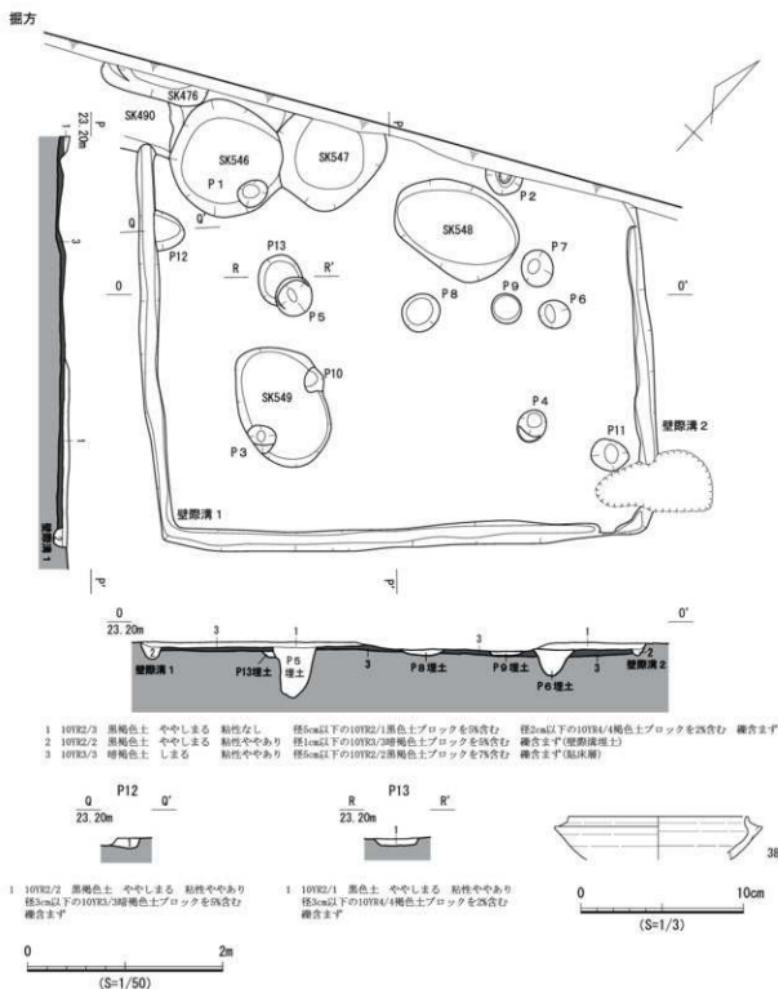
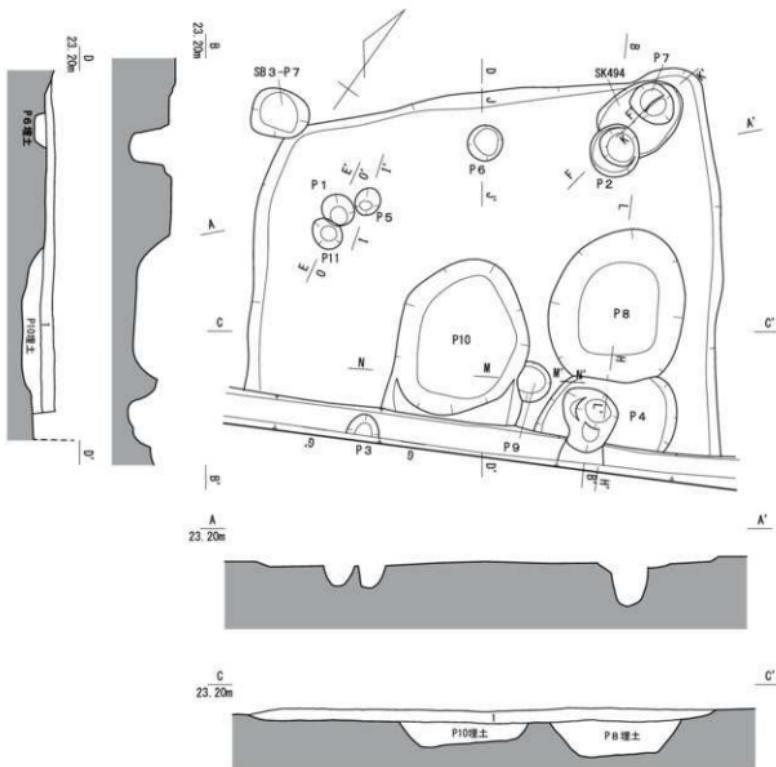


図101 SI19 (3)



1 10Y3/3 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 横1cm以下の10Y4/4褐色土ブロックを25含む 横1cm以下の10Y2/2黒褐色土ブロックを35含む 縦含まず

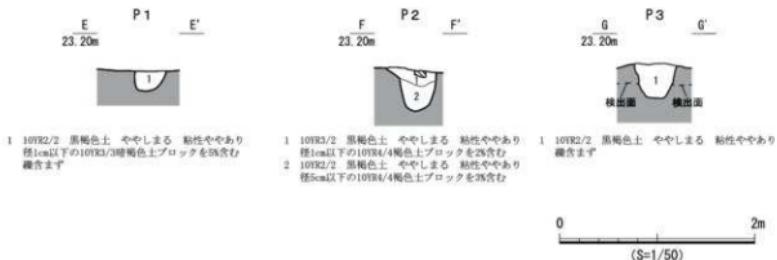


図102 S120 (1)

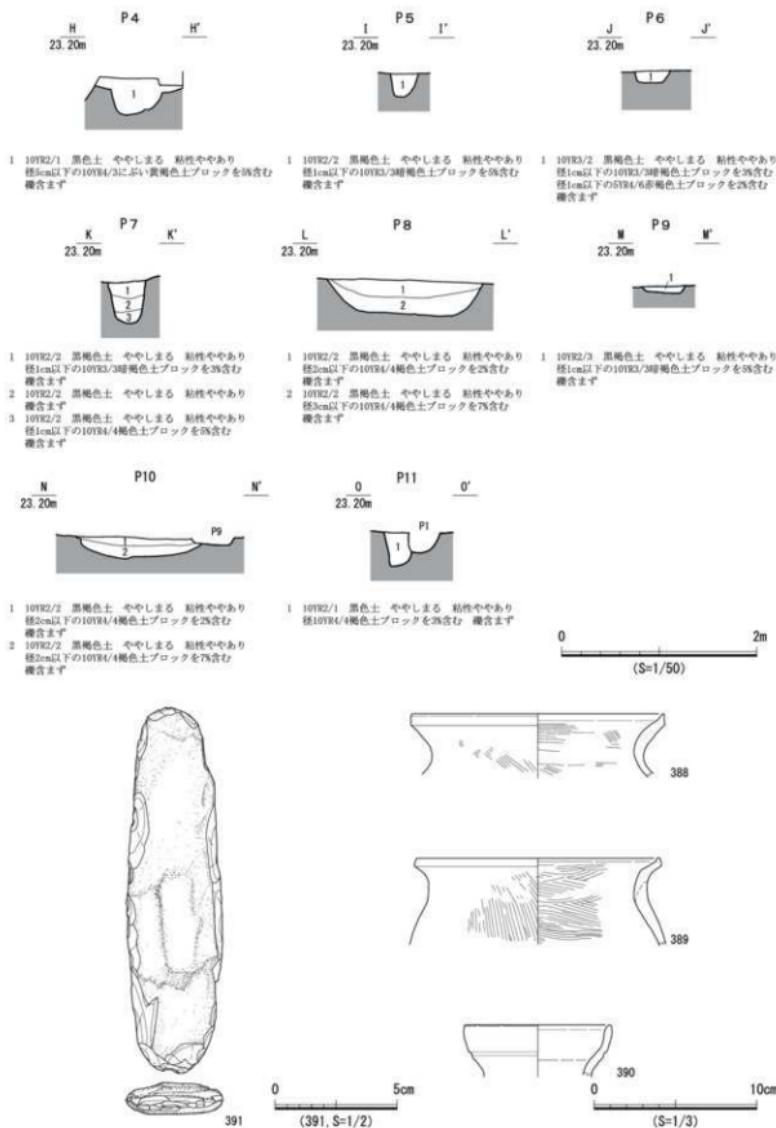


図103 SI20 (2)

時期 穫穴埋土から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SI22 (図 104~108)

検出状況 C地点 BE14・15 グリッド、Ⅲ層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 4.06m × 3.66m である。南東側が発掘区外に広がるが、検出した各辺が直線的であることから方形と思われる。平面形は、南西辺と北西辺が明瞭に確認でき、北東辺は不明瞭であった。北西辺のカマド周辺で埋土に焼土ブロックが混じる状況を確認した。SI23 と重複し、本遺構が古い。

埋土 単層で、埋土にブロック土を含むことから人為堆積と考える。

壁 壁は、確認した 3 辺ではほぼ直立する。壁の残存高は最大で 0.06m である。

床面 2 面の貼床を確認し、それぞれの面で遺構を検出した。検出した状況から建物の形状や柱穴・カマドの位置は変更せず、当初機能していた床面（床面 1）の上にさらに貼床を形成し、新しい床面（床面 2）を作ったと考えられる。床面 2 は 4 層が相当し、暗褐色土ブロックを含む黒褐色土で、ややしまる。検出した遺構は、柱穴 3 基、カマド 1 基、壁際溝 2 条、性格不明土坑 10 基である。床面 1 は 13 層が相当し、黒褐色土ブロックを含む暗褐色土で、しまる。検出した遺構は、貯蔵穴 1 基、性格不明土坑 7 基である。柱穴は堆積状況と位置関係から P1・P2、位置関係と遺構の深さから P3 と考えられる。残りの 1 基は南東側の発掘区外に存在すると思われ、4 本柱の建物が想定できる。柱径は P1 が 0.10m、P2 が 0.14m である。床面 1 の北隅で確認した穴を、竪穴内の位置と形状から貯蔵穴の可能性が高いと判断した。形状は不整円形で、壁はほぼ直立する。長軸長 0.42m、短軸長 0.33m、深さは 0.52m である。また、貯蔵穴の周囲は盛土されていた。貯蔵穴が盛土の端を掘り込んでいること、盛土下で床面 2 を確認したことから、構築順は貼床（床面 2）の形成→盛土の構築→貯蔵穴の掘削と考えられる。P13 は、カマドの正面で検出した残存部分の長軸長 1.24m の大型土坑であるが、その性格は不明である。

カマド 建物の北西壁、やや北東寄りに構築される。煙道部は確認できなかった。両袖の残存状況は良好であった。袖部は床面 1 の上から盛られていることから、床面 1 形成後にカマドを構築したと考えられる。袖の内側では、埋土に焼土を含む層（2 層・4 ~ 6 層）を確認した。

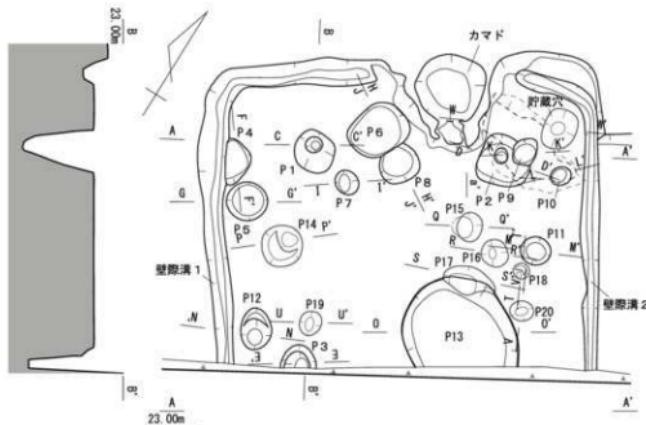
掘方 掘方除去後、性格不明土坑 5 基を検出した。P21 は、カマドの正面で検出した残存部分の長軸長 1.11m の大型土坑であるが、その性格は不明である。

遺物出土状況 床面 1 の直上から土師器、須恵器が出土した。カマド内部から焼土が混じる埋土とともに土師器が散在して出土した。396 は上層からの出土で、本遺構に所属するものではない可能性が高い。

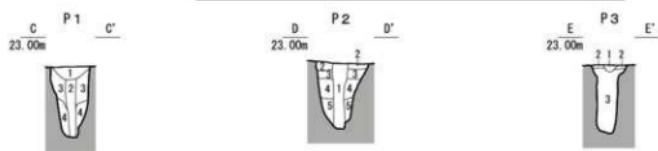
出土遺物 392~395 は土師器である。392~394 は甕の口縁部である。392 は口頸部がやや肥厚し、端部を丸くおさめる。393 は端部に面をもち、口頸部が肥厚する。394 は頸部内面に平坦な面をもつ。395 は移動式カマドの背面と思われる。396~401 は須恵器である。396 は有台坏で、黒帯 14 号窯式期頃のものである。他の出土遺物よりも新しい。397 は坏蓋で、東山 50 号窯式のものである。398~400 は坏身で、いずれも美濃須衛窯Ⅲ期第 1 小期のものである。401 は題で、東山 50 号窯式のものである。1 条の沈線があり、その下に刺突文が認められる。

時期 床面 1 直上から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

床面



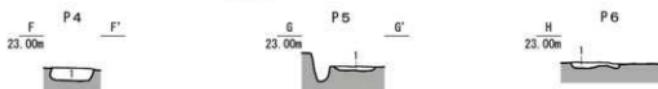
※床面1で検出した遺構は
グレーで表示



- 10YR2/3 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下との10YR3/3暗褐色土ブロックを2%含む
纏合ます
- 2 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性あり
纏合ます
- 3 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下との10YR3/3暗褐色土ブロックを3%含む
纏合ます
- 4 10YR3/2 暗褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下との10YR2/2暗褐色土ブロックを5%含む
纏合ます

- 1 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性あり
纏合ます
- 2 10YR3/3 暗褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下との10YR2/2黒褐色土ブロックを5%含む
纏合ます
- 3 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下との10YR3/3暗褐色土ブロックを5%含む
纏合ます
- 4 10YR3/2 暗褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径3cm以下との10YR4/2黒褐色土ブロックを7%含む
纏合ます
- 5 10YR3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下との10YR2/2暗褐色土ブロックを2%含む
纏合ます

- 1 10YR3/3 暗褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下との10YR4/4褐色土ブロックを2%含む
纏合ます
- 2 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
纏合ます
- 3 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4褐色土ブロックを5%含む
纏合ます



- 1 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR3/3暗褐色土ブロックを2%含む
纏合ます

- 1 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4褐色土ブロックを5%含む
纏合ます

- 1 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4褐色土ブロックを5%含む
纏合ます

0 2m
(S=1/50)

図104 SI22 (1)

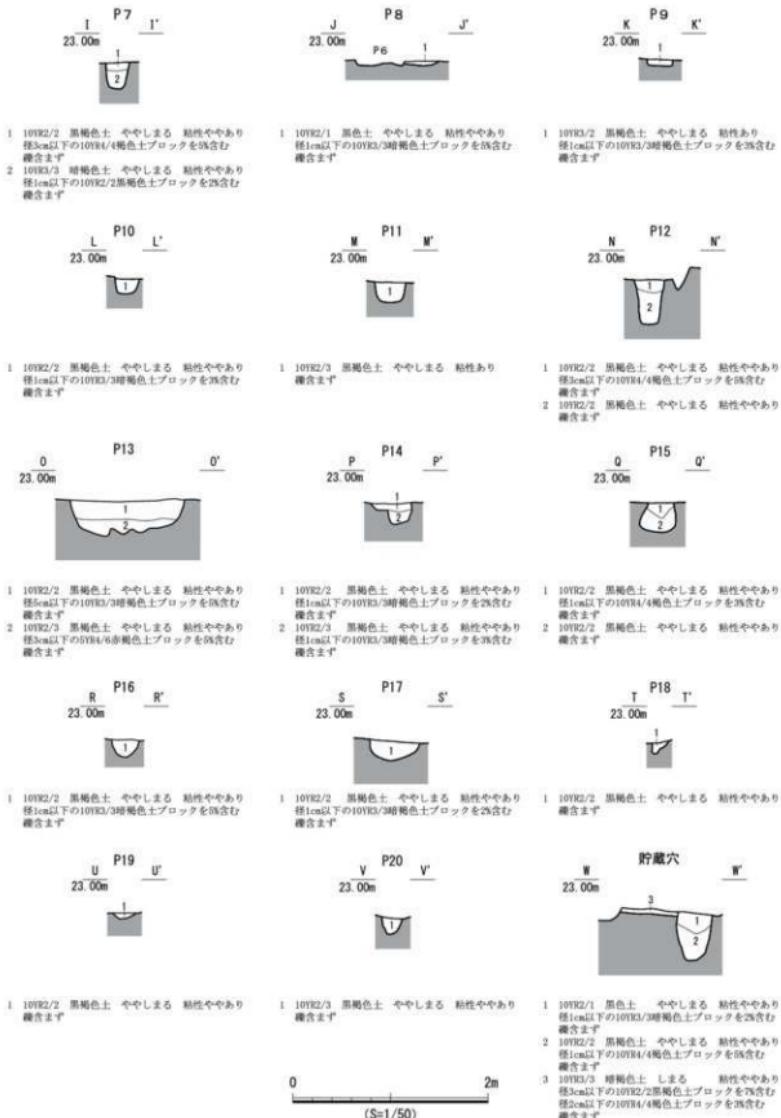


図105 S122 (2)

概方

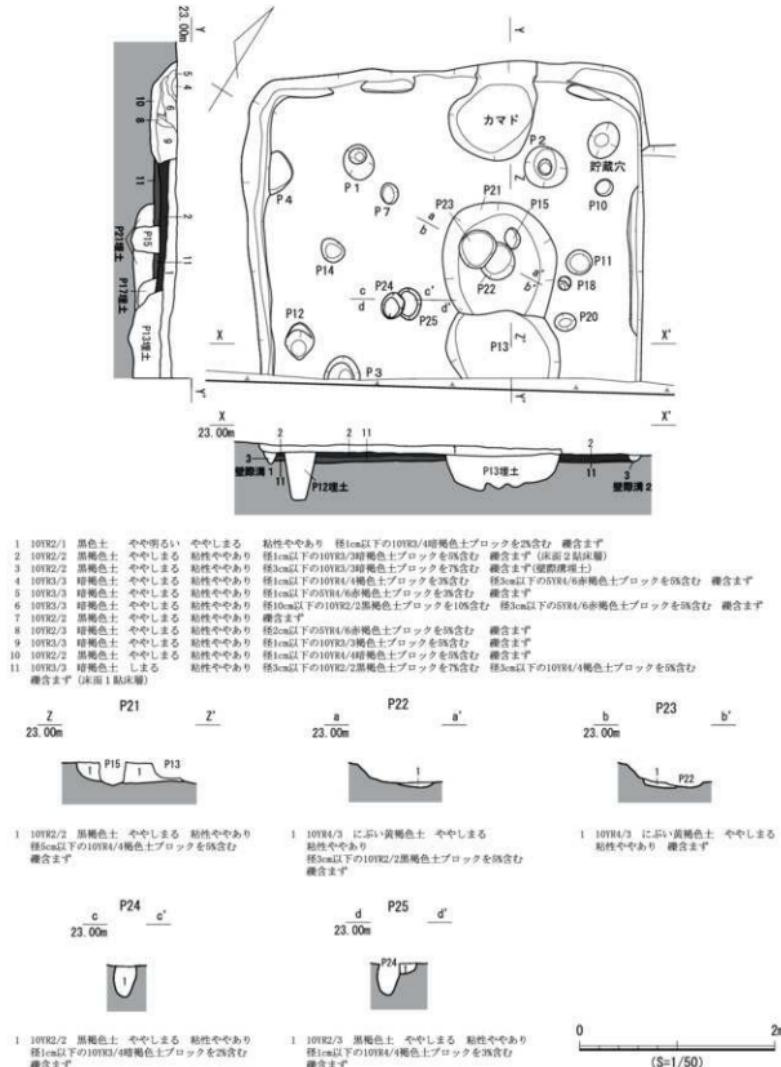


図106 SI22 (3)

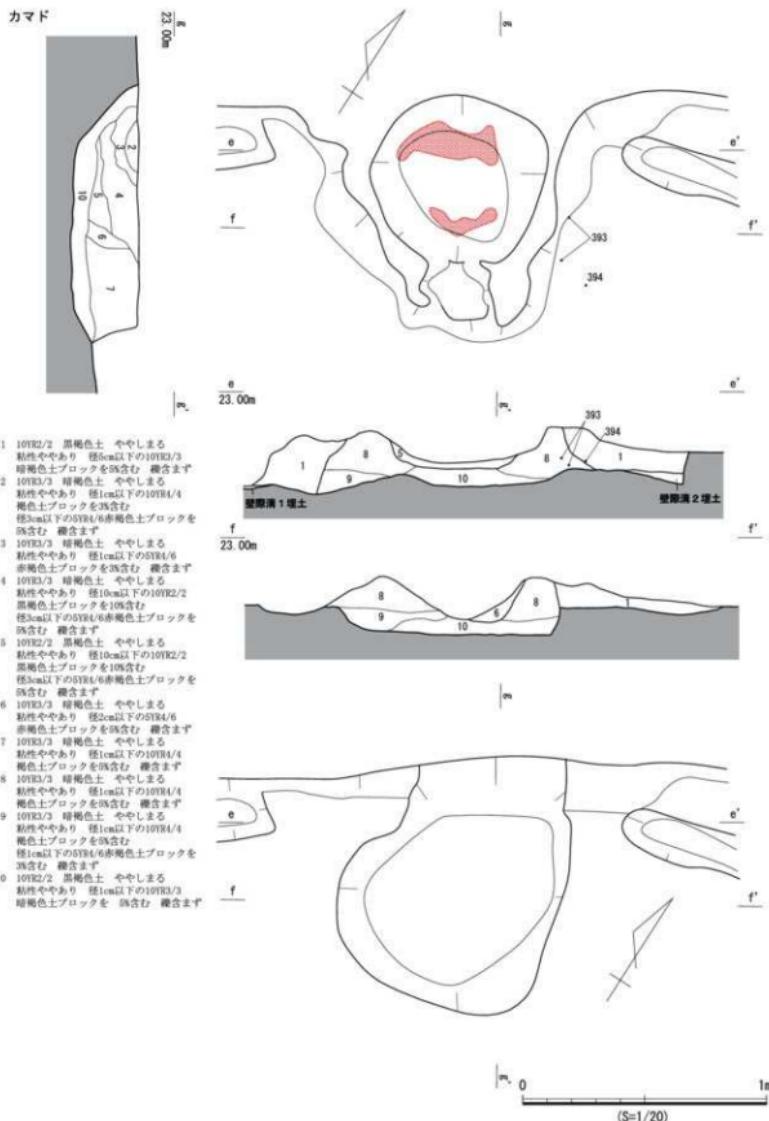


図107 SI22 (4)

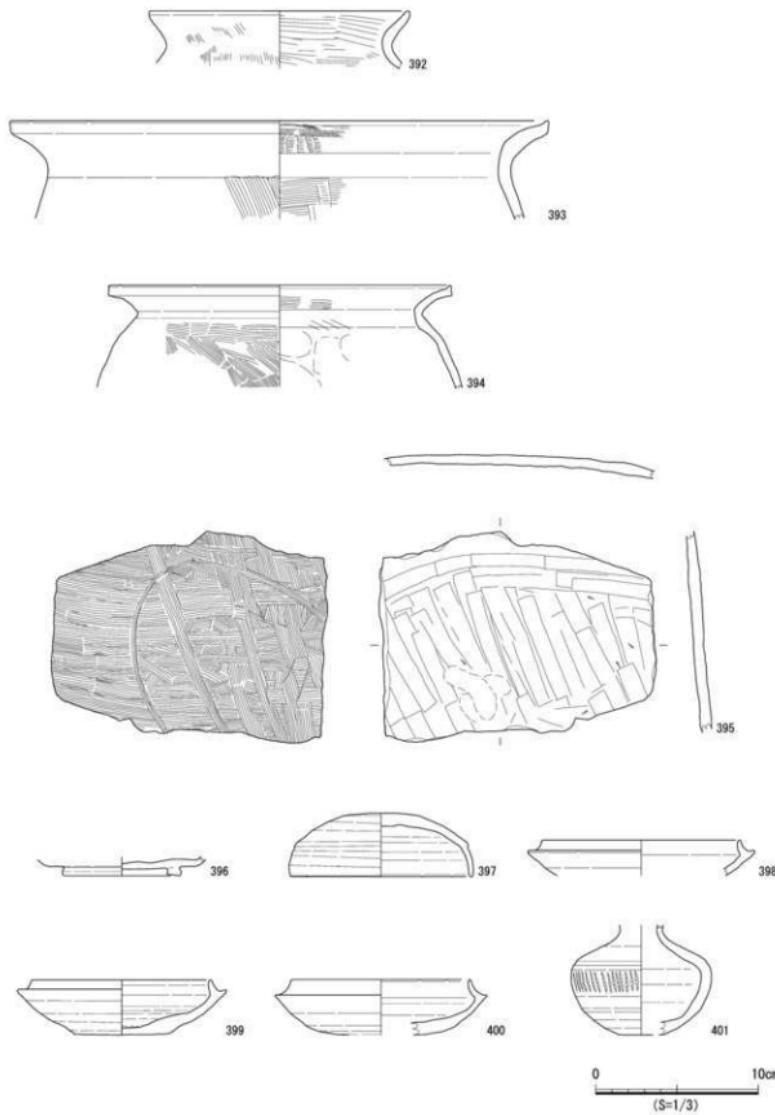


図108 SI22出土遺物

SI23（図109・110）

検出状況 C地点 BD～BE15 グリッド、Ⅲ層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 4.38m × 2.40m である。南東側が発掘区外に広がるが、検出した各辺が直線的であることから方形と思われる。平面形は、不明瞭であった。南西側を SI22・SI25 と重複し、SI22 より新しく、SI25 より古い。方形を想定できる掘方であり、かつ北西辺中央にカマドを想定できる形状と焼土ブロックが含まれる埋土を確認したため、竪穴建物と判断した。

埋土 単層で、埋土にブロック土を含むことから人為堆積と考える。

壁 壁は、確認した 3 辺でやや開く。壁の残存高は最大で 0.04m である。

床面 床面で検出した遺構は性格不明土坑 5 基である。明確な柱穴は確認できなかったが、P1 が柱穴と考えると、残りの 1 基が発掘区外に存在する 2 本柱の建物の可能性がある。壁際溝は確認できなかった。

カマド 建物の北西壁中央で確認した。煙道部は確認できなかった。形状から 2・3 層が袖部と考えられ、掘方と考えられる 3・4 層が土坑状に深くなる。2 層～4 層の埋土には焼土が含まれる。

遺物出土状況 カマド埋土から多数の土師器と須恵器が散在して出土した。

出土遺物 402 と 403 は土師器甕の口縁部から胴部で、口頸部が肥厚する。404～413 はカマドから出土した。404～408 は土師器である。404～407 は甕の口縁部から胴部である。408 は瓶の口縁部である。409～413 は須恵器である。409 は短頸壺、410 は坏身、411 と 412 は無台坏で、いずれも美濃須衛窯Ⅲ期第3小期のものである。413 は坏蓋で、美濃須衛窯Ⅲ期のものである。

時期 カマド埋土から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SI24（図111～113）

検出状況 C 地点 BD・BE15 グリッド、Ⅲ層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で 3.42m × 3.12m である。検出した各辺が直線的であることから方形と思われる。カマドの上層で馬蹄形に焼土が広がる範囲を確認した。南側を SI23 と重複し、本遺構が古い。また、北東側を SI26 と重複し、本遺構が新しい。平面形は不明瞭であった。

埋土 単層で、SI23・SI26 と重複する範囲を除いて全体に堆積する。埋土にブロック土を含むことから人為堆積と考える。

壁 壁は、確認した 3 辺でやや開く。壁の残存高は最大で 0.08m である。

床面 床面はほぼ平坦である。重複する SI23 の掘方底面にも本遺構の貼床を確認しており、貼床は全面で確認した。層厚 0.08m を測り、黒褐色土と暗褐色土のブロックが混じる黒色土で、しまる。カマド周辺は特に硬化が著しかった。床面で検出した遺構は、柱穴 4 基、カマド 1 基、性格不明土坑 3 基である。柱穴は、位置関係から P1、P3、P6、P7 と考えられる。P6 は SI23 の掘方底面で検出したが、本遺構の貼床を掘り込むこと、4 本柱を想定すると位置関係がよいことから柱穴と判断した。壁際溝は確認できなかった。

カマド 建物の北西壁、やや北東寄りに構築される。煙道部は上層の攪拌・削平によって確認できなかつた。カマド天井部を構築していたとみられる焼土ブロックを含む埋土がカマド北西側に 0.83m × 0.41m の範囲で広がっており、竪穴建物廃絶時にカマドの天井部を解体した可能性が考えられる。両袖部の残存状況は良好である。被熱面は確認できなかつた。

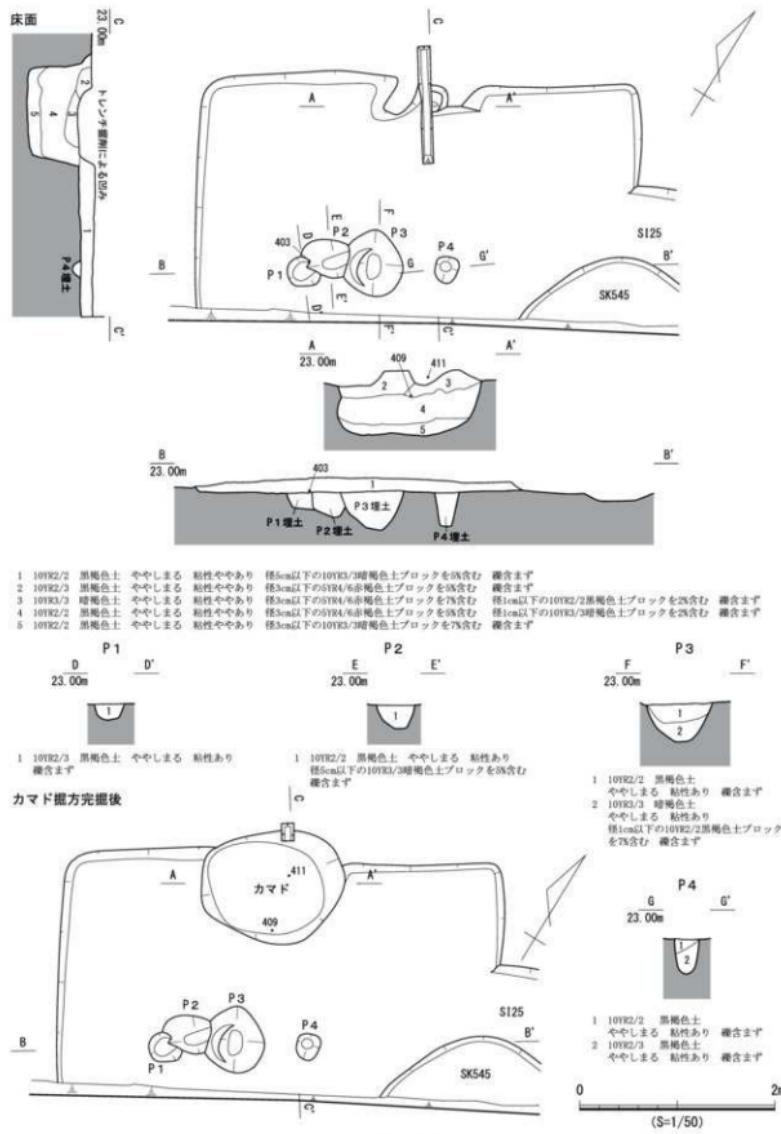


図109 S123

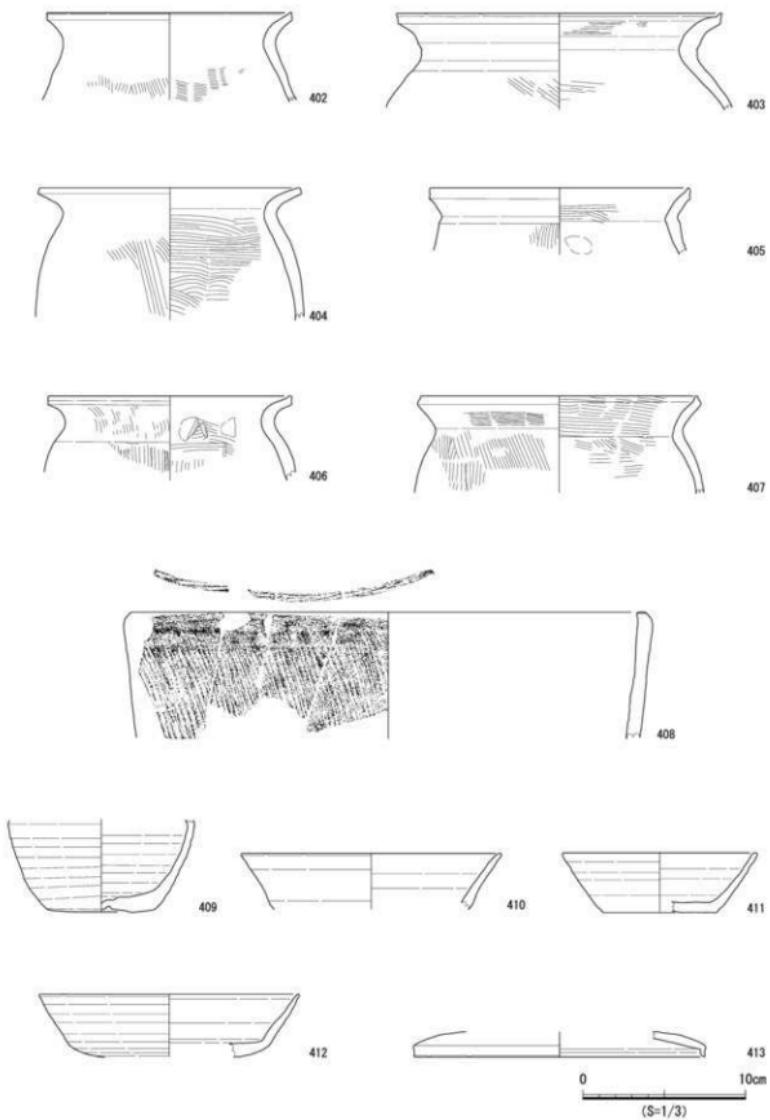


図110 S123出土遺物

床面

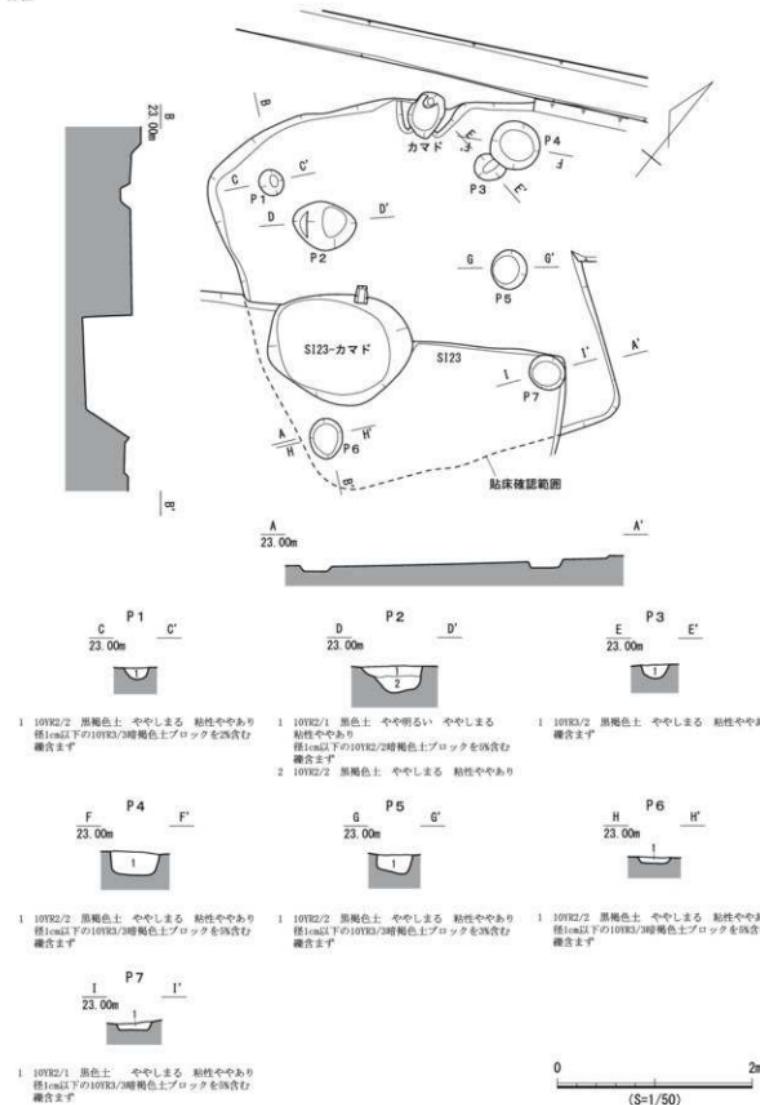


図111 SI24 (1)

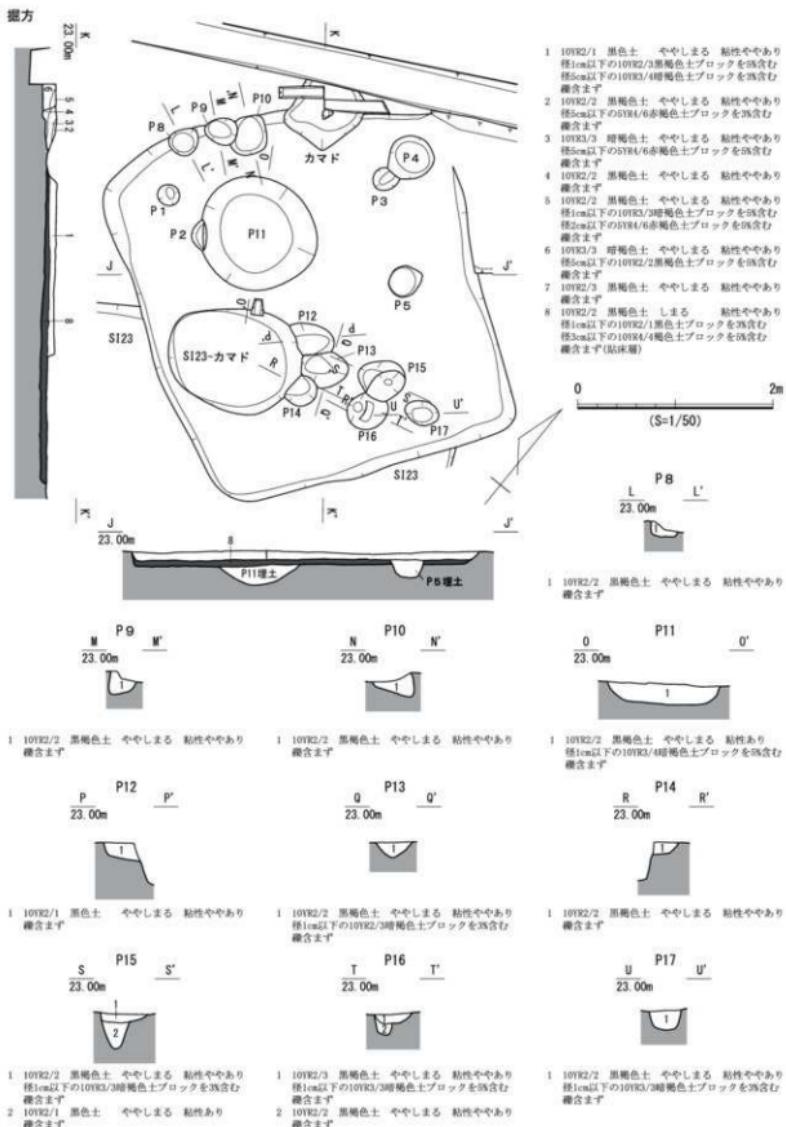


図112 S124 (2)

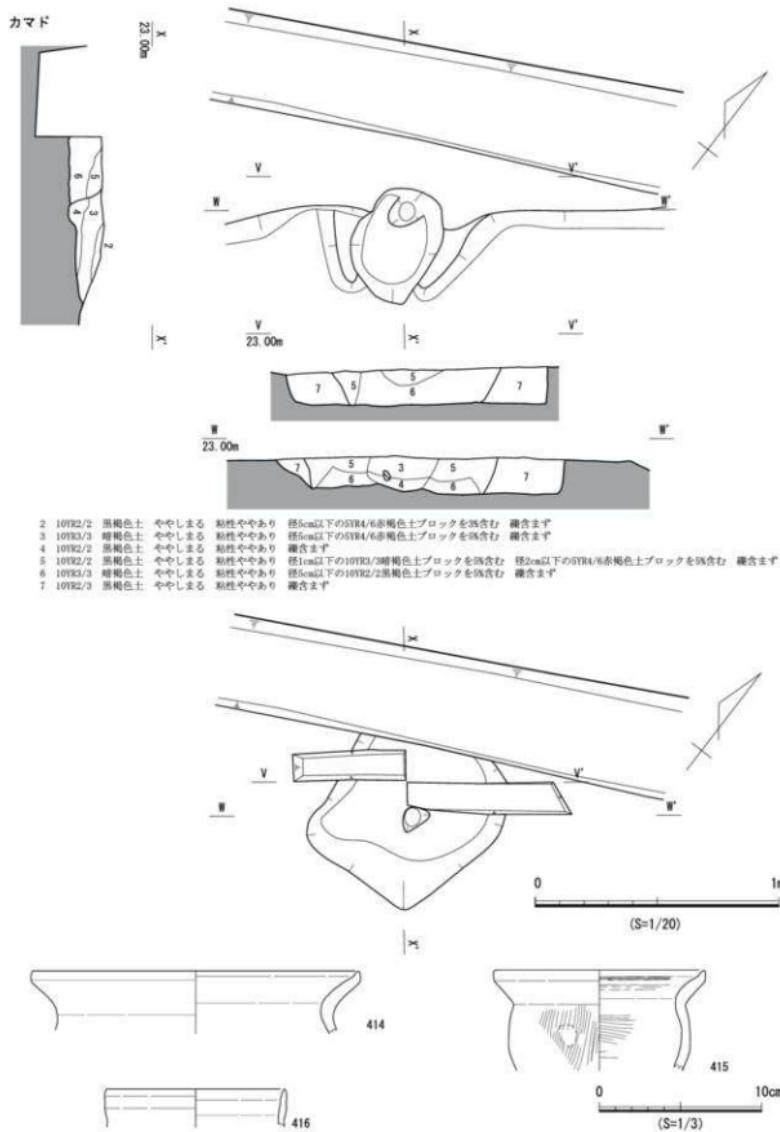


図113 SI24 (3)

掘方 貼床除去後、性格不明土坑 10 基を検出した。P11 は長軸 1 m を超える穴であるが、その他は長軸 0.3 m ~ 0.4 m 程の小穴であった。

遺物出土状況 壺穴・カマド・柱穴などの埋土から土師器と須恵器が散在して出土した。

出土遺物 414 と 415 は土師器の壺の口縁部で、口頸部が肥厚する。416 は須恵器短頸壺の破片で、東山 50 号窯式のものである。

時期 壺穴埋土から出土した土器と SI23 との重複関係から古墳時代後期と判断した。

S125 (図 114~116)

検出状況 C 地点 BD15~BE16 グリッド、III 層上面で検出した壺穴建物である。検出した範囲で 5.55 m × 1.43 m である。検出した各辺が直線的であることから方形と思われる。西側を S123 と重複し、本遺構が新しい。また、北東側を S127 と重複し、本遺構が古い。平面形は不明瞭であった。貼床とカマドを確認したことから壺穴建物と判断した。

埋土 単層で、S127 と SK472 によって掘り込まれている部分を除いて全体に堆積する。埋土にプロック土を含むことから人為堆積と考える。

壁 壁は、北西辺でやや開く。

床面 ほぼ平坦であるが北東隅は隅を削るように盛土されている。貼床は SK472 によって掘り込まれている部分を除いて全体で確認し、層厚 0.06 m である。暗褐色土ブロックが混じる黒褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、カマド 1 基であった。柱穴は発掘区外に存在すると考えられる。

カマド 建物の北西壁、やや北東寄りに構築される。煙道部は確認できなかった。両袖部の高まりはわずかに残っていた。カマド内部からは、焼土を含む埋土とともに土師器が多数出土した。被熱面は確認できなかった。検出時に燃焼部にあたる位置で人頭大の礫を確認した。礫に被熱の痕跡は認められなかった。

掘方 貼床除去後、カマドの袖下にあたる位置に性格不明土坑 3 基を検出した。

遺物出土状況 床面直上から須恵器の坏蓋 (419) が正位で出土した。

出土遺物 417 は土師器の壺の口縁部から胴部で、口頸部が肥厚する。418 はカマドから出土した土師器の壺の口縁部から胴部である。419 は産地不明の畿内系の須恵器坏蓋で、陶邑編年 II 型式第 5 段階～第 6 段階のものである。

時期 床面直上から出土した土器から古墳時代後期と判断した。

S126 (図 117)

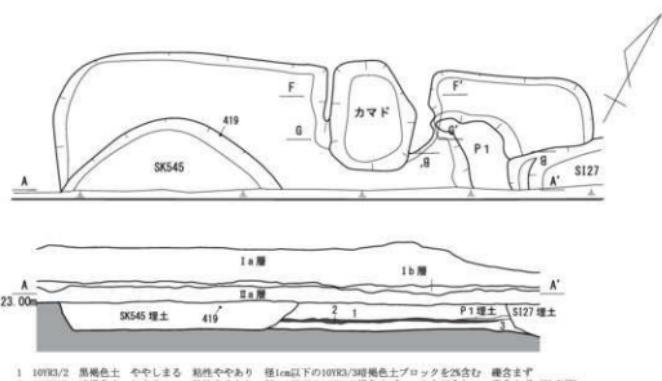
検出状況 C 地点 BD15~16 グリッド、III 層上面で検出した壺穴建物である。検出した範囲で 3.44 m × 2.53 m である。検出した各辺が直線的であることから方形と思われる。南西側を S124、北東側を SK510 と重複し、いずれも本遺構が古い。平面形は不明瞭であった。明確な柱穴は確認できなかったが、本遺構の範囲で明瞭な貼床を確認したことから壺穴建物と判断した。

埋土 単層で、本遺構より新しい S124・SK510 と重複する範囲を除いて全体に堆積する。埋土にプロック土を含むことから人為堆積と考える。

壁 壁は、確認した各辺でやや開く。壁の残存高は最大で 0.08 m である。

床面 S124・SK510 との重複で大部分が削平されるが、確認した範囲からはほぼ平坦であったと想定できる。貼床は重複範囲を除いて全面で確認し、層厚 0.06 m を測る。暗褐色土ブロックを含む黒褐色

床面



掘方

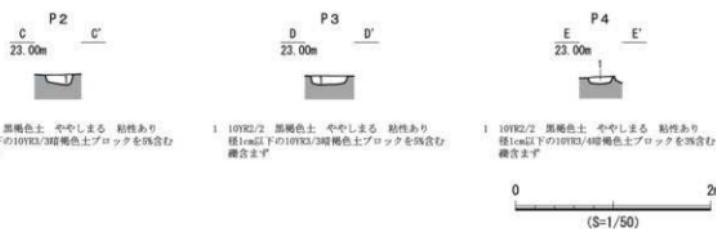
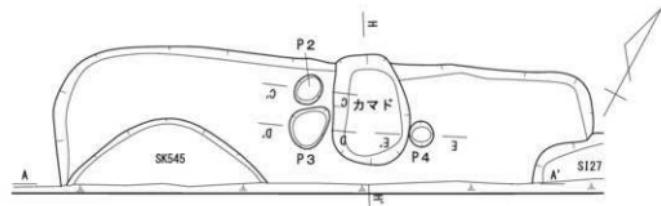


図114 SI25 (1)

カマド

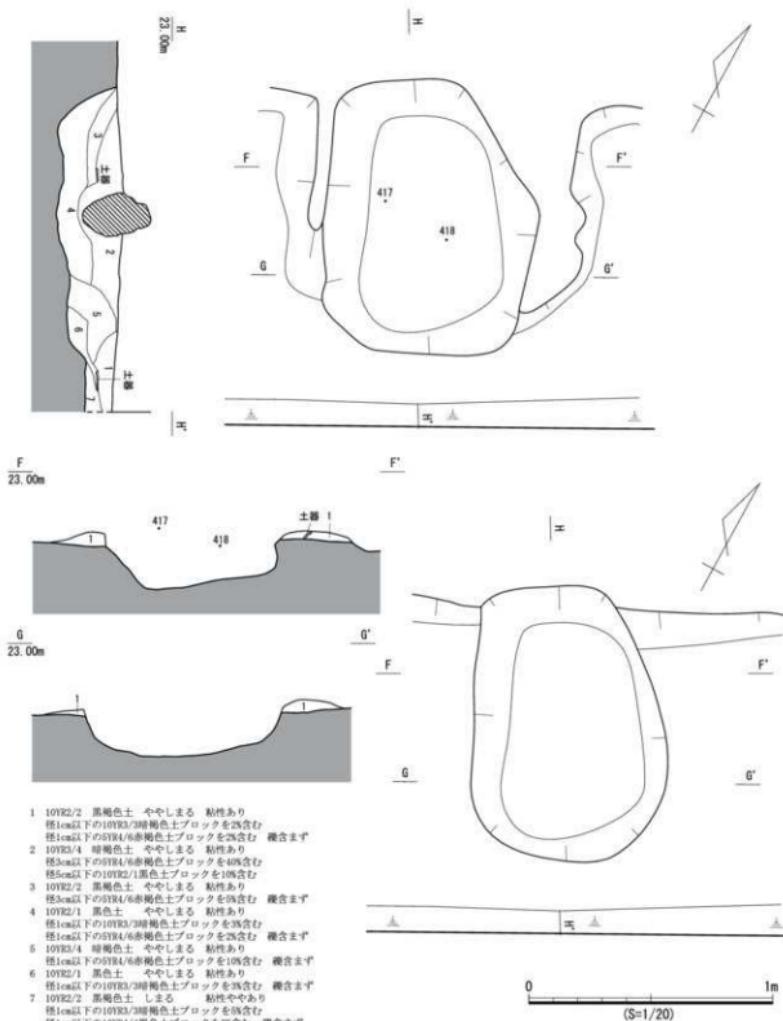


図115 S125 (2)

土で、しまる。床面で検出した遺構は、性格不明土坑1基である。

掘方 貼床除去後、柱穴1基、性格不明土坑2基を検出した。柱痕跡を確認したP3は位置関係から柱穴の可能性がある。貼床前に掘削したと考えると、床面に出ていた柱痕跡を見落としたか、よく見えなかつた可能性がある。P4は長軸長0.85m、深さ0.12mの土坑で、南西隅に西側と南側を壁に接するように位置する。

遺物出土状況 埋土から土師器と須恵器が散在して出土した。

出土遺物 420は土師器の甕の口縁部から胴部で、口頸部が肥厚する。421は產地不明の須恵器高坏の脚部で、美濃須衛窯II期後半併行のものと思われる。

時期 埋土から出土した土器とSI24との重複関係から古墳時代後期と判断した。

4 土坑

SK151（図118）

検出状況 B地点AI19グリッド、SK113の底面で検出した。南西側でSP30と重複し、本遺構が古い。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は橢円形である。壁は緩やかに開き、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層で、ブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 別個体の須恵器片2点がいずれも内面が上を向いた状況で重なって出土した。

出土遺物 422と423は坏蓋で、美濃須衛窯III期第1小期のものである。422は外面に自然釉が付着する。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SK188（図118）

検出状況 B地点AK14グリッド、SD3の底面で検出した。平面形は明瞭であった。

形状 平面形状は不整形である。壁はほぼ直立するが、南側は段がある。底面はやや丸い。

埋土 2層に分層した。ブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

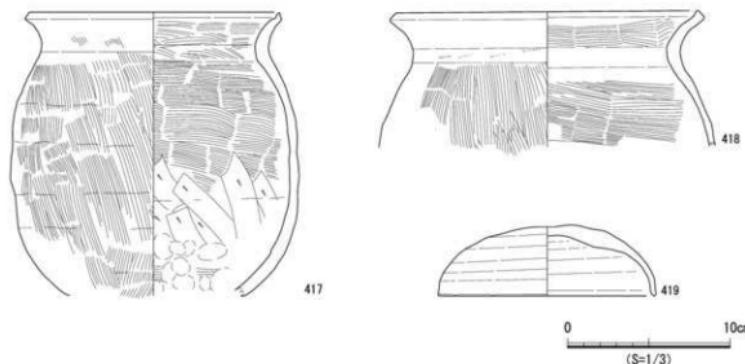
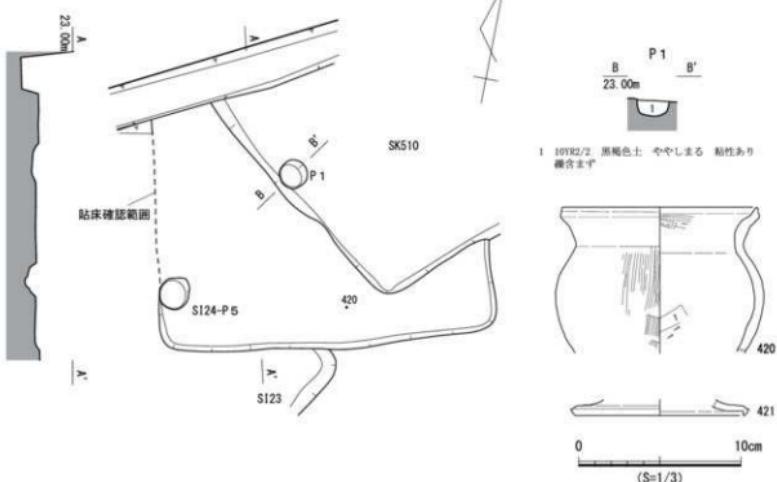


図116 SI25出土遺物

床面



掘方

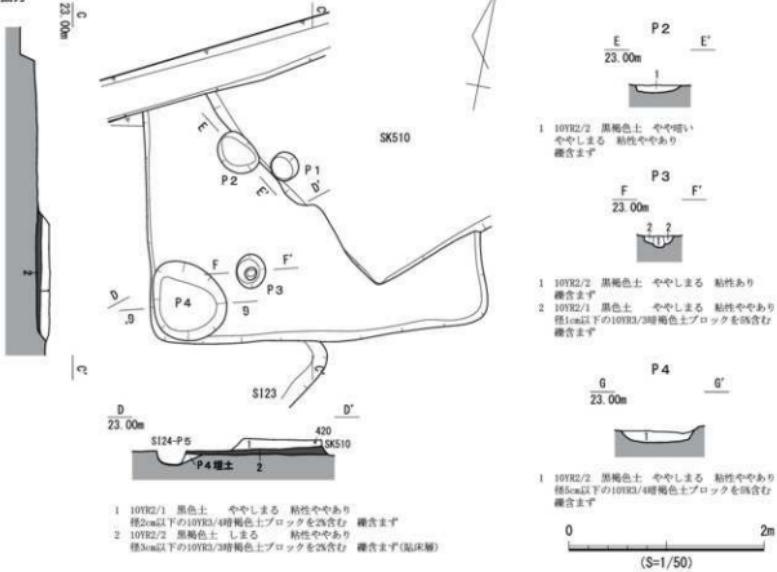


図117 SI26

遺物出土状況 埋土から土師器、須恵器、石器が散在して出土した。

出土遺物 424は土師器の甕の口縁部から胸部である。口縁端部に面をつくり、口頸部が肥厚する。

425は須恵器壺蓋で、東山61号窯式のものである。

時期 底面付近から出土した土器（425）から古墳時代後期と判断した。

SK271（図118）

検出状況 C地点 BA9グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は橢円形である。壁は緩やかに開き、底面は丸い。

埋土 2層に分層した。1層が大部分を占め、底面付近に2層が薄く堆積する。1層は焼土ブロックや炭化物を含む。1・2層共にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 1層から焼土ブロックや炭化物とともに土師器（426）が口縁部を上にして出土した。

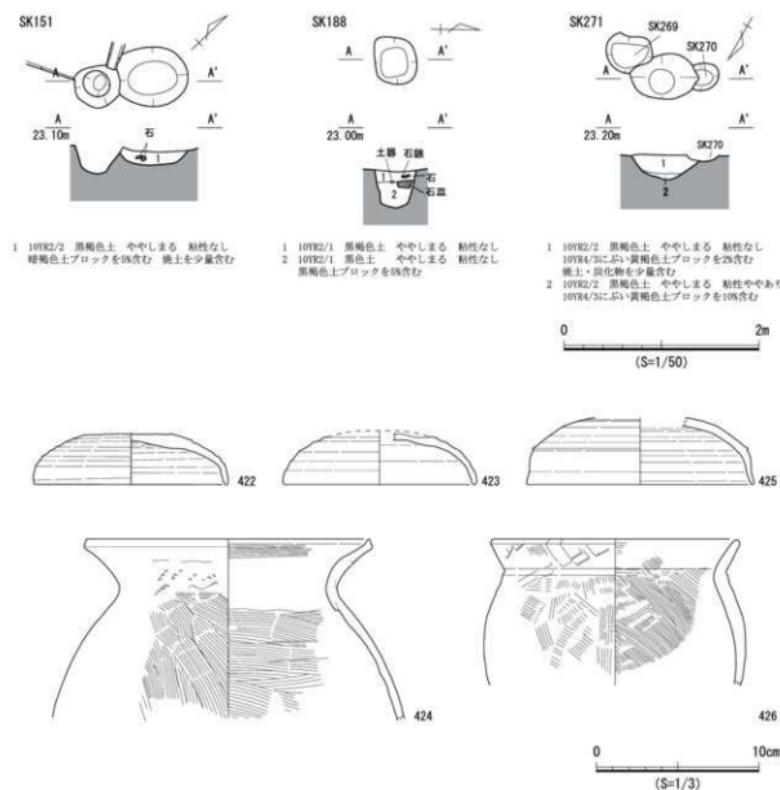


図118 SK151・SK188・SK271

出土遺物 426は土師器の甕の口縁部から胸部である。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SK402(図119)

検出状況 C地点BK1～2グリッド、III層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

形状 北部が発掘区外に広がるため、全体の形状は不明であるが、円形と思われる。長軸長2.40mで、大型の土坑である。壁はやや急で、底面はほぼ平坦である。

埋土 2層に分層した。1層が大部分を占め、壁面沿いに2層が堆積する。埋土にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から繩文土器、土師器、須恵器、石器が散在して出土した。いずれも小片で図示していない。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SK503(図119)

検出状況 C地点BF2グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。SI14と重複し、SI14が新しい。

形状 平面の規模に対して、浅い。形状は隅丸の長方形である。壁はやや急で、底面は平坦である。

埋土 単層で、ブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から土師器が散在して出土した。

出土遺物 427は土師器の甕の口縁部である。口縁端部をつまみあげ、口頸部が肥厚する。

時期 出土した土器から、古墳時代後期と判断した。

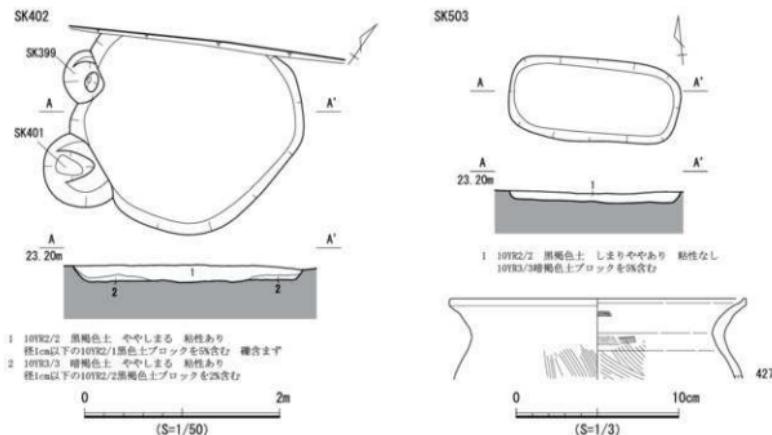


図119 SK402・SK503

SK506 (図120)

検出状況 C地点 BD14 グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。共に性格は不明であるが、隣接する SK507 と底面の形状がやや異なるものの、規模・形状・埋土に共通性が見られる。

形状 形状は円形である。壁は急で一部に段をもつ。底面は南部がやや深くなる。

埋土 2層に分層した。1・2層共にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から土師器が散在して出土した。

出土遺物 428 は産地不明の畿内系の須恵器壺蓋で、陶邑編年II型式第5段階～第6段階併行のものである。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SK507 (図120)

検出状況 C地点 BD14 グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。共に性格は不明であるが、隣接する SK506 と底面の形状がやや異なるものの、規模・形状・埋土に共通性が見られる。

形状 形状は円形である。壁は急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層が大部分を占める。1・2層共にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から縄文土器と土師器が散在して出土した。いずれも小片のため図示していない。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SK508 (図120)

検出状況 C地点 BF13 グリッド、III層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。北西側で SP148 と重複し、SP148 の方が新しい。

形状 SP148 と重複するため、全体の形状は不明であるが、円形と思われる。壁はやや開き、底面はやや丸い。

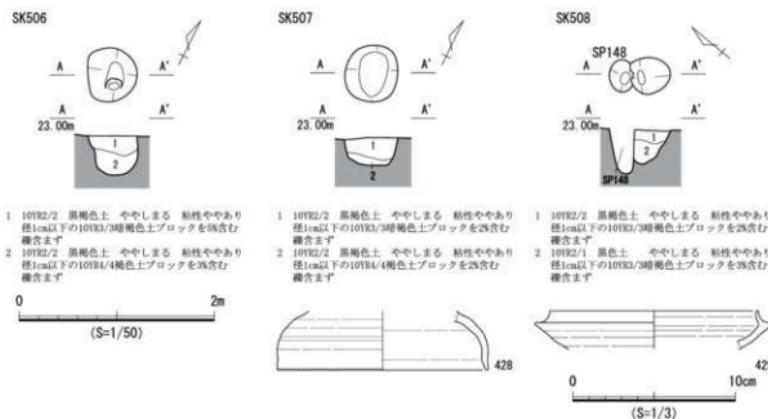


図120 SK506・SK507・SK508

埋土 2層に分層した。1・2層ともに埋土にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から縄文土器と土師器が散在して出土した。

出土遺物 429は産地不明の畿内系の須恵器坏身で、陶邑編年II型式第5段階～第6段階併行のものである。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

5 土坑群

C地点 BG 9～11 グリッドでは、規模や形状、埋土に共通性が見られる土坑を複数検出した。時期は、出土遺物等からいずれも古墳時代後期と考えられる。発掘区内でも同規模で楕円形の土坑がまとまって確認されたのはこの BG 9～11 グリッドのみであることや、いずれの埋土もブロック土を含み人為堆積と考えられること、2基の重複の可能性がある SK497 を除いて埋土は単層で、一括で埋め戻されたことが想定できることから土坑墓の可能性がある。

SK475（図 121）

検出状況 C地点 BG 9～10 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北側で SK474 と重複し、本遺構が古い。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状はやや不整の楕円形と思われる。壁はやや開き、底面は平坦である。

埋土 単層で、埋土にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から土師器 1点が出土したが、小片のため図示していない。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SK478（図 121）

検出状況 C地点 BG11 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 形状は長楕円形である。壁はやや急で、底面は平坦である。

埋土 単層で、埋土にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中からの遺物の出土はなかった。

時期 規模・形状が類似する周辺の土坑と同時期のものと考え、古墳時代後期と判断した。

SK497（図 121）

検出状況 C地点 BG 9 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形はやや明瞭であった。

形状 北側は発掘区外に広がり、東側は他の遺構との重複関係から形状は不明である。残存部分の長軸長 3.96m で大型の土坑と考えられる。壁はやや急で、東側がテラス状の平坦面となり、西側が楕円状に一段深くなる。形状から、2基の遺構が重複している可能性もある。2層部分の形状が土坑群の他の遺構と似る。

埋土 2層に分層した。1層・2層共にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 土師器と須恵器が散在して出土した。

出土遺物 430は土師器瓶の把手で、成形時の指オサエ痕が認められる。431は産地不明の畿内系の須恵器坏蓋で美濃須衛窯 II 期後半併行のものである。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

SK548(図122)

検出状況 C地点 BF・BG10 グリッド、SI19の床面で検出したが、出土遺物から SI19よりも新しい遺構であると判断した。

形状 形状はやや不整の楕円形である。壁は緩やかに開き、底面は平坦である。

埋土 上層は SI19 埋土として掘削したが、本遺構を検出した SI19 の床面より下では単層であった。

ブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土から土師器と須恵器が散在して出土した。

出土遺物 432は土師器壺の口縁部で、口頸部が肥厚する。

時期 出土した土器から古墳時代後期と判断した。

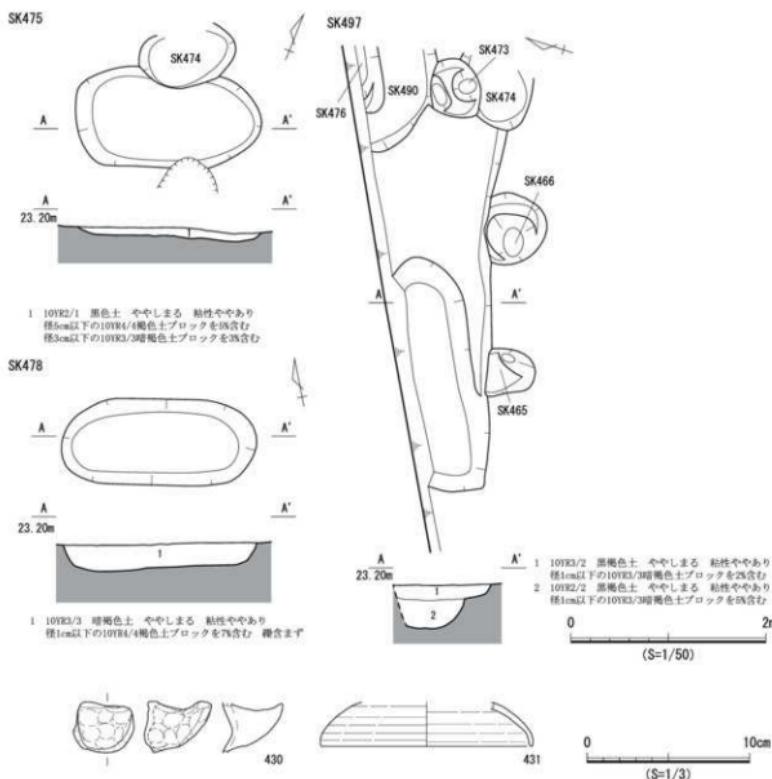


図121 SK475・SK478・SK497

SK549（図122）

検出状況 C地点 BG10 グリッド、SI19 の床面で検出したが、SI19 の柱穴と重複し新しいこと、埋土や形状が SK548 と似ることから、SK548 と同様に SI19 よりも新しい遺構であると判断した。

形状 形状は梢円形である。壁は緩やかに開き、底面は平坦である。

埋土 上層は SI19 埋土として掘削したが、本遺構を検出した SI19 の床面より下では単層であった。ブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中からの遺物の出土はなかった。

時期 規模・形状が類似する周辺の土坑との関連から古墳時代後期と判断した。

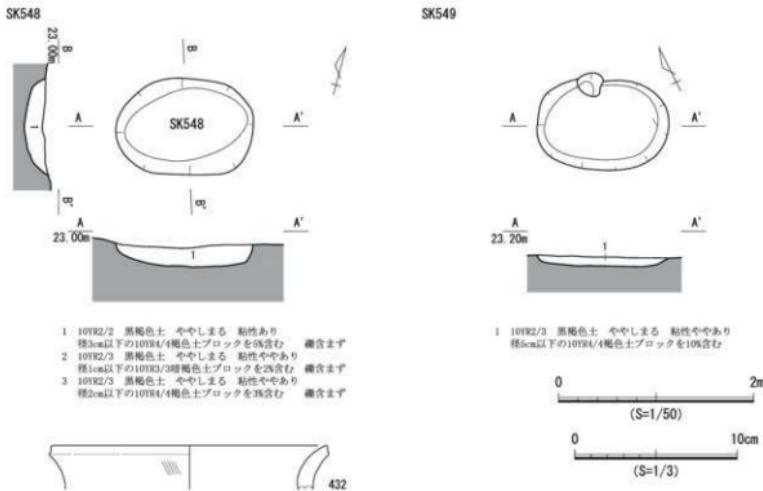


図122 SK548・SK549

第7節 古代・中世の遺構・遺物

1 堅穴建物

C地点北部で2軒、C地点東部で2軒、それぞれ近接して分布する古代の堅穴建物を確認した。
SI17(図123～図125)

検出状況 C地点BD～BE7グリッド、III層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で3.48m×3.36mである。南隅が発掘区外となるが、各辺が直線的で西・北・東隅が直交することから平面形状は方形である。カマド上層とP12上層で焼土ブロックが広がる範囲を確認した。平面形は明瞭であった。

埋土 単層で、薄く堆積する。埋土にブロック土を含むため人為堆積と思われる。

壁 壁は4辺ともなだらかで、壁の残存高は最大で0.04mである。

床面 ほぼ平坦である。堅穴中央部のP9～P11に掘り込まれている部分を除いてほぼ全体で貼床を確認し、層厚0.10m～0.18mを測る。にぶい黄褐色土ブロックを含む黒褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、柱穴6基、カマド1基、性格不明土坑6基である。柱穴は、位置関係からP1、P3～P5と考えられる。P3では柱痕跡を確認し、柱径は0.07mである。P12は北東辺で確認した不定形の土坑である。袖部や焼土面などは確認できなかったが、P12上層や埋土に焼土ブロックを多く含むことや、堅穴北東辺の外側までP12の輪郭が広がることから解体後のカマドの可能性がある。当初はカマドを北東壁に構築して使用し、解体した後、北西壁に再構築したと考えられる。P9～P11は、長軸1mを超える大型土坑である。いずれも貼床を掘り込んでいることから、貼床構築後に掘り込み、再び埋め戻したと考えられる。被熟した痕跡や埋土中の焼土は認められず、その性格は不明である。

カマド 建物の北西壁、ほぼ中央に構築される。煙道部は確認できなかった。カマド天井部を構築していたとみられる焼土や炭化物を含む埋土がカマド中央部から北東側に0.82m×0.80mの範囲で広がっており、カマドの天井部が崩れた可能性が考えられる。一方の袖の残存状況は良好であった。カマド掘方(Z-Z'断面5層)の下で貼床を検出したことから、貼床形成後にカマドを構築したと考えられる。被熟面は確認できなかった。

掘方 貼床除去後、柱穴1基、溝2条、性格不明土坑6基を検出した。P13は北隅で検出した長軸長1.03mの大型土坑である。SD1・2は、北東辺沿いに並列する幅0.15m～0.20mの溝で、掘方底面には掘削具の痕跡と思われる波状の凹凸が認められた。また本遺構の西隅には、掘方が窪み状にやや深くなる範囲が認められた。

遺物出土状況 北東辺中央付近の床面直上から須恵器がまとまって出土した。また、カマド埋土(Z-Z'断面1層底面)から須恵器の有台坏(435)と盤類(437)の破片が逆位で出土した。

出土遺物 433～437は須恵器で、435と437はカマドから出土した。433と434は坏蓋、435は有台坏、436は無台坏、437は盤類で、いずれも美濃須衛窯IV期第3小期のものである。435は破損後の被熟痕が認められる。

時期 床面直上及びカマド埋土から出土した須恵器から8世紀後葉と判断した。

SI18(図126～図130)

検出状況 C地点BC7～8グリッド、III層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で3.82m×

床面

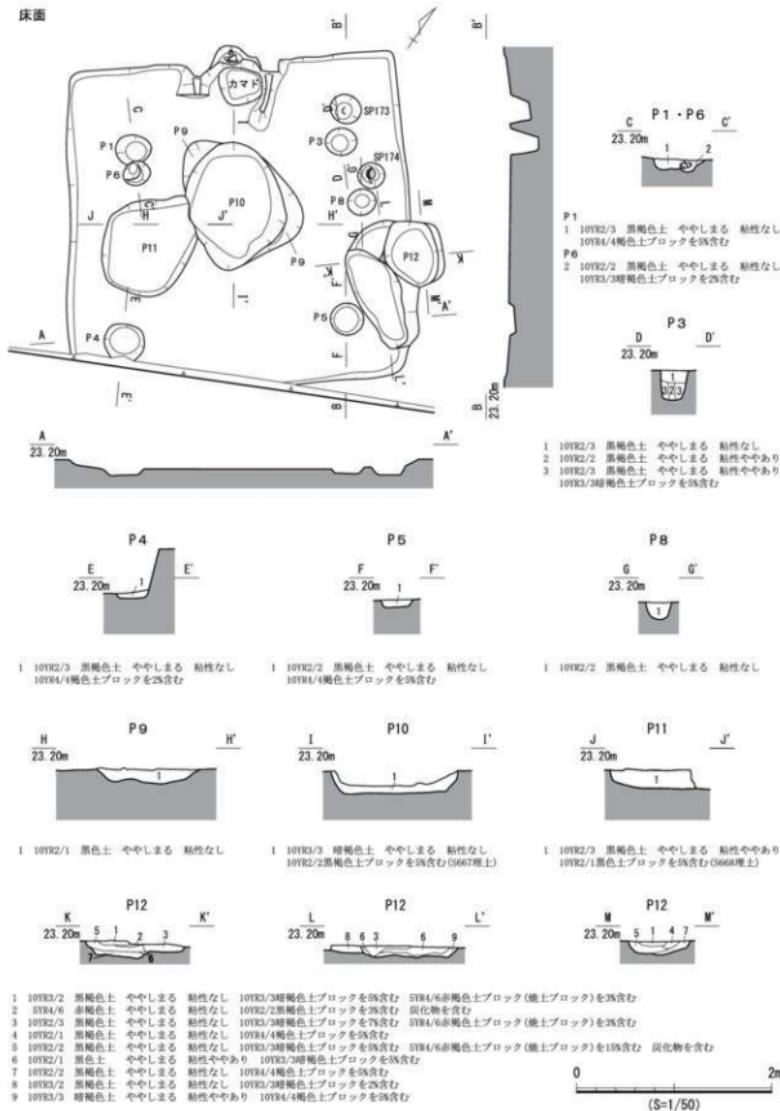


図123 SI17 (1)

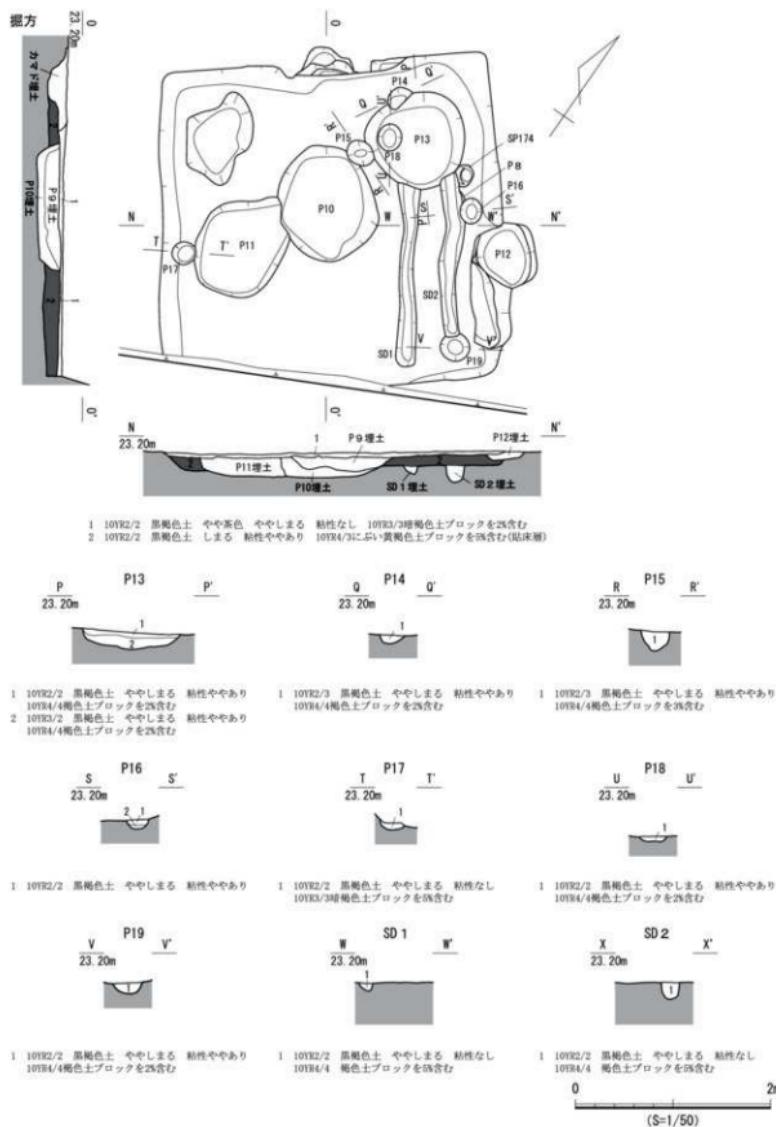


図124 SI17 (2)

3.00mである。北東部が発掘区外に広がるが、検出した3辺が直線的であることから方形と思われる。カマド上層で焼土ブロックが広がる範囲とカマドの袖部分に当る馬蹄形の輪郭を確認した。東部の一部は擾乱を受ける。平面形は明瞭であった。

埋土 単層で、東部の擾乱を受ける範囲を除いて全体に堆積する。埋土にブロック土を含むため人為堆積と思われる。

壁 壁は三辺で直立し、壁の残存高は最大で0.10mである。

床面 中央やや北寄りから南側に向かって全体的に一段低くなる。西部で焼土を含む埋土が1.65m×

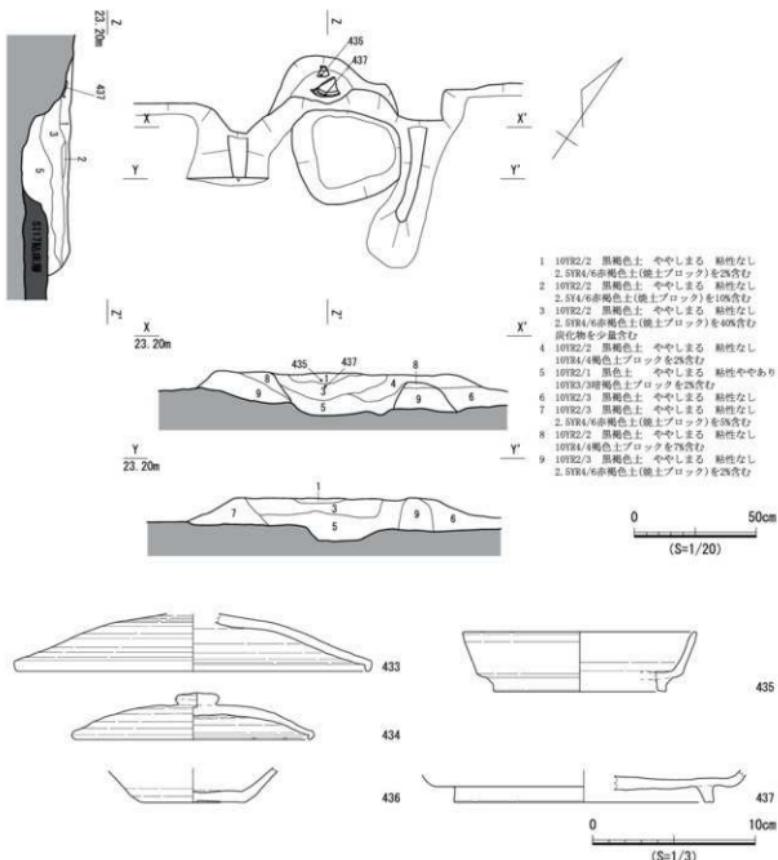


図125 SI17 (3)

床面

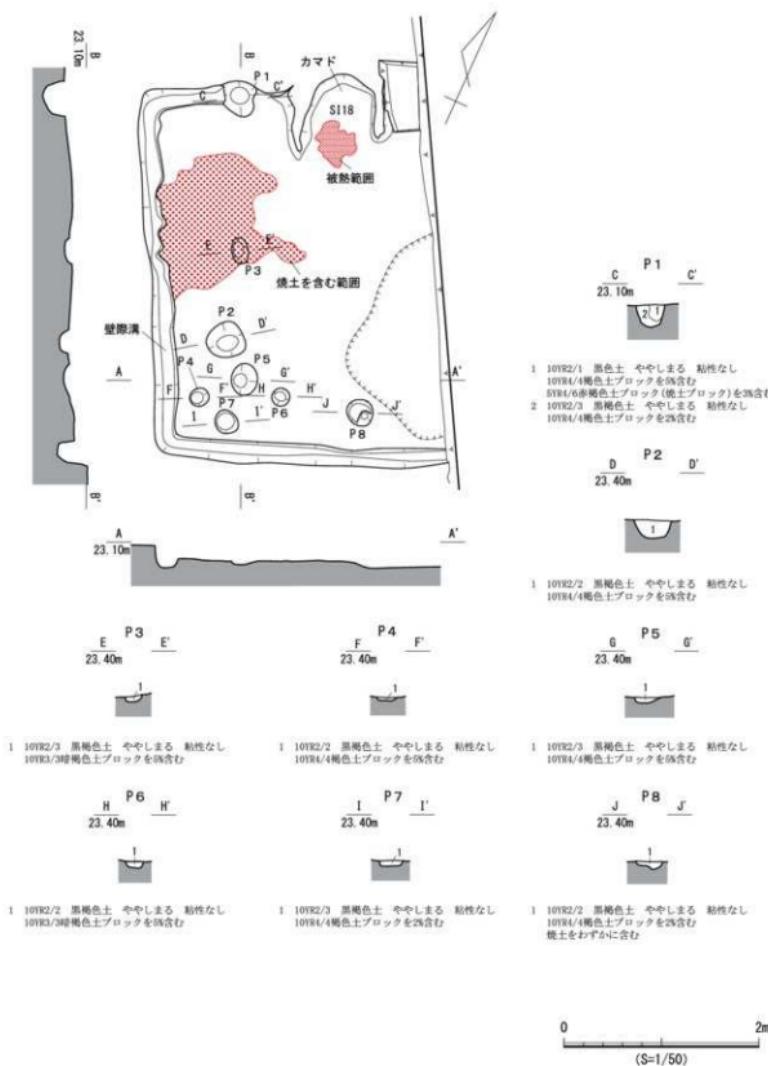


図126 SI18 (1)

掘方

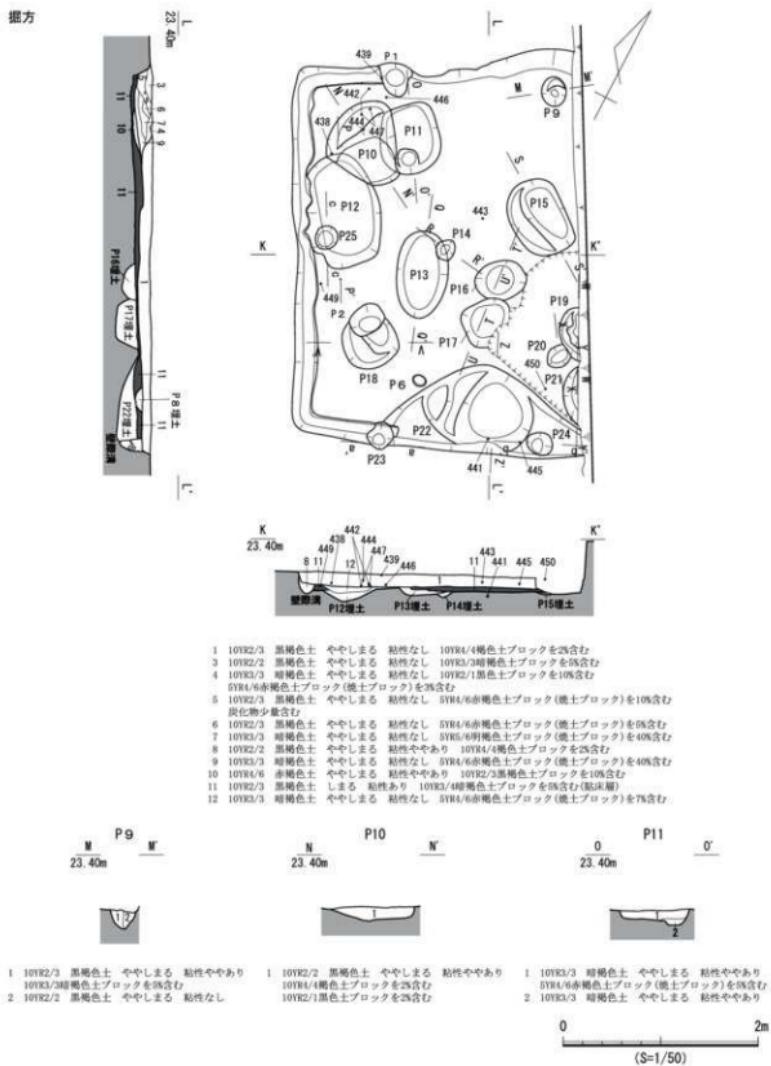


図127 S118 (2)

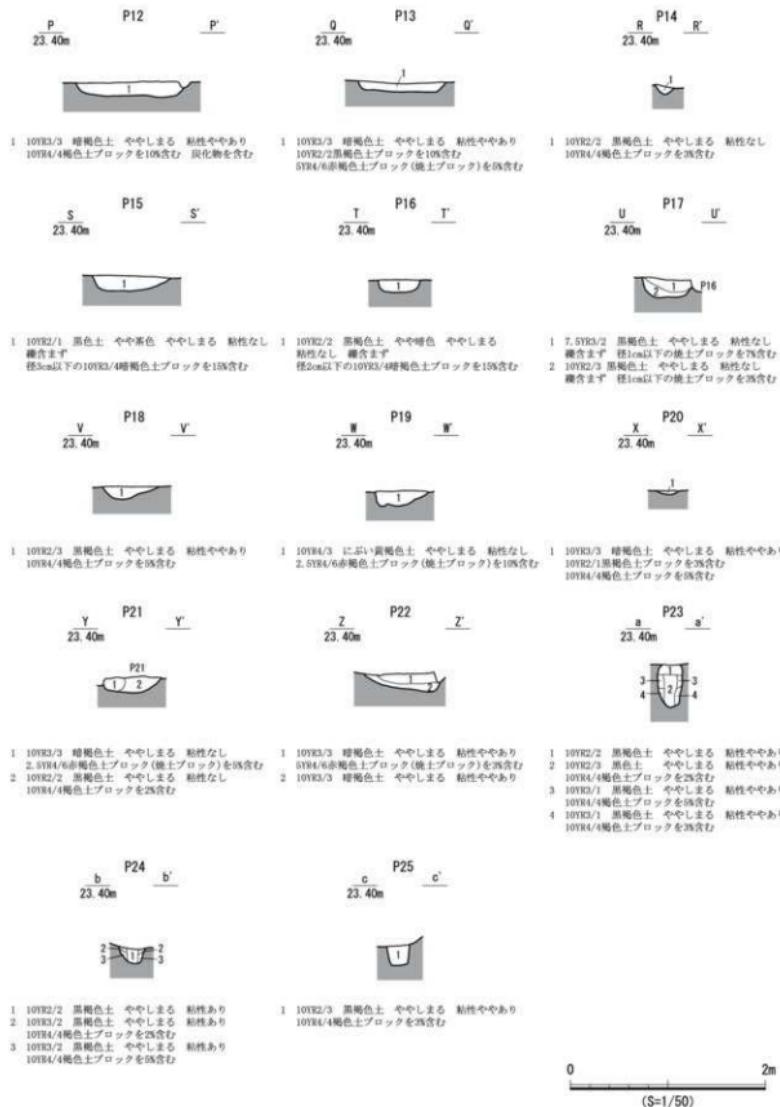
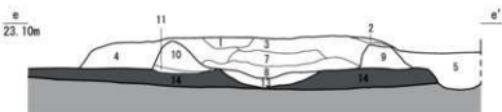
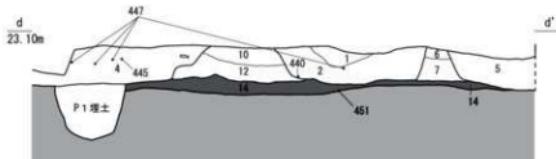
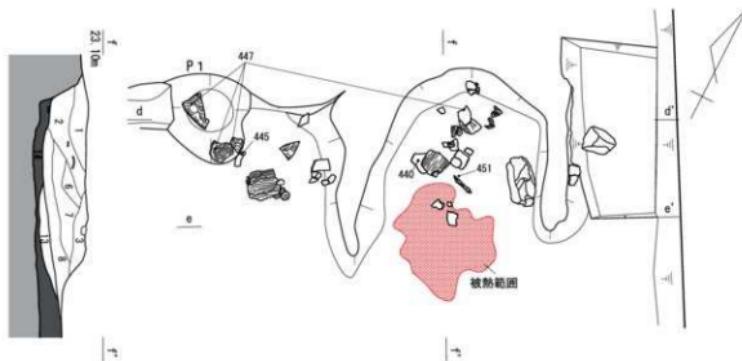


図128 SI18 (3)

カマド



1	10YR2/2	黒褐色土	ややしまる	粘性なし	
2	10YR2/2	黒褐色土	ややしまる	粘性なし	
3	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	
4	10YR2/2	黒褐色土	ややしまる	粘性なし	
5	10YR2/2	黒褐色土	ややしまる	粘性なし	
6	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	
7	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	
8	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	
9	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	
10	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	
11	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	10YR2/2黒褐色土ブロックを含む
12	10YR2/3	緑褐色土	ややしまる	粘性なし	10YR2/1黒土土ブロックを10%含む
13	10YR2/6	赤褐色土	ややしまる	粘性ややあり	10YR2/2黒褐色土ブロックを10%含む(被熱層)
14	10YR2/3	黒褐色土	しまる	粘性あり	10YR2/4黒褐色土ブロックを5%含む(結晶層)



図129 SI18 (4)

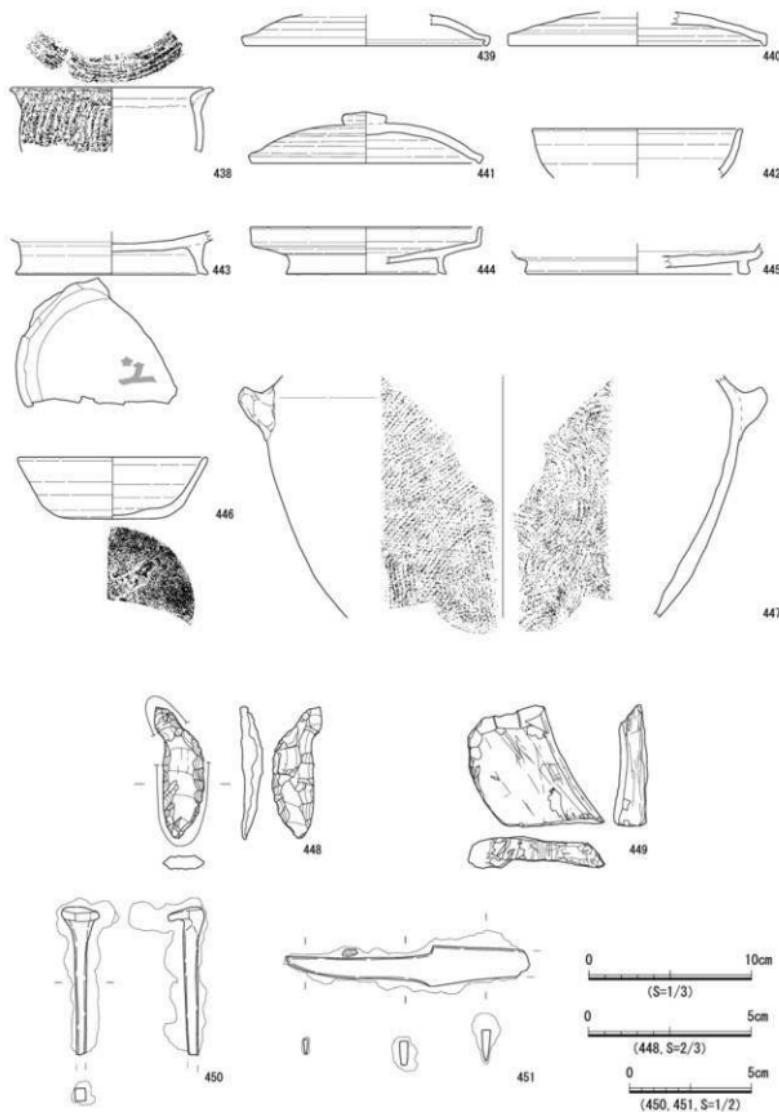


図130 SI18出土遺物

1.60mの範囲で不定形に広がっており、この範囲を除いて貼床を確認した。層厚は0.03m～0.08mを測り、暗褐色土ブロックを含む黒色土で、しまる。床面で確認した遺構は、柱穴2基、カマド1基、壁際溝1条、性格不明土坑6基である。柱穴は、位置関係からP1と床下で検出したP23、P24、トレチ底面で検出したP9と考えられる。P9、P23、P24で柱痕跡を確認し、柱径はそれぞれ12cm、13cm、11cmである。壁際溝は、確認した範囲の壁際を全周する。

カマド 建物の北西辺に構築される。両袖部の残存状況は良好で、北東側の袖の内部には長さ0.2m、幅0.1mの礫が構築材として埋められていた。礫の内側は部分的に被熱していた。袖部の内側では、カマド天井部を構築していたとみられる焼土や炭化物を含む埋土、被熱した土師器を確認した。また、11層は被熱した層で0.47m×0.36mの範囲で明瞭な被熱面を確認した。袖部が貼床の上に盛られていることから、貼床形成後にカマドを構築したと考えられる。

掘方 贊床除去後、柱穴2基、性格不明土坑15基を検出した。P22は南東辺のカマド対面の壁際で検出した長軸長2.02mの大型土坑である。P22の両端では柱穴P23、P24を検出した。

遺物出土状況 カマド埋土から須恵器と土師器が散在して出土した。土師器には被熱した個体も複数含まれる。カマド燃焼部では、被熱面のやや北西側で刀子が出土した。竪穴埋土から土師器、須恵器、石器が散在して出土した。また、P8から須恵器の小片が1点出土した。

出土遺物 438は土師器甕の口縁部である。439～447は須恵器で、440、445、447はカマドから、441は壁際溝から出土した。439～441は壺蓋、442～445是有台坏、446は無台坏、447は把手付甕で、443は底部内面に墨痕が認められる。いずれも美濃須衛窯IV期第3小期のものである。448は石匙である。縦型で両側辺の両面を加工し、刃部を作り出している。449は砥石で、平坦面と側面に砥面をもつ。450は鉄釘で、釘頭が残存する。451はカマドから出土した刀子である。茎部は茎尻まで残存する。茎部の長軸に平行して、柄の木質が残存する。

時期 カマド埋土から出土した土器から8世紀後葉と判断した。

SI21（図131～図133）

検出状況 C地点BE13～14グリッド、III層上面で検出した堅穴建物である。検出した範囲で4.62m×2.23mである。北西部が発掘区外に広がるが、各辺が直線的であることから方形と思われる。平面形はやや明瞭であった。

埋土 2層に分層した。いずれも埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 壁面は確認した3辺でやや開く。壁の残存高は最大で0.28mである。

床面 ほぼ平坦である。貼床は全体で確認し、層厚0.05m～0.13mを測る。褐色土ブロックを含む黒褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、柱穴4基、壁際溝1条、性格不明土坑5基である。位置関係からP1、P2が柱穴となり、発掘区外にあと2基柱穴が存在していると想定すると4本柱の建物と考えられる。また、P1、P2と重複する位置で柱穴P3、P4を検出した。P1、P3、P4で柱痕跡を確認し、柱径は0.10m、0.09m、0.10mである。また、P2の底部で確認した1層は柱痕跡の一部と考えられる。以上から、建物の掘方や貼床はそのままで建て替えが行われたと考えられる。壁際溝は、確認した範囲の壁際を全周する。

掘方 贊床除去後、壁際溝1条、性格不明土坑1基を検出した。壁際溝2は南西辺の一部で確認したが、床面で検出した壁際溝よりやや内側となる。P10は、掘方南東側が竪穴の掘方に接するやや大型

床面

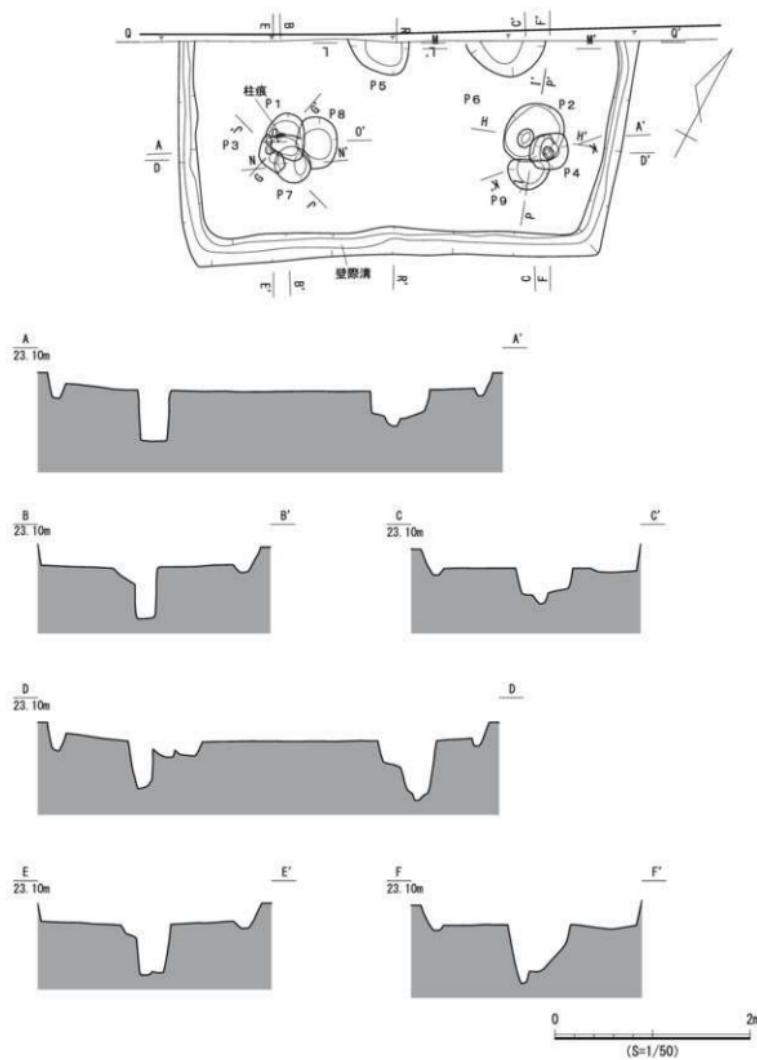


図131 SI21 (1)

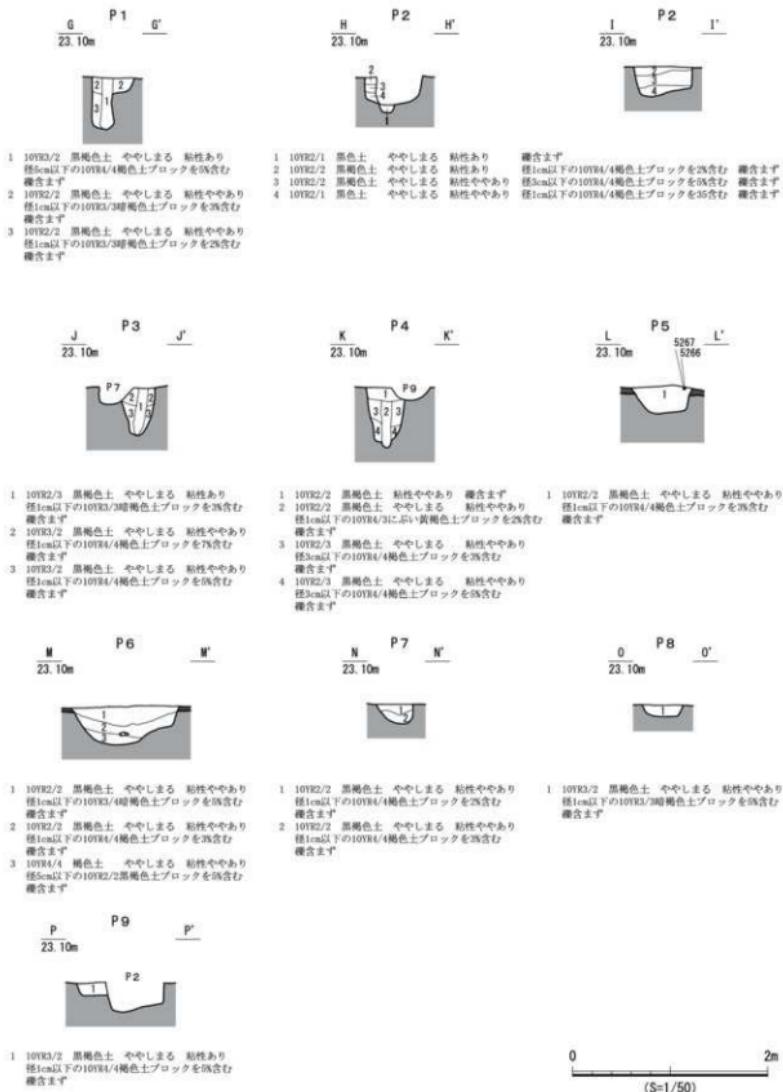


図132 S121 (2)

掘方

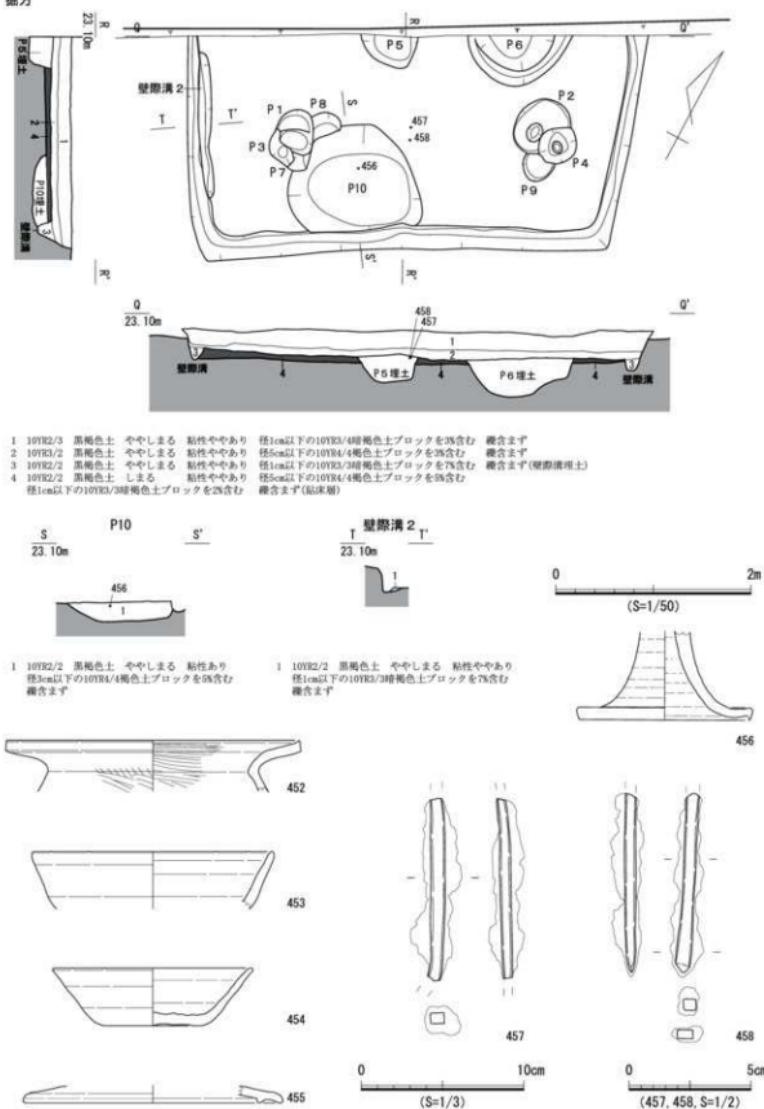


図133 SI21 (3)

の土坑である。

遺物出土状況 床面直上から土師器、須恵器が散在して出土したほか、2点の金属製品（457・458）が近接して出土した。また、P1、P6から土師器の小片が散在して出土した。

出土遺物 452は土師器甕の口縁部である。453～456は須恵器である。453と454は同一個体の可能性がある無台坏、455はP8から出土した坏蓋、456はP10から出土した高坏の脚部で、いずれも美濃須衛窯III期第3小期～IV期第1小期のものである。457は棒状の鉄製品である。断面は方形で鉄鑓の頭部若しくは鉄釘の基部の可能性がある。458は繩である。

時期 床面直上から出土した土器から7世紀後葉と判断した。

SI27（図134・135）

検出状況 C地点 BD16～17グリッド、III層上面で検出した竪穴建物である。検出した範囲で3.70m×0.60mである。南東側の大部分が発掘区外に広がるが、北西辺が直線で、西隅と北隅が直交することから方形と思われる。柱穴は確認できなかったが、方形の掘方と貼床、カマドが確認できたため、竪穴建物と判断した。古墳時代後期の竪穴建物SI25と重複し、本遺構が新しい。平面形はやや明瞭であった。

埋土 2層に分層した。いずれも埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 壁は確認した1辺でやや開く。壁の残存高は最大で0.31mである。

床面 ほぼ平坦である。貼床は全体で確認し、層厚0.07m～0.12mを測る。黒褐色土ブロックを含む暗褐色土で、しまる。床面で検出した遺構は、カマド1基である。柱穴は発掘区外にあると考えられる。

カマド 建物の北西辺、ほぼ中央に構築される。浅く掘り窪めた後、カマドを構築し、その後貼床を形成している。両袖部の残存状況は良好で、内部にはそれぞれ礫が構築材として埋められていた。礫の内側は被熱しており、カマドの構造材と考えられる。また、燃焼部では、人頭大の礫と0.22m×0.13mの明瞭な被熱面を確認した。被熱面の厚さは0.01mであった。

掘方 贊床除去後、底面に遺構は確認できなかつた。

遺物出土状況 カマド内2・3層の焼土を多量に含む埋土から土師器と須恵器が散在して出土した。

出土遺物 459と460はカマドから出土した土師器である。459は長胴甕の底部、460は甕の口縁部である。461～466は須恵器で、461～463、465、466はカマドから出土した。461と462は坏蓋、463是有台坏、464は無台坏、465是有台盤で、いずれも美濃須衛窯IV期第3小期～V期第1小期のものである。466は産地不明の坏身で、美濃須衛窯IV期第3小期～第4小期に併行のものである。462は裏面に墨のようなものが付着する。

時期 埋土とカマド内から出土した土器から8世紀後葉から9世紀前葉と判断した。

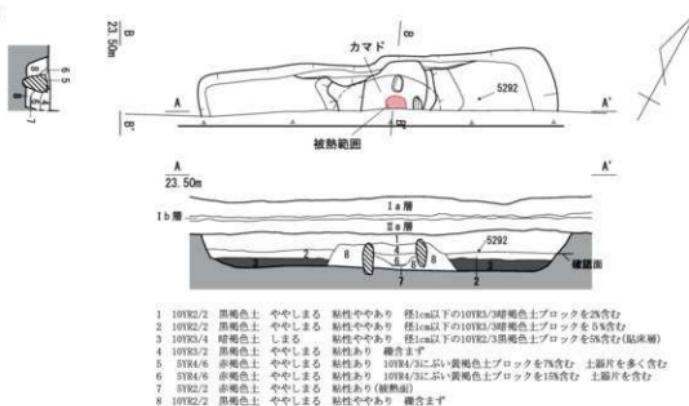
2 土坑

SK380（図136）

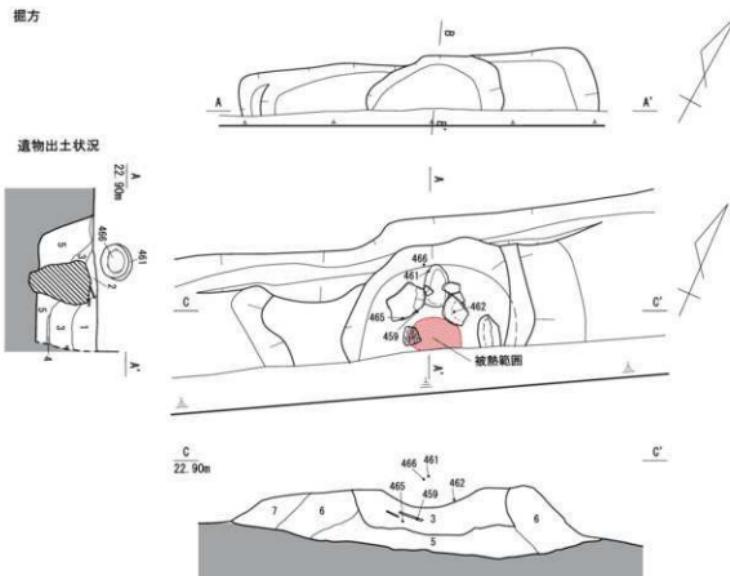
検出状況 C地点 BF2グリッド、III層上面で検出した。古墳時代後期の竪穴建物SI14と重複し、本遺構が新しい。平面形は明瞭であった。

形状 形状は長楕円形である。壁は開き、底面は平坦である。

床面



掘方



遺物出土状況

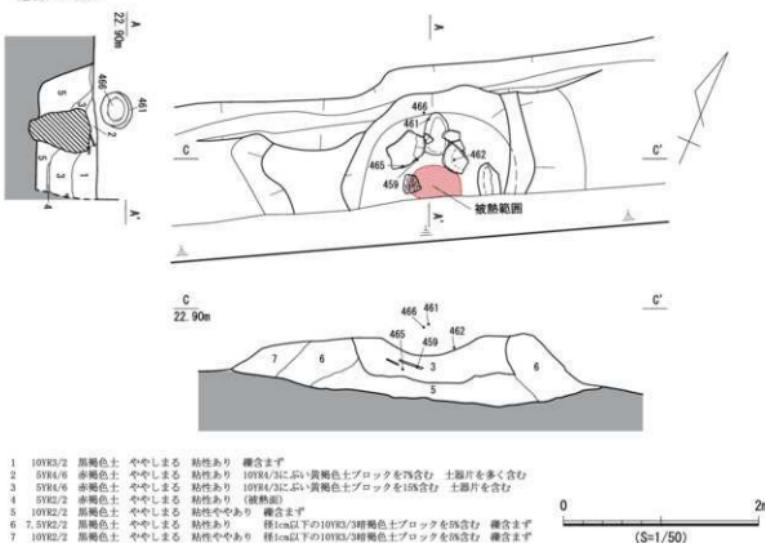


図134 S127

埋土 単層で、焼土やブロック土を含む。埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 底面付近から土師器が散在して出土したが、いずれも小片のため図示していない。

時期 埋土から出土した土器とSI14との重複関係から古代と判断した。

3 柱穴

SP142（図136）

検出状況 C地点 BL2グリッド、SI7の掘削中に検出した。平面形は明瞭であった。SI7の地床炉の焼土範囲を掘り込んでおり、本遺構の底面付近からは鉄塊系遺物と思われるもの（詳細は第4章に示す）が出土していることから、竪穴建物に伴うものではないと判断した。

形状 形状は円形である。壁はほぼ直立し、底面はやや丸い。

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土から縄文土器が散在して出土し、底面付近から鉄塊系遺物と思われるものが出土した。

出土遺物 いずれも小片のため図示していない。

時期 本遺構の底面付近から鉄塊系遺物と思われるものが出土したことから古代以降と考えられる。

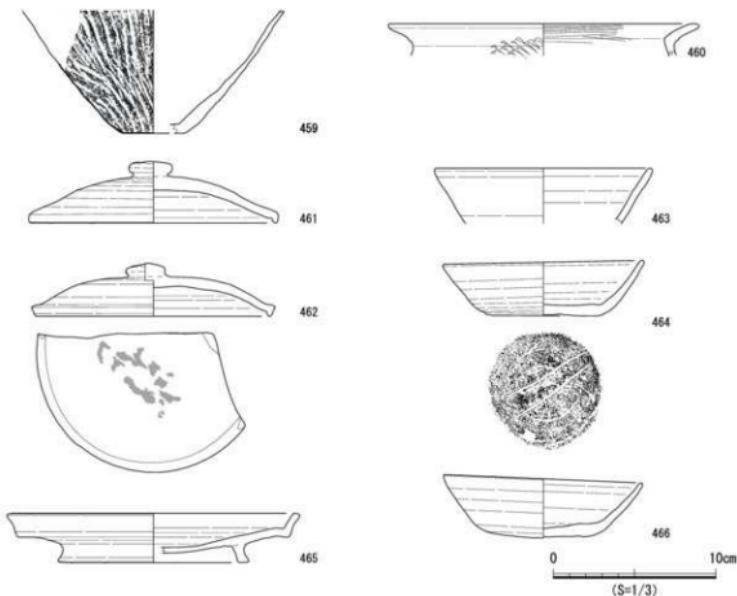
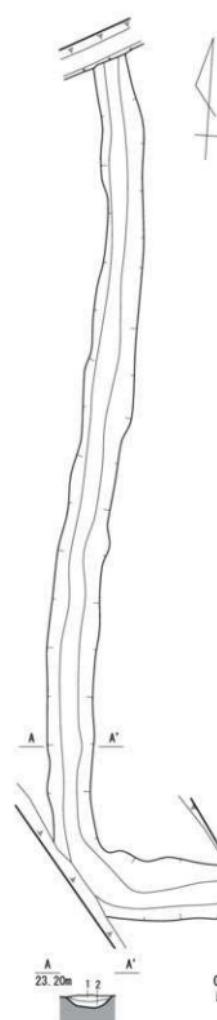
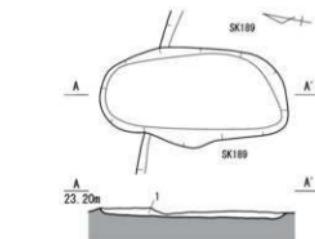


図135 SI27出土遺物

SD 3

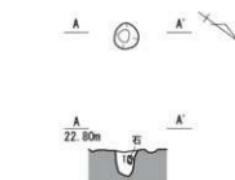


SK380



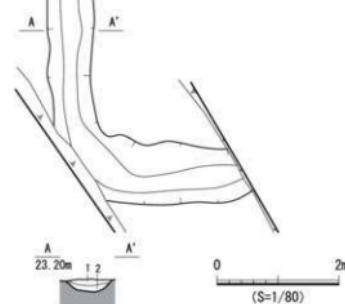
I 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
10YR3/6暗褐色土ブロックを8%含む SK189/6赤褐色土ブロック(壤土ブロック)を25含む

SP142



I 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性あり

0 2m
(S=1/50)



1 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 新分化層あり
2 10YR3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 喀斯特土ブロックを8%含む 新分化層あり

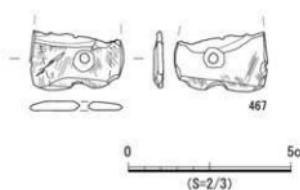


図136 SK380・SP142・SD 3

4 溝

SD3（図136）

検出状況 B地点 AI～AL14 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。重複する全ての遺構よりも新しい。平面形は明瞭であった。

形状 南北方向の溝で、北側は発掘区外となり、南側は AL14 グリッドで東側に直角に屈曲し、発掘区外に延びる。幅 0.40m～0.55m、深さ 0.2m である。壁は開き、底面は平坦である。長軸方位は N-2° - E である。岐阜市教育委員会による発掘調査（以下、「岐阜市調査」という。）で検出した相互に接続しこの字の区画を形成する溝 SD01～SD03¹⁾ と規模や長軸方位がよく似る。また、溝 SD06、SD07²⁾ とは、規模はやや異なるものの長軸方位がよく似る。本遺構や岐阜市調査で検出された溝の南北や東西がほぼ正方位を向くことや、本遺構の東側に直角に屈曲する部分から約 220m 南側に岐阜市調査の東西方向に延びる SD01 が位置することから、本遺構は条里の坪境の溝である可能性がある。

埋土 2 層に分層した。流水の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、石器が散在して出土した。

出土遺物 467 は磨製石鎌で、穿孔が認められる。先端部が欠損し、全体の形状は不明である。

時期 重複関係と出土した土器から中世と判断した。

注

1) 岐阜市教育委員会 1995 「第3章第3節 B区の遺構」『御望遺跡』

2) 1と同じ

第8節 包含層出土遺物

包含層出土遺物として図示したのは、I a層～II b層及び擾乱から出土した縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、石器である。

I a層からは468と469が出土した。468は縄文時代前期の土器で、波状に貼り付けた突带上にC字状の押引きを施すことから、深鉢D類の胴部片と思われる。469は土師器甕の口縁部である。

I b層からは470～474が出土した。470は縄文時代前期の土器の底部片で、やや張り出した画面に刻みを施す。471と472は須恵器である。471は壺で、美濃須衛窯III期第3小期のもの、472は横瓶で、美濃須衛窯IV期第2小期～第3小期のものである。473はスクレイバー2b類で、端部に抉り状の刃部をもつ。474は切目石錐で、両端とも表裏2方向から切り目を入れている。

II a層からは475～579が出土した。475～496は縄文土器である。475は早期の押型文土器で、口縁端部、内外面に山形文を施す。476～496は前期の土器である。476は深鉢A1類と思われるが、突帶を口縁部に1条巡らせる。477は深鉢A3類で口縁部に2条の突帶文を巡らせ、器面から突带上にかけてRL縄文を施す。478は深鉢B類と思われるが、内湾する口縁部に沿って2条の突帶を巡らせ、RL縄文を施す。479は深鉢C3類の口縁部で、口縁端部に幅広の刻みを施し、口縁部には直線や斜行する突帶と貼付け、LR縄文を施す。480は深鉢D1類と思われるが、口縁端部に面を持ち、要所に縦方向の突帶を小突起状に貼り付ける。口縁部に沿って2条の突帶を貼り付けるが、その下には半截竹管による沈線文を施す。481は深鉢D3類と思われ、口縁端部と外面、2条の突带上にLR縄文を施す。482と483は深鉢D類若しくはE類の胴部片と思われる。482は突带上にC字状の押引きを、483は逆く字状の押引きを施す。484は半截竹管沈線文を施す深鉢F類である。485～488は深鉢G類で、485の口縁端部は棒状具側面による幅広の刻み、486の口縁端部にはRL縄文を施す。487の外面はRL縄文を施す。488は、口縁部が小波状となる。489と490は深鉢の胴部片で、489は外面にLR縄文を施す。491～493は底部片で、やや張り出した画面に刻みを施す。494～496は浅鉢である。494と495は胴部片で、沈線による文様を施す。496は口縁部に沿って円孔を一定間隔に巡らせる。497～501は弥生土器である。497は壺の口縁部で、端部を拡張し面をつくり、擬凹線文を施す。498と499は同一個体の壺と思われる。頸部外面下に2段の直線文とその間に刺突文を施す。500は壺の口縁部、501は壺の底部である。502～518は土師器である。502～512は甕の口縁部、513は甕の底部である。514は器台で、脚部に直径約1cmの透孔を4方向に配する。515と516は瓶の把手で、成形時のエビオサニ痕が認められる。517は暗文土師器で、内面に放射状の暗文が認められる。518は土師器皿である。519～547は須恵器である。519は産地不明の畿内系のミニチュア壺で、陶邑編年II型式～III型式併行のものである。520～522は甕で、520と521は美濃須衛窯IV期第3小期、522は美濃須衛窯V期のものである。521は体部内面に同心円状の当て具痕、体部外面に平行状の叩き痕がみられる。523～528は坏蓋である。523は美濃須衛窯III期第3小期のもの、524と525は蝮ヶ池窯式のもの、526～528は産地不明の畿内系で、526と527は陶邑編年II型式第5段階併行のもの、528は陶邑編年II型式第5段階～第6段階併行のものである。529と530は坏身である。529は美濃須衛窯III期第1小期のもの、530は産地不明で美濃須衛窯IV期第1小期併行のものである。531～534は有台坏で、531～533は美濃須衛窯IV期第3小期、534は美濃須衛窯V期第1小期のものである。535は無台坏で、美濃須衛窯IV期のものである。536は高坏

で、岩崎 17 号窯式～岩崎 41 号窯式のものである。537～539 は甌で、537 は産地不明の畿内系で陶邑編年 II 型式第 5 段階～第 6 段階併行のもの、538 は産地不明の畿内系で陶邑編年 II 型式第 6 段階併行のもの、539 は美濃須衛窯 II 期後半～III 期のものである。540 は碗で、美濃須衛窯 V 期第 1 小期のものである。541 は鉢で東山 15 号窯式～岩崎 41 号窯式のものである。542 は緑釉陶器の碗、543 は灰釉陶器の碗、544 は灰釉陶器の皿で、いずれも折戸 53 号窯式のものである。542 は全面に緑釉が施され、胎土は軟質で釉は剥離が激しい。545 は山茶碗の小皿の底部で、縁辺部を打ち欠き円盤状土製品としている可能性がある。546 は大畑大洞 4 号窯式～大谷洞 14 号窯式の東濃型山茶碗、547 は尾張型山茶碗第 7 型式の片口鉢である。548～552 は打製石鏟である。548 は 1a 類で、両側の脚部をやや欠損する。549 は 1d 類で、脚部は尖る形態となる。550 は 2 類で、平基となる。先端を欠損する。551 は 1b 類で片側の脚部を欠損する。552 は 1d 類で、片側の脚部のみ尖る形態となる。553 は石錐 4 類で、両側辺に加工を加えて錐部を作り出し、錐部断面は菱形となる。554～557 は石匙である。554～556 は両面調整により外湾する刃部を作り出している。557 は両面調整により直線的な刃部を作り出している。558～562 はスクレイバーである。558 はスクレイバー 1b 類で、側辺に外湾する刃部をもつ。559 はスクレイバー 1a 類で、側辺に直線的な刃部をもつ。560 と 561 はスクレイバー 1b 類で、側辺に外湾する刃部をもつ。562 はスクレイバー 3b 類で、両側辺にやや外湾する刃部をもち、末端で先端を形成する。563 は楔形石器で、相対する 2 辺に潰れ状や階段状の剥離が認められる。564 は打製石斧で、両側面に摩滅が認められ端部が鈍くなっている。565 と 566 は磨製石斧である。565 は刃部にのみ明瞭な研磨痕が認められる。566 は側縁部に斜め方向の成形痕をもち、刃部付近には継方法の使用痕が認められる。567 は石核で、自然面を打点とし、3 つの作業面をもつ。568～572 は MF である。573 は打欠石鍤で、細長い自然石を利用している。574 は切目石鍤である。575～578 は磨石・凹石類である。575 は 1c 類である。576 は 2a 類で、平坦面に磨痕と敲打痕が認められる。577 と 578 は 4 類である。579 は块状耳飾で、半分程欠損しており、補修孔が開けられている。ほぼ円形で、孔部がほぼ中央に位置する形態と思われる。

II b 層からは 580～613 が出土した。580～602 は繩文時代前期の土器である。580 は口縁部に沿って 1 条の突帯を巡らせ、突帯上を指で押圧する。外面は条痕による調整が残ることから、前期前半の土器と思われる。581 と 582 は深鉢 A 1 類と思われ、口縁部に沿って 1 条～2 条の突帯を巡らせ、LR 繩文を施す。583 は深鉢 A 3 類で、波状口縁となるが、口縁部に沿って 3 条の突帯を貼り付ける。584 と 585 は深鉢 B 1 類と思われるが、口縁部に沿って 2 条～3 条の突帯を巡らせ、突帯上に LR 繩文や C 字刺突を施す。586 と 587 は深鉢 B 4 類で、口縁部に突帯による直線文や斜行文、弧状文を施す。588 は深鉢 C 2 類で、突帯による直線文や斜行文、弧状文を施し、突帯上は LR 繩文を施す。589 も 588 と類似した文様を施し、深鉢 C 類と思われる。590 は深鉢 E 類の口縁部であるが、口縁端部内面に C 字状の押引きを施す。外面には C 字状の押引きを伴う突帯による直線文や弧状文を施す。591 は深鉢 E 類の胴部片で、逆く字状の押引きを伴う突帯文を施す。592 は深鉢 D 類若しくは E 類の胴部片で、C 字状の押引きを伴う突帯文を施す。593 と 594 は深鉢 F 類で、半截竹管による C 字状の押引きによる文様を施す。595 は深鉢 F 類の胴部片で、半截竹管による沈線文を施す。596 と 597 は深鉢 G 類で、外面に LR 繩文を施す。597 は口縁端部にも LR 繩文を施し、やや張り出した底部外面に刻みを施す。598 と 599 は底部外面がやや張り出し、600 は他の底部片と比較して厚みがあり、C 字状の押引きを伴う突帯文が若干

残る。601は底部外面が大きく張り出し、8箇所程度抉るように凹ませる。602は赤彩が残るため鉢と思われるが、底部外面が大きく張り出し、胴部には半截竹管による沈線文が認められる。603は土師器壺の口縁部である。604～607は須恵器である。604は猿投産の高坏で、東山61号窯式～蝮ヶ池窯式のものである。605は有台鉢で、美濃須衛窯V期第1小期のものである。606は長頸瓶で、美濃須衛窯IV期第3小期のものである。体部外面に自然釉が認められる。607は碗で、美濃須衛窯V期第1小期のものである。608は石鐵1b類で、先端と片側の脚部を欠損する。609は石鐵1e類で、両側の脚部を欠損する。610は石匙で、両面調整により外湾する刃部を作り出している。611と612は打欠石鍤である。612は両端とも表裏面に剥離痕が認められる。613は切目石鍤である。

614～619は攪乱から出土した。614～617は前期の縄文土器である。614は深鉢C類の口縁部の可能性が考えられるが、2条の突帯間に弧状の突帯を貼り付け、突带上にはC字状の押引きを施す。615は深鉢D類若しくはE類の胴部片と思われるが、突带上に逆く字状の押引きを施す。616は底部外面がやや張り出し、617は底部外面を8箇所ほど抉るように凹ませる。618は土師器瓶の把手で、成形時のユビオサエ痕が認められる。619はR.F.である。

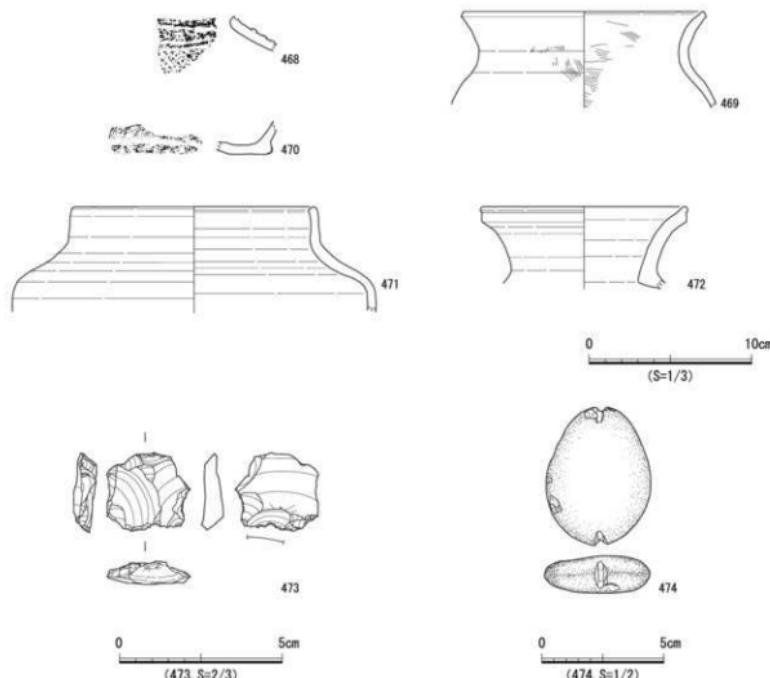


図137 包含層出土遺物（1）

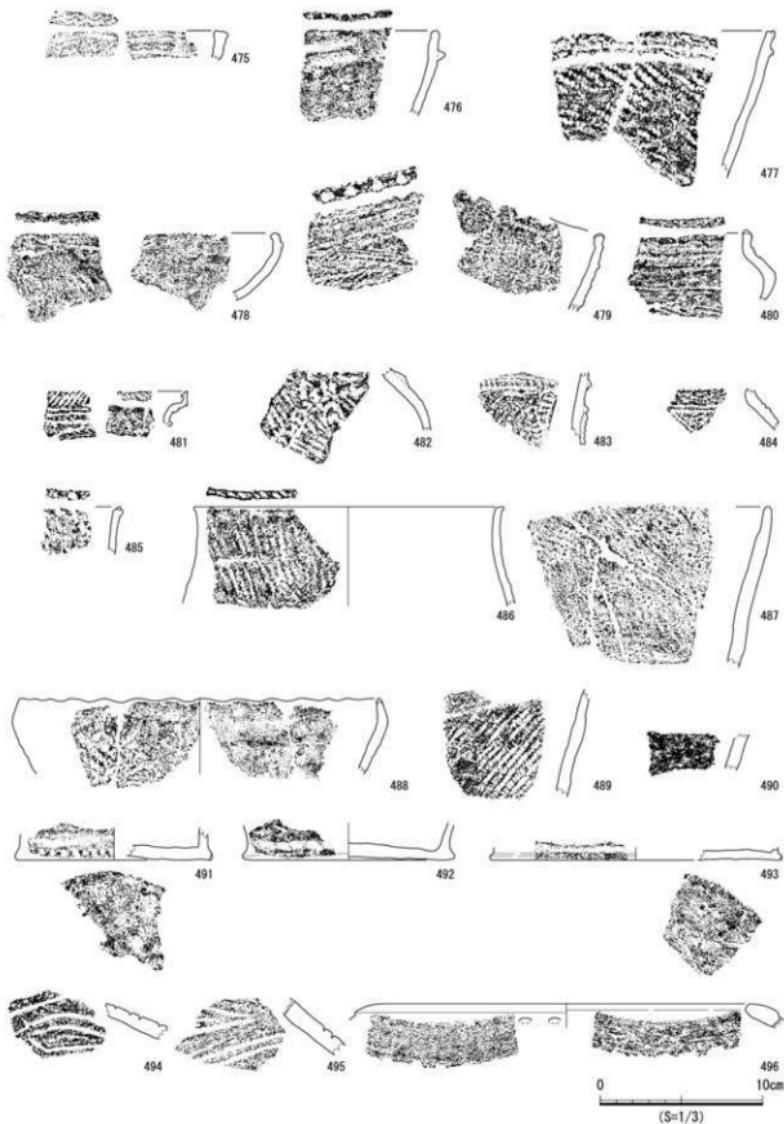


図138 包含層出土遺物（2）

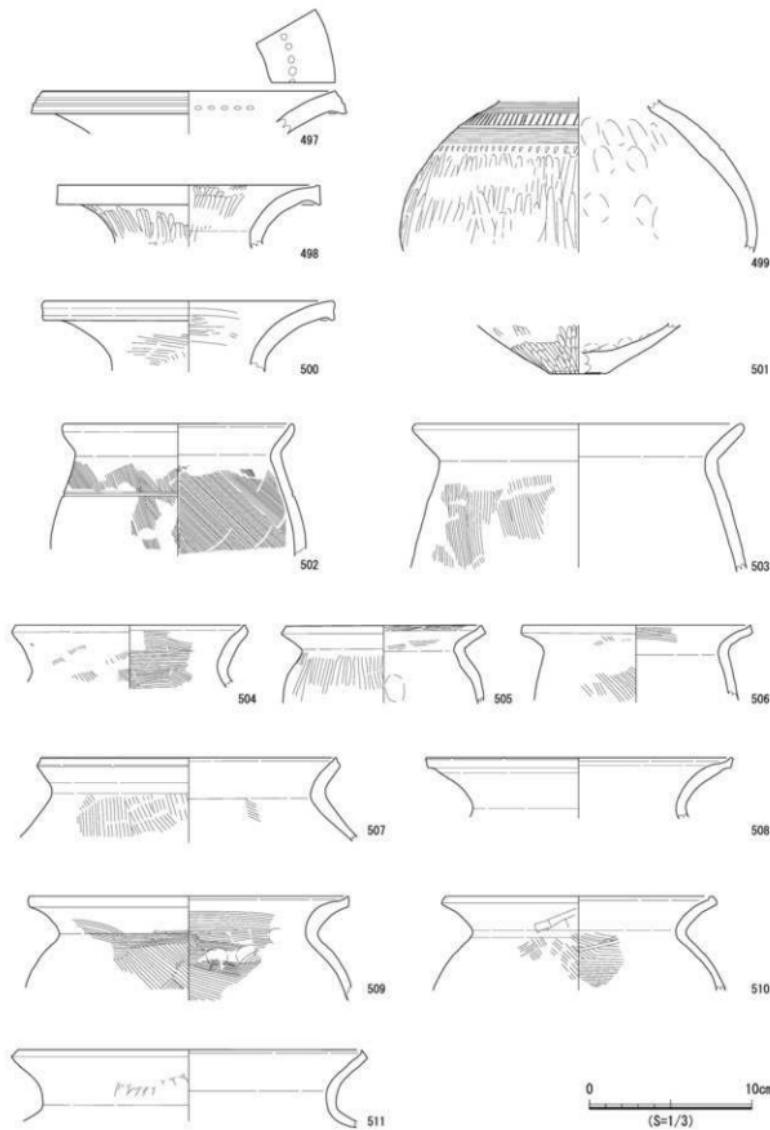


図139 包含層出土遺物（3）

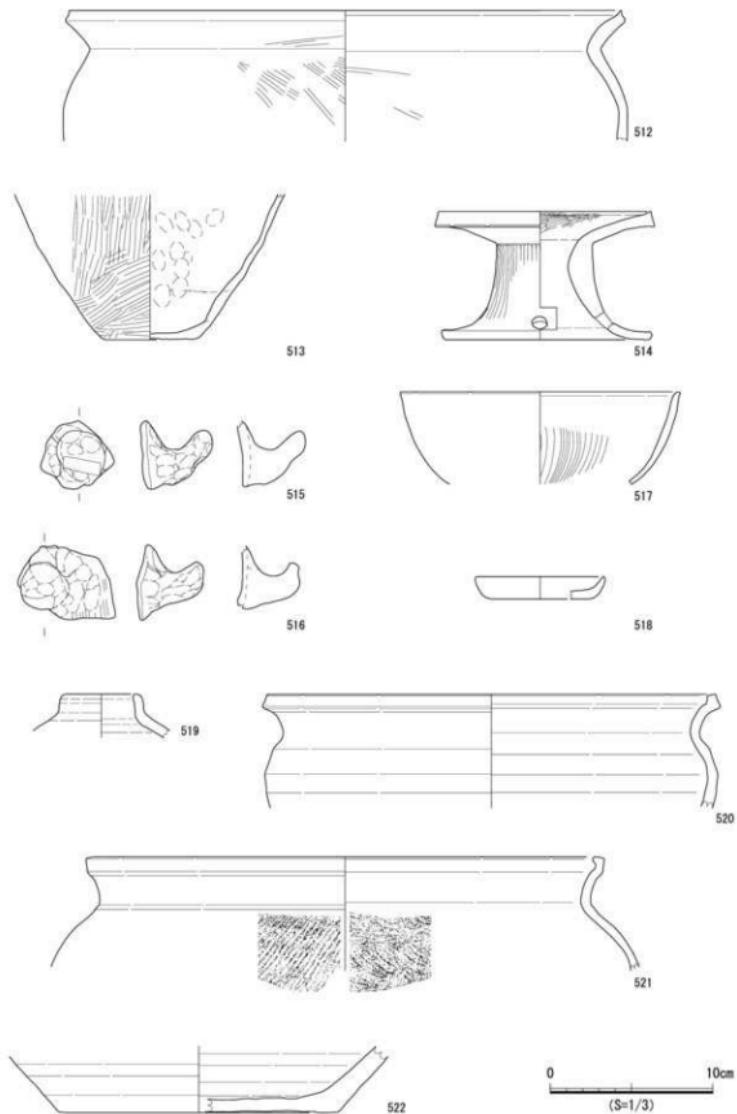


圖140 包含層出土遺物（4）

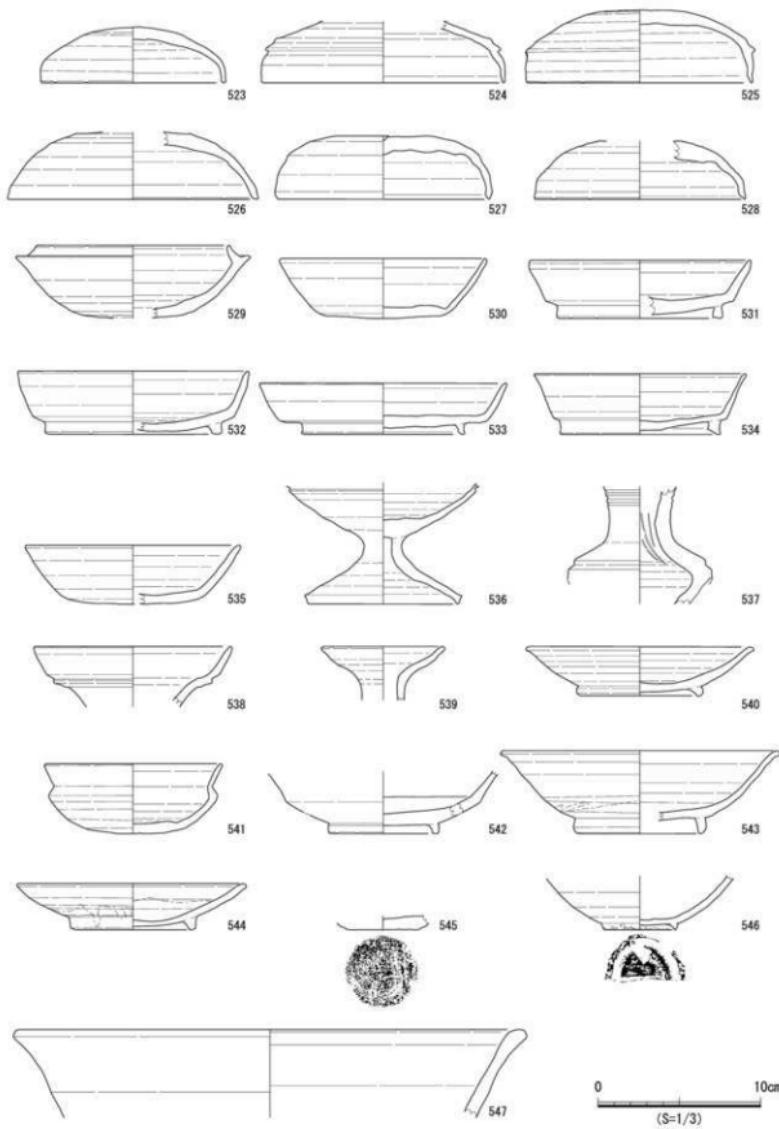


図141 包含層出土遺物（5）

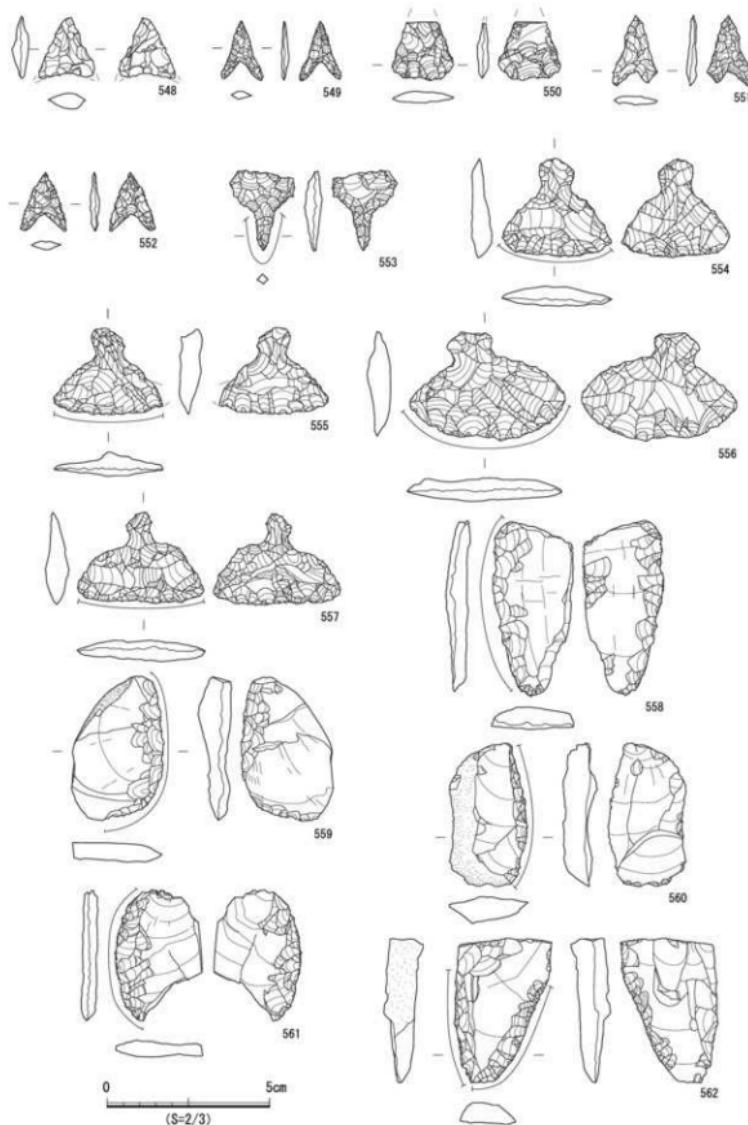


圖142 包含層出土遺物（6）

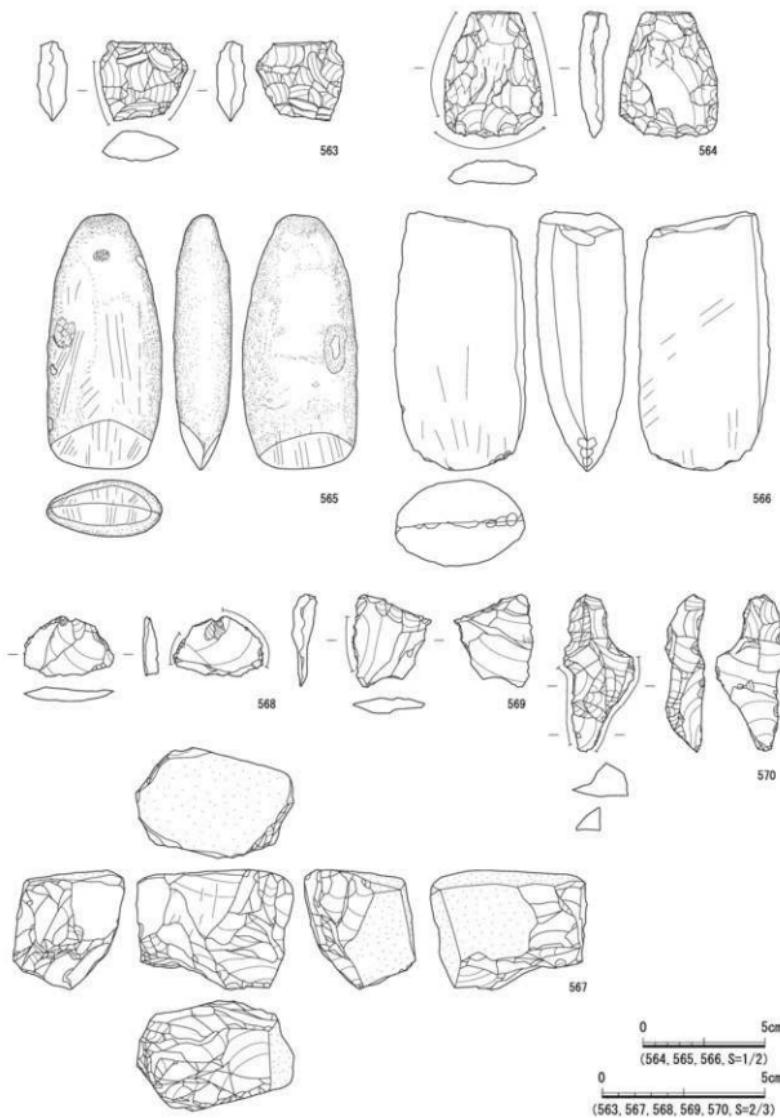


図143 包含層出土遺物（7）

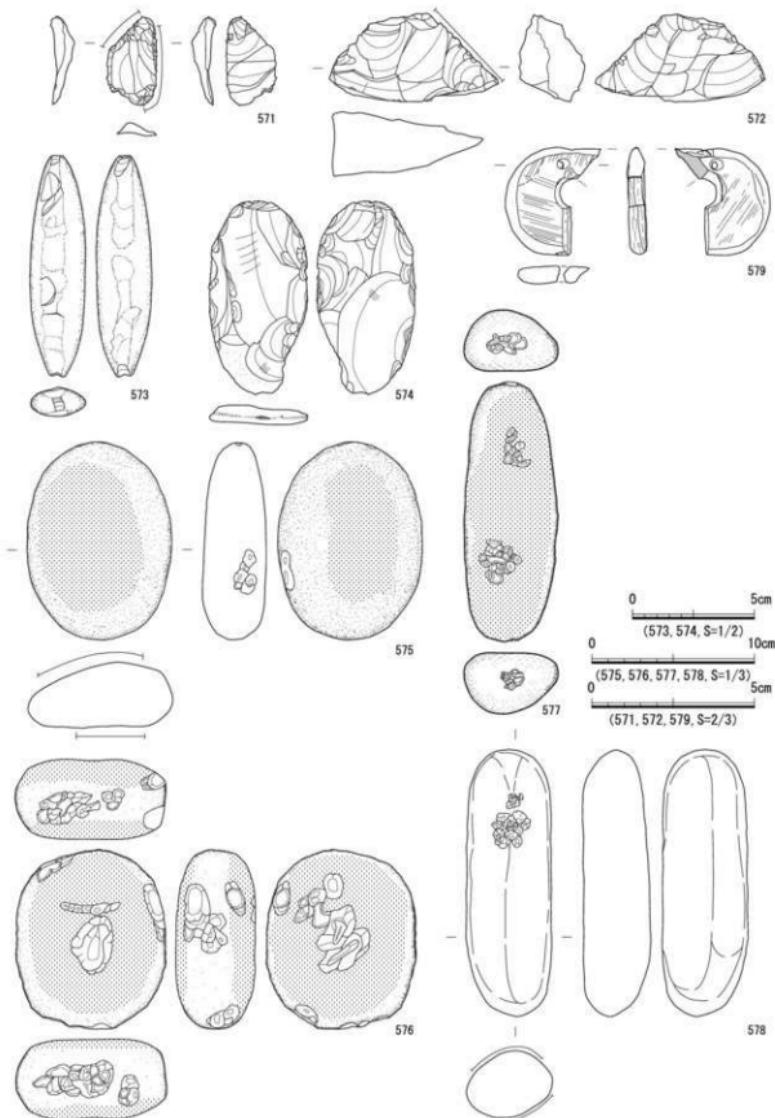


圖144 包含層出土遺物（8）

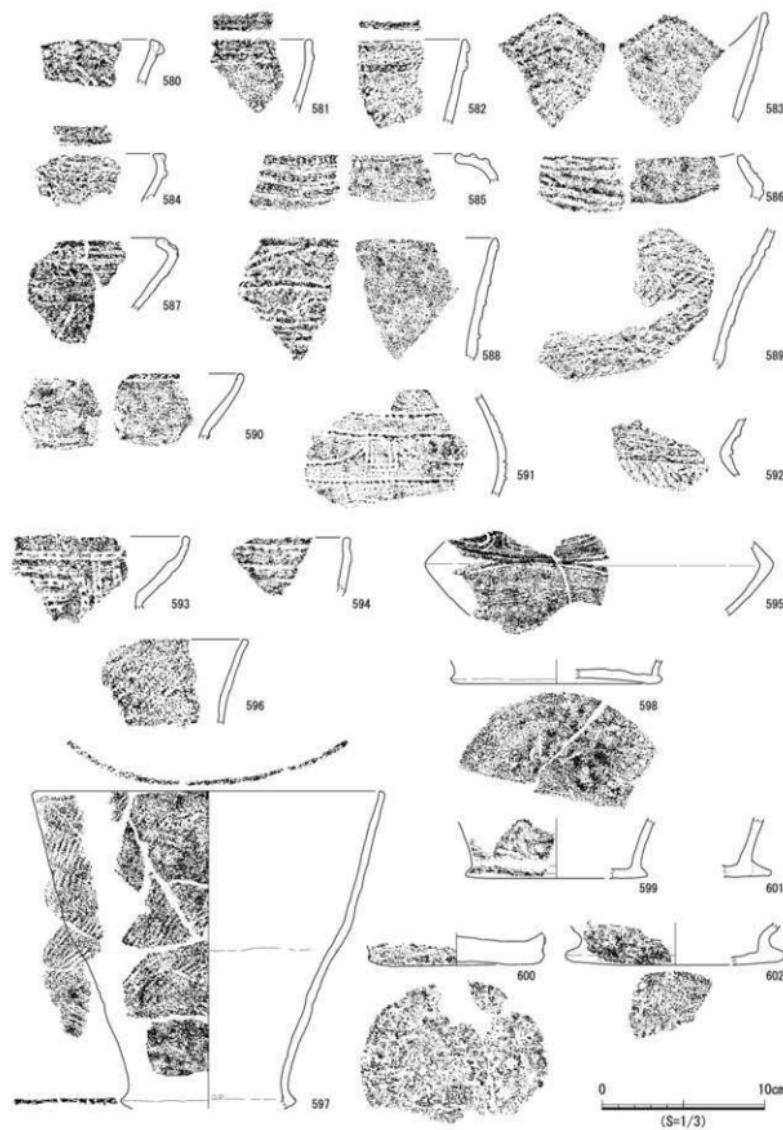


図145 包含層出土遺物（9）

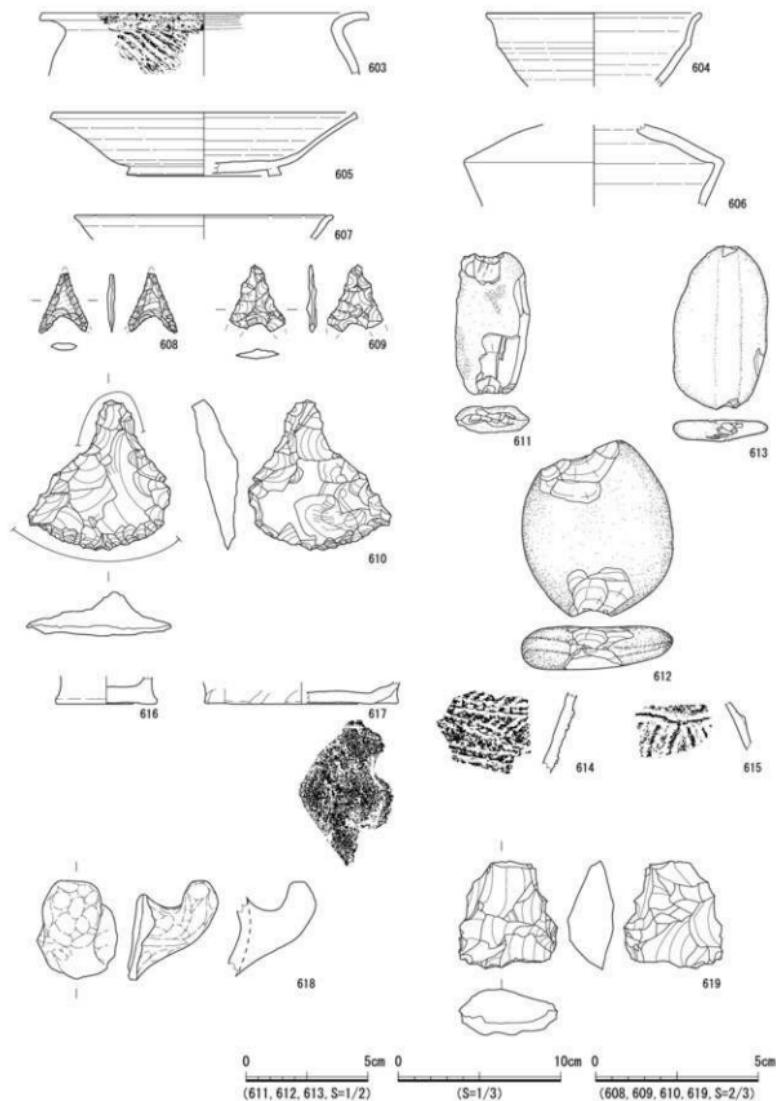


図146 包含層出土遺物（10）

報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第144集

御 望 A 遺 跡

(第1分冊)

2020年2月28日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ